

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第108集

本郷の場古墳群

1990

群馬県教育委員会

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第108集

本郷の場古墳群

1990

群馬県教育委員会

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本郷的場古墳群の調査は、昭和40年代に進められた群馬用土地改良事業に伴い実施されました。

群馬用土地改良事業は、利根川水系水資源の灌漑利用を図るため、赤城山南麓・榛名山東南麓・子持山南麓の市町村を対象にして大規模に実施され、この地域の農業近代化に大きく貢献しました。しかし、土地改良の対象となった地域は、県内でも有数の埋蔵文化財の分布地であり、土地改良事業の施工によって貴重な文化財が消滅することになりました。

本郷的場古墳群も消滅する文化財の一つとして、昭和44年度に群馬用土地改良地域文化財調査委員会により調査が実施され、記録保存されました。調査成果については、概報が刊行され報告されていましたが、未報告の資料もあるため、本年度、当事業団が群馬県教育委員会の委託を受けて整理事業を行い、ここに改めて「本郷的場古墳群発掘調査報告書」を作成することができました。

発掘調査後20年の歳月を経て、調査関係者の総意・協力を得て調査報告書が発刊できたことは誠に意義深いものがあります。関係者の苦労と熱意に対し、心から感謝申し上げますと共に、本報告書が広く県民各位、研究者、教育機関等に活用され、本県の歴史を解明する上での資料として役立てられることを願い、上梓の言葉とする次第であります。

平成2年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は過年度公共整理事業に伴う委託事業であるとともに、文化財保護法とその施行令等に基づき作成した報告書である。
2. 発掘調査は群馬県農政部耕地開発課からの委託を受け群馬県教育委員会がさらに群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会に委託して実施された。発掘調査は昭和44年10月24日から11月13日の間および昭和45年2月2日から2月14日の間に実施された。その際の組織は次のとおりである。
調査主体 受託者 群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会、委託者 群馬県教育委員会
調査担当者 梅沢重昭（群馬県教育委員会社会教育課社会教育主事補・現群馬県教育委員会文化財保護課課長）
調査員 鬼形芳夫・平野進一、松尾宜方（現鎌倉市教育委員会）以上は群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会調査員
旧報告書名 『群馬用土地改良地域埋蔵文化財発掘調査報告書（昭和44年度概報）』（群馬県教育委員会・群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会）1969
総頁 50頁 うち本文41頁・写真9頁・挿図14葉（内容は昭和44年に実施された他4遺跡を含む）
報告作成担当 梅沢重昭 執筆 梅沢重昭・松本浩一（宮城村小学校教諭・現財群馬県埋蔵文化財調査事業団）・鬼形芳夫・平野進一・松尾宜方
3. 整理体制と整理期間
整理主体者 群馬県教育委員会・財群馬埋蔵文化財調査事業団
期 間 平成元年5月30日～平成2年3月31日
整理従事者 平成元年度 金子恵子・細井敏子・小久保トシ子・矢島三枝子・本多琴恵・近藤若菜・西沢智代
遺物保存のための化学処理 関邦一・北爪健二・小材浩一
遺物写真撮影 佐藤元彦
遺物図化 当団調査研究部第一課 スリー・スペース土器実測班 担当真下高幸（当団調査研究部第1課長）・長沼久美子・佐藤美代子・高梨房江・尾田正子・千代谷和子・八峠美津子
整理担当 大江正行
事務・接渉 松本浩一・田口紀雄・神保侑史・巾隆之・住谷進・小林昌嗣・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏
4. 本書の作成・編集は大江正行がこれに当たった。本報告のうち調査時点の内容は概報の記述を基にして、再度、各執筆により校訂された内容を収録し、文末に記述者名を明記した。さらに編集・整理から得られた所見を大江が記述した。校訂者は次のとおりである。
A号墳—鬼形芳夫、C号墳—平野進一、D号墳—松尾宜方、E号墳—梅沢重昭、調査に至る経緯と経過・周辺遺跡第2章・考察1. 本郷の場古墳群の形成—梅沢重昭
最終責任は大江にある。
5. 本書の作成にあたり、次の機関、諸先生、諸兄の教示・協力を受けた。
調査担当者 梅沢重昭（群馬県教育委員会文化財保護課） 調査員および調査参加者 神保侑史・鬼形芳夫・石塚久則（群馬県埋蔵文化財調査事業団）・平野進一（群馬県立歴史博物館）
遺物照会 石川正之助（群馬県立歴史博物館）、津金沢吉茂（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
協力機関 群馬県工業試験場並に化学課の皆さんと小沢達樹氏。
内容教示 当団職員と県下在住の文化財担当職員の皆さん。
6. 本遺跡の記録保存資料および出土資料並に整理浄書図等資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管、管理されている。
7. 遺跡名称は旧報告書には「榛名町本郷古墳群」さらに本郷古墳群中の「第Ⅱ支群」と呼称されたが「第Ⅰ支群」に相当する奥原古墳群は1983『奥原古墳群』（財群馬埋蔵文化財調査事業団）として名命公刊され、既に奥原古墳群の名称が定着しているため、支群名称は意味を成さなくなった。そのため本書公刊前に本古墳群をさして一般呼称となってしまう「本郷の場古墳群」を本遺跡の遺跡名称とする。本郷は大字名、的場は小字名称である。詳しくは本書第4図を参照。
8. 本書の凡例は次のとおりである。
 - (1) 遺構方位は記録調査図面中の磁北を用いたが、同一古墳であっても記録方位に差があるので各図中に摺り所を明記した。およそ磁北は地理院1：25,000「下室田」（1982）によれば、座標北に対し、およそ6°50'西偏する。
 - (2) 縮少率は墳丘全体図および調査区設定図を1：100、石室実測図を1：40とし、そのほかは各遺構図に縮少率を標記してある。遺物実測図は金属製品に1：2を、土器について1：3を原則とし、数点例外はあるが、それらを含め、遺物図に縮少率を標記してある。
 - (3) 遺構写真は、調査担当および調査員による。遺物写真について佐藤元彦によるが、拡大は大江による。顕微鏡写真は北爪による。遺物写真は金属製品を、おおむね1：2、土器類をおおむね1：3で、埴輪類を1：4で作成した。
 - (4) 遺構・遺物に係わる細かな凡例は、各篇の冒頭で示し、そのほかトーンなどは図傍に示した。
9. 第4図中の御門城跡と七曲砦跡図は山崎一先生による。山崎先生は本書作成中の平成2年1月3日に他界され、生前は群馬県文化財保護審議会委員として当団の城柵調査に欠くことのできない指導役として活躍された。ここに例言の項を借り、慎んで冥福を御祈りします。

本文目次

第1篇 調査に至る経緯と経過	5	第4篇 検出された遺構と遺物	13
第1章 発掘調査に至る経緯	5	的場A号墳	15
第2章 発掘調査の経過	6	的場C号墳	24
第2篇 調査方法と基本層位	7	的場D号墳	31
第1章 調査方法	7	的場E号墳	43
第2章 基本層位	7	特殊遺物	64
第3篇 周辺遺跡	8	第5篇 遺物観察	66
第1章 周辺遺跡	8	第6篇 的場古墳群出土土器の胎土分析	77
第2章 本郷的場古墳群の位置	11	第7篇 考察	80

図版目次

第1図 群馬県における完新鮮示標テフラ層分布図 (『考古学ジャーナル157』1979を加除筆)	7	第25図 的場D号墳石室前出土遺物図	39
第2図 層位概念柱状図	7	第26図 的場D号墳石室・石室前出土遺物図	40
第3図 周辺遺跡分布図	9	第27図 的場D号墳と注記のある遺物図	40
第4図 本郷的場古墳群と周辺の古墳	9	第28図 的場E号墳(稲荷塚)調査区と墳丘裾部検出位置図	44
第5図 的場古墳群A～E号墳位置関係図	14	第29図 的場E号墳石室・石室上面遺構図	45
第6図 的場A号墳調査区と墳丘裾部検出位置図	17	第30図 的場E号墳出土赤色顔料塗彩埴輪図	46
第7図 的場A号墳土層断面図	18	第31図 的場E号墳石室内出土遺物図	47
第8図 的場A号墳石室遺構図	19	第32図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図	48
第9図 的場A号墳石室内出土遺物図	20	第33図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図	49
第10図 的場A号墳と注記のある遺物図	20	第34図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図	50
第11図 的場A号墳と注記のある遺物図	21	第35図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図	51
第12図 的場A号墳と注記のある遺物図	22	第36図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図	52
第13図 的場C号墳調査区と墳丘裾部検出位置図	26	第37図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図	53
第14図 的場C号墳土層断面図	27	第38図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図	54
第15図 的場C号墳石室遺構図	28	第39図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図	55
第16図 的場C号墳石室内出土遺物図	29	第40図 的場E号墳第IVトレンチと注記のある遺物図	56
第17図 的場C号墳と注記のある遺物図	30	第41図 的場E号墳第IVトレンチと注記のある遺物図	57
第18図 的場D号墳調査区と墳丘裾部検出位置図	32	第42図 的場E号墳南トレンチと注記のある遺物図	58
第19図 的場D号墳土層断面図	33	第43図 的場E号墳と注記のある遺物図	59
第20図 的場D号墳石室天井被覆状態図	34	第44図 的場C・D号墳周辺と注記のある遺物図	64
第21図 的場D号墳石室天井石と転び状態図	35	第45図 的場E号墳第IVトレンチ出土古瓦図	64
第22図 的場D号墳石室遺構図	36	第46図 的場A・C、C、E号墳出土中・近世遺物図	65
第23図 帯金具出土状況図	37		
第24図 的場D号墳石室・石室前出土遺物図	38		

写真図版目次

写真図版1 的場A号墳調査状況	85	写真図版9 的場E号墳調査状況	93
写真図版2 的場A号墳出土遺物	86	写真図版10 的場E号墳調査状況	94
写真図版3 的場C号墳調査状況	87	写真図版11 的場E号墳出土遺物	95
写真図版4 的場C号墳出土遺物	88	写真図版12 的場E号墳出土遺物	96
写真図版5 的場D号墳調査状況	89	写真図版13 的場E号墳出土遺物	97
写真図版6 的場D号墳調査状況	90	写真図版14 的場E号墳出土遺物	98
写真図版7 的場D号墳出土遺物	91	写真図版15 的場E号墳出土遺物	99
写真図版8 的場D号墳出土遺物	92	写真図版16 的場E号墳、C・D号墳周辺の表採遺物ほか	100

第1篇 調査に至る経緯と経過

第1章 発掘調査に至る経緯

群馬用土地改良事業は水資源開発公団による幹線水路の完成にともない、各地で盛んに進められた。この事業の完成目標年度は昭和47年度であり、このことから見れば昭和38年に着工された本事業は、今年度で全体事業の大半を完了していることにもなるが、群馬県営事業を中心に進められている田畑輪換、畑地灌漑を主目的とした圃場整備事業は現在急ピッチで進行中である。こうした土地改良事業はこの地域に分布する埋蔵文化財にあたる影響が大きく、このことから県教育委員会ではこれら土地改良事業の対象となる地域に分布する埋蔵文化財の分布調査を昭和43年度、44年にわたって実施し、その所在を明らかにするとともに、埋蔵文化財保護と開発との調整をはかる資料の作成を急いだ。昭和43年度には赤城幹線地域の埋蔵文化財分布調査を完了し、今年度は榛名幹線地域を対象として実施中であるが、すでに事業計画が進行している地域では、この分布調査と平行して、文化財保護上、必要な措置を要するものがあり、緊急発掘調査を実施し、その記録保存の措置を講じなければならないものも確認されたのである。すなわち、今年度における土地改良事業地域においては、下記の地域において埋蔵文化財包蔵地が文化財保護上大きな影響を受けることが確認された。

- (1) 子持村吹屋地区 古墳 (2) 北橋村分郷八崎地区 縄文～土師時代遺物包蔵地
 (3) 宮城村大前田、馬場地区 縄文～土師時代遺物包蔵地
 (4) 新里村新川地区 縄文～土師時代遺物包蔵地 (5) 榛名町本郷地区 古墳

これらの5地域は榛名町本郷地区が田畑輪換の圃場整備である他は畑地灌漑を目的とした圃場整備事業であった。前者の場合、埋蔵文化財の現状保存をはかる上では極めて困難なものであり、計画地域内で保存するということとともに、事前の記録保存を目的とした調査を実施せねばならず、後者においても、畦畔、道路のつけかえなどの区画整理、また給水施設の導水管の埋設工事にともない破壊される遺跡もある。事業実施前の緊急調査が必要となるわけで、群馬県教育委員会では昭和44年度当初予算において、県営事業実施地域内に分布する埋蔵文化財については国庫補助事業として調査を実施する計画を立てた。

すなわち当初予算142万円の事業規模としたが最終的には、残り58万円を追加補正し、県負担金100万円、国庫補助金100万円、総額200万円の事業費を計上したのである。この事業の実施計画については上記の5地区の埋蔵文化財発掘調査を下記により立案した。

(事業計画)

調査は群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会への委託事業として実施することにした。このため、県教育委員会及び関係町村教育委員会（子持村、北橋村、宮城村、新里村、榛名町）、これに群馬用土地改良事業側の群馬県農政部耕地開発課、群馬用土地改良事業所関係者と協議し、昭和44年7月、上記の委員会（委員長 田村寧）を結成した。この調査委員会の結成の主旨は、当該土地改良事業の進展と調整をはかり、円滑な調査の運営をはかることを目的としたものである。これにもとづいて昭和44年7月、群馬県教育委員会は群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会（委員長 田村寧）との間に委託契約を締結し、次いで、昭和44年10月、補正予算の決定にもとづいて、さらに委託契約内容を変更し、予算総額200万円の事業規模の調査事業に着手した。（梅沢）

第2章 発掘調査の経過

本調査事業は昭和44年度に実施される群馬用土地利用改良事業によって影響を受ける埋蔵文化財を対象とした。これらの埋蔵文化財は前章で述べたところの5地域に分布するものであり、調査の目的は工事前の緊急調査を実施し、対象となる埋蔵文化財の性格、規模などを明確にするとともに、土地利用改良事業との文化財保護の調整を目的とした。

調査はまず、子持村吹屋古墳群から着手し、次表のとおり実施した。

	地 元	種 類 (古墳数)	期 日	土地利用種別
1	子持村吹屋枕屋	古墳2基	8月10日～10月31日	畑地灌漑区画整理
2	北橋村分郷八崎	縄文～土師集落址約3,000㎡	9月21日～10月1日	〃
3	榛名町本郷的場	古墳4基	10月24日～11月13日 2月2日～2月14日	田畑輪換圃場整備
4	宮城村馬場矢次	縄文遺物包蔵地約500㎡	11月25日～12月7日	畑地灌漑区画整理
5	新里村新川鑄木	縄文～土師集落址約600㎡	2月15日～2月28日	畑地灌漑区画整理

榛名町本郷古墳群のある榛名町地域における群馬用土地利用改良事業は田畑輪換圃場整備である。この地域内に所在する遺跡は一部に土師器及び須恵器破片の散布する地点も存在したが特に注意されるのは古墳の分布であった。これら古墳群は烏川北岸の段丘上に分布し、東西約1,000m、巾300m内外の丘陵性台地に現在約80基が確認されているが、いずれも後期古墳で、円墳、横穴式石室を構築したものである。この古墳群中には、県史蹟指定のシドメ塚古墳も存在し、その中核的な存在を示す大塚古墳は直径40mに近い円墳である。古墳時代後期群集墳としては群馬県内では有数の存在を示すものといえるものであるが、大きくその分布地域を区分すると3地区に分れ、本郷小字奥原、本郷小字的場～大塚、本郷下長に分布している。このなかでも前二者の分布は稠密な状態を呈し、奥原地区では57基、的場～大塚地区では17基が残存した。

今次の調査においては群馬用土地利用改良事業計画にもとづいて、的場～大塚地区の4基の古墳について発掘調査を実施した。すなわち的場地区に残存する古墳17基のうち10基については土地区画整理事業地内に保存できたが、田畑輪換地域及び道路敷に含まれる7基について比較的保存状態の良い4基の発掘調査、他の古墳址に近い状態で残存するもの3基については外形の調査にとどめることとなった。

調査は第1期調査を昭和44年10月24日～11月13日まで21日間、3基の古墳について実施した。これに続いて第2期調査は昭和45年2月2日～2月14日まで13日間をあて、1基を調査した。本調査においては社会教育課梅沢社教主事補が担当者となり、調査員に鬼形芳夫、平野進一、松尾宜方を委嘱し、他に高崎経済大学学生、地元より人夫を雇用し実施したものである。

調査の概要については第4篇に譲るとして、特に本地域においては昭和45年度における土地利用改良事業の進展とあいまって、奥原地区の古墳群の保存が課題として残されていた。

なお、的場古墳群の調査以後、昭和45年度に奥原古墳群の調査は実施され昭和57年度に『奥原古墳群』として公刊されている。奥原古墳群65基中53号墳が整備保存され、10基内外が現状保存された。(梅沢)

第2篇 調査方法と基本層位

第1章 調査方法

調査はまず樹木の伐採から行なわれ、B・C号墳について調査日誌にそのことが見え、A・E号墳については記録写真に伐採された樹木の切株が写されている。D号墳は石室に接して畑地が写真中に見えるので直接調査区の設定に入ったようである。A～D号墳は昭和44年10～11月に、E号墳は翌年2月の調査である。

墳丘図の作成は伐採直後に行なわれたらしく、A・C・D号墳について1：100図を作成したことが日誌に見え、その作成の頃に平夷顕著であったD号墳について検土杖で土中の石室探しが行われている（日誌）。A・B・C号墳については、A号墳は写真に芝地となっている墳丘と石材の部分が、C号墳は天井石材や側壁材などが寄せ集められた状態で見え、2基は外観より横穴式石室であることが判っていたようである。

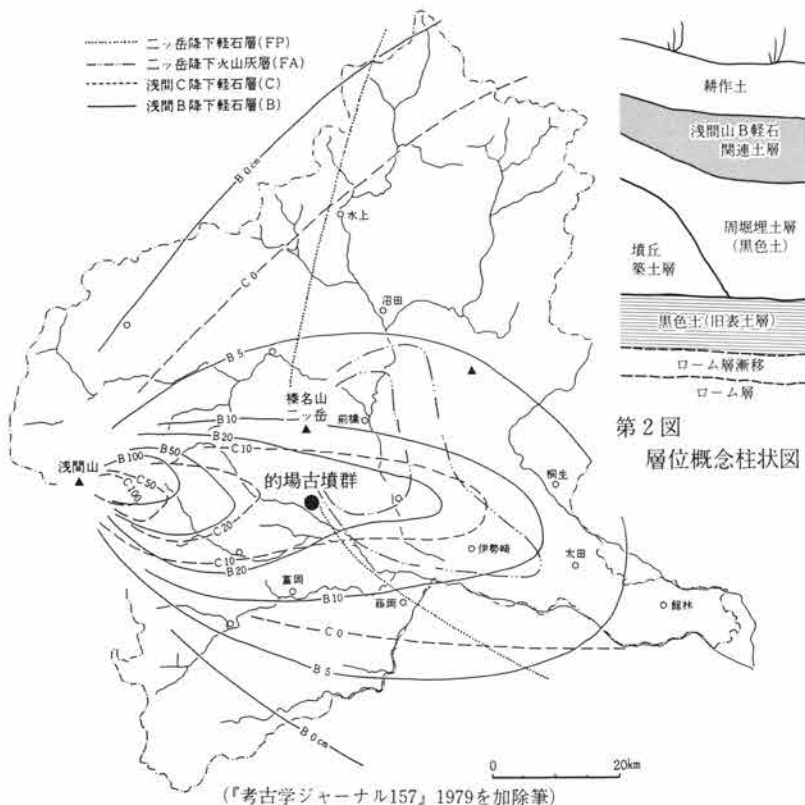
調査はいずれも横穴式石室の長軸が知れた段階で墳丘截断・墳丘裾部確認・周堀確認用の任意トレンチが設けられ、部分的に拡張がなされている。記録は土層断面1：10と1：20が用いられ、各調査員によって異なる。墳丘図や、石室上面が平板実測で行なわれたのに対し、石室内は水系による方眼の設定によって作成され、縮尺は1：10と1：20が用いられ、各調査委員によって異なる。

水準は三角点がB号墳に設置されていたにも係わらず、標高地が明示されていたのはE号墳の墳丘図および石室上面図のみであった。また各記録図中に原点数値が記入されていないため、合成の際は0位置を1基単位の全体観から検証したうえで定めた。

記録写真は白黒6×9判と35mm判とが13（8枚撮）・16（36枚撮）本残されている。（大江）

第2章 基本層位

昭和44年頃は群馬県において現在知られている大別の榛名山2面（FA—5世紀末頃、FP—6世紀後半頃）、浅間山3面（C—4世紀頃、B—12世紀初頭頃、A—天明三年）が認められつつあった当初の頃であった。そのため本調査の土層図注記は調査員相互の間で認識差があり日誌にも触れられている。確認された軽石は順堆積か二次的に移動しているかの指摘はないが、浅間山B・C軽石層が捉えられている。本文中B軽石層についてはトーンで示し、また墳丘下の旧表土層についてもトーンで示した。層順はおおむね上層より、耕作土—B軽粒を含むかB軽石層—周堀埋土—墳丘築土層—旧表土（黒色土）の順である。（大江）



第1図 群馬県における完新鮮示標テフラ層分布図

第2図 層位概念柱状図

第3篇 周辺遺跡

第1章 周辺遺跡

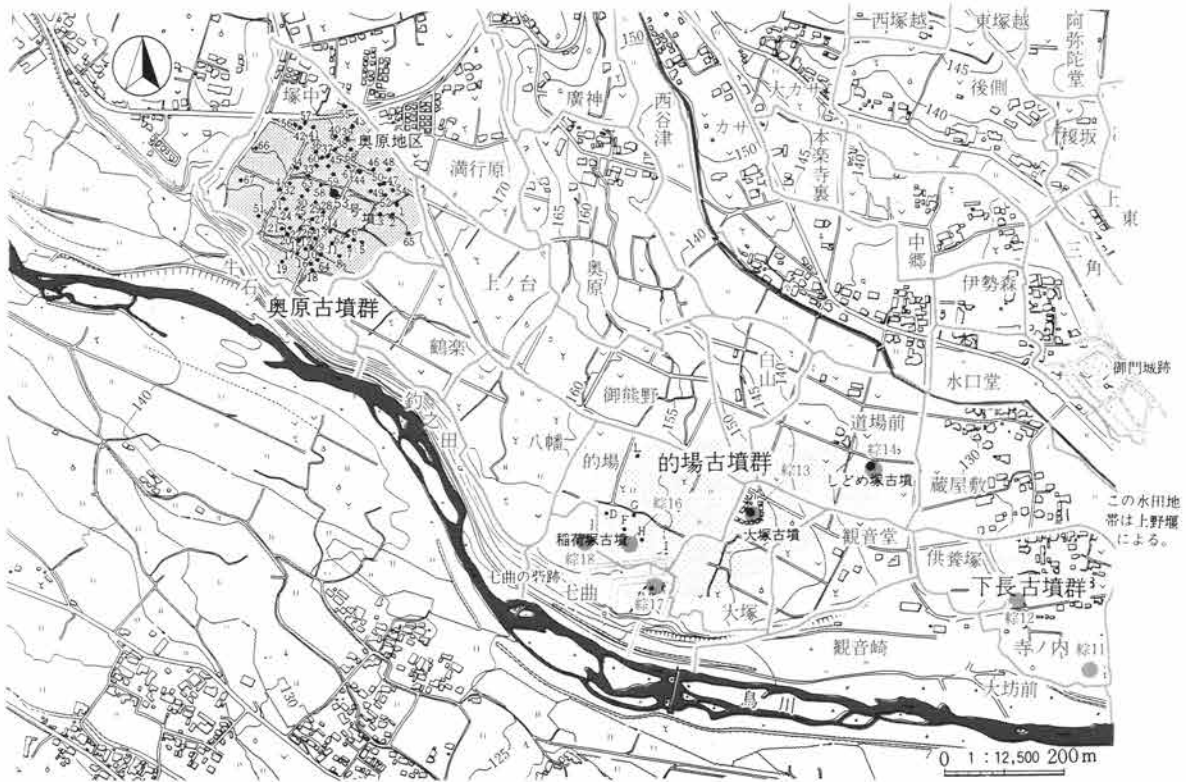
本郷の場古墳群は現在の群馬郡榛名町本郷にある。榛名町は昭和30年に室田町・里見村・久留馬村を合併して成立し、本郷は久留馬村7大字の一つであった。久留馬村は明治22年の町村合併合の際に、東接の白川（車川）ほかの地名から、（既に嘉永六年（1853）永田永世『上野名跡志』には久留馬村周辺を古代の群馬郷にあてている。）、「和名抄」記載の群馬郷（訓の記載なく一般的には群馬郡を久留末と訓じているため久留末郷）にあてられたことによる。群馬郷は永田説の後に吉田東伍は『大日本地名辞書』の中で（前略）「車川・白川の地は全く長野郷の内にして（後略）」とし永田の説を退け上野の国府や中枢が置かれた「今総社村、即国府総社の地」とされた。『群馬の地名』（角川書店）1988も群馬郷について「郡名と同一の名称の当郷は郡名の由来とかかわりの想定される車持公の本地があったところであろうか。これを「上野国神名帳」群馬郡西郡の部に見える車持明神・車持若御子明神の鎮座地と合わせ見るならば、榛名付近ということになるか。」とし、さらに続けて「郡郷の整備されて8世紀段階の郡の中心となると（中略）前橋市総社町・元総社町から群馬郡群馬町にかけての一带であろうとも考えられる。」（車持明神については榛名町十文字にある車持神社が推定されている。）しかし近年上野国中枢域にある山王廃寺の発掘によって放光寺という寺名称が明らかとなり、放光寺の置かれた場所は「山の上碑」・「金井沢碑」の碑文中の解釈から群馬郡下賛郷（佐野）であることが考えられるようになった。長野郷については、中世史料に多くが見え、車川以東の現高崎市の北部から、群馬郡箕郷町・群馬町西部の一带が推定され、「和名抄」に見える群馬郡と片岡郡の二つの長野郷も、群馬郡側が旧長野村・旧六郷村あたり、片岡郡長野郷は高崎市上豊岡町・中豊岡町・下豊岡町・石原町・乗附町あたりと考られている。したがって本郷の地も現状で捉らえるならば車持公に因む神社が残る榛名町とその周辺が群馬郷であったと考えられる。古代におけるおよその隣接郡域は片岡郡として若田郷が、高崎市若田の地が隣接の安中市秋間地区が碓氷郡飽門郷とされているので、烏川以南かまたは秋間丘陵の尾根を山切りにした場合、またはその両方で片岡・碓氷郡の郡界があったものと考えられる。

群馬の地名にも関心の高かった尾崎喜佐雄は御門の地名について「公」に通じ、ひいては郡衙などの官衙の所在が示唆されると推測（『群馬の地名』（上毛新聞社）1976）して群馬郡内の榛東村大字長岡字西御門と榛名町本郷小字三角とを指摘し、合せて本郷満行原の古瓦散布地についても寺院に係わるとして注目された。三角については遺構の検証はなされていないが古瓦散布地は奥原古瓦散布地として（『関東古瓦研究会研究資料No. 3』（群馬歴史考古同人会）1982）遺跡名称があたえられた。8世紀初頭頃の山王・秋間系（大江正行『天代瓦窯遺跡』（中之条町教育委員会）1982）の複弁七葉鏡瓦と8世紀中頃の高句麗様式の有軸素弁四葉鏡瓦の存在が知られている（古瓦散布地域内には榛名木戸神社があり小字満行原が示すとおり、「延喜式神明帳」にある群馬郡3座の1つである榛名大明神の神社満行宮の分社となっている。）。西毛地域における主要村落には寺院跡と思われる古瓦散布地が存在し、烏川の対岸側の中里見においても底面に「佛」と墨書された須恵器と8世紀後半頃の素弁四葉鏡瓦とが川原嘉久治により表採されている。

周辺の古墳時代の遺跡としては烏川の対岸側、秋間丘陵の南側に県内における8世紀代の主体窯跡群である秋間窯跡群がある。今回報告の中にも胎土分析736（D-15）ほかがあり、6・7世紀代の高崎市観音山丘陵にあった乗附窯跡群の後を受継いで量産を行なっている。開窯期は7世紀初頭前後と考えられるが、量産は7世紀第3四半期以降で前橋市山王廃寺の瓦なども焼造している。その地は古代の石上部氏と直接係



第3図 周辺遺跡分布図 本図は昭和48年群馬県教育委員会作成の群馬県遺跡台帳原図を加筆



網版は小字界と小字名称（昭和16年以前）
 第4図 本郷の場古墳群と周辺の古墳 本図は1983『奥原古墳群』（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）第2図を加除筆

第3篇 周辺遺跡

わった地でもある。

古墳群では古代の片岡郡若田郷内と考えられる現高崎市剣崎・若田に観音塚古墳・平塚古墳・二子山古墳・長瀬西古墳などがあり、昭和13年の古墳総数調査『上毛古墳総覧』（群馬縣）には八幡村として50基が数えられている。観音塚古墳は、墳丘長95m、2段築成、葺石を有する前方後円墳で、主体部は巨石積の両袖型石室、出土遺物に鏡・馬具・鏡類など多数あり国指定重要文化財並に国指定史跡。須恵器類は7世紀初頭頃である。平塚古墳は墳丘長約90mの前方後円墳で畿内模倣の舟形石棺が2基あり、桂甲小札・玉類の出土がある。石棺形態は5世紀後半頃である。二子山古墳は全長約50mの前方後円墳。若田稲荷塚は径40mの円墳で、川原石を用いた堅穴式石室が確認されている。長瀬西古墳は約20mの円墳である。それら古墳群は、観音塚を含む一群と、その西方の一群と、北側にある長瀬西古墳の周辺とに支群構成されるという。近年観音塚の一群と長瀬西古墳の一群との間で八幡中原遺跡が調査され、古墳時代後期以降から奈良時代にかけての100数十基の堅穴住居跡および14.8×8.8mの大形掘立柱建物跡を含む19棟以上が検出（『八幡中原遺跡』（高崎市教育委員会）1982）され、特に周辺古墳と大形掘立柱建物跡を含む掘立柱建物との関係が注目されている。

烏川右岸に沿った古代の片岡郡長野郷内とされている中に現高崎市上豊岡町に引間遺跡があり、古墳時代から奈良・平安時代の間堅穴住居跡が95棟以上検出（『引間遺跡』（高崎市教育委員会）1979）されている。

番号	名称	種別	時代
1	泉福寺古墳	墳墓	古墳
2	塚崎古墳	墳墓	古墳
3	諏訪山古墳	墳墓	古墳
4	古城	城館跡	中世
5	南原古墳1号	墳墓	古墳
6	南原古墳2号	墳墓	古墳
7	南原古墳3号	墳墓	古墳
8	下原古墳	墳墓	古墳
9		集落	古墳
10	天神道上古墳	墳墓	古墳
11	天満宮古墳	墳墓	古墳
12	御嶽塚古墳1号(綜36)	墳墓	古墳
13	御嶽塚古墳2号(綜37)	墳墓	古墳
14	伊勢殿山古墳	墳墓	古墳
15	塚中古墳1号	墳墓	古墳
16	塚中古墳2号	墳墓	古墳
17	塚中古墳3号	墳墓	古墳
18	塚中古墳4号	墳墓	古墳
19	塚中古墳5号(綜25)	墳墓	古墳
20	塚中古墳6号	墳墓	古墳
21	塚中古墳7号(綜26)	墳墓	古墳
22	塚中古墳8号	墳墓	古墳
23	塚中古墳53号	墳墓	古墳
24	的場古墳	墳墓	古墳
25	七曲古墳1号	墳墓	古墳
26	七曲古墳2号	墳墓	古墳
27	七曲古墳3号(綜17)	墳墓	古墳
28	七曲古墳4号	墳墓	古墳
29	大塚古墳(綜13)	墳墓	古墳
30	しどめ塚古墳(綜14)	墳墓	古墳
31	天皇塚古墳(綜10)	墳墓	古墳
32	稲荷森古墳1号	墳墓	古墳
33	稲荷森古墳2号(綜7)	墳墓	古墳

番号	名称	種別	時代
34	稲荷森古墳3号(綜6)	墳墓	古墳
35	塚中古墳9号	墳墓	古墳
36	本郷大仏(菊間公園跡)	園池跡	大正
37	秋間窯跡群	窯跡	古墳～平安
38	七曲の砦	城館跡	中世
39	御門城跡	城館跡	中世
40	景忠寺	寺院	伝江戸～現在
41	奥原古瓦散布地	寺院跡	奈良
42	榛名木戸神社	信仰	神名帳社か
43	高浜砦	城館跡	中世
44	長信寺	寺院	中世
45	駒形神社	信仰	神名帳社か
46	伊勢殿山古墳	墳墓	古墳
47	上野堰	用水路	江戸以前～
48	本郷神社	信仰	不明～現在
49	山口古墳群	墳墓群	古墳
50	和田山古墳	墳墓群	古墳
51	抜鋒神社	信仰	神明帳社か
52	中里見	寺院跡	奈良
53	引間遺跡	集落	古墳～奈良
54	長瀬西古墳	墳墓	古墳
55	八幡中原遺跡	集落・居宅?	古墳～奈良
56	若田遺跡	集落	古墳
57	観音塚古墳	墳墓	古墳
58	平塚古墳	墳墓	古墳
59	二子山古墳	墳墓	古墳

1～35は『群馬県遺跡地図』（群馬県教育委員会）1973による。35～59のうち城館跡は山崎一『群馬県古城聖址の研究下巻』1972による。神名帳社かとしたのは「上野国神明帳」にある記載社で現在社との推定比定は『久留馬村誌』1963による。このほか古墳群については第3図中に記入してある。上野堰は起源不明であるが地域にとって重要な灌漑水路である。堰止灌漑。

周辺遺跡一覧

そのうち8世紀中頃の遺物を伴う第65号住居跡から座金のはずされた銅製小形鈍尾が出土している。この周辺を含む旧碓氷郡豊岡村には『上毛古墳綜覧』に前方後円墳1基を含む31基の古墳が数えられ、この地区にある程度、古墳実数の多さを知ることができる。

本郷的場古墳群の周辺は奥原地区と下長地区と3支群に区分され、それは次章に詳しい。全体としては旧八幡村の古墳51基、豊岡村の31基とは烏川で分立され、旧車郷村とは和田山の発達した丘陵地帯とその南西側を並走する小堀川の開折谷とで分立している。旧久留馬村内の39基はその後の奥原古墳群の調査で追認された総数65基のうち『上毛古墳綜覧』で数えられたのが7基であるため実数は97基となり、周辺地域の中では古墳実数量の大きい旧態を窺うことができる。

中世遺跡は古城址について山崎一（『群馬県古城址の研究下巻』1972）は本郷の景忠寺周辺を永禄九年、武田勢の侵攻に際して長尾五郎景忠が築いた御門城址と推定し、その規模は全長170m程という。また今回報告的場D号古墳の南東端に堀切遺構が存在しているが、山崎一図によると七曲^{ななまがり}の砦の第2郭の外側に位置することになる。この第2郭を含むと150m前後の規模となる。この砦遺構を『久留馬村誌』1963では日波^{ひつば}の砦という。日波とは俗称。

このほか小字名称を見ると的場（矢場か）、八幡（八幡社があったのか）、寺内、大坊前（寺があったのか）、白山（白山信仰があったのか）、道場、道場前（修道場があったのか）、熊野（熊野信仰があったのか）、観音堂、観音崎、供養塚（信仰に因む）そして全体が本郷であるので、中核村たる村内が信仰に因んで形成されていることが見てとれ、それが近世における形成とした場合には農耕村落であったことから考え難く、それらは少なからず中世後半の残影としての地名称と考えられる。（大江）

第2章 本郷的場古墳群の位置

榛名町本郷古墳群の位置する榛名町本郷は旧群馬群久留馬村本郷で、榛名山の南麓末端が烏川と白川に夾まれて終わる地に位置する。高崎市から西北方約6km、烏川にそってさかのぼる主要県道高崎一室田線が関東平野の沖積地から丘陵地帯にさしかかる地で、西南側は烏川の段丘崖、東側は白川流域の沖積地に向かってゆるやかな傾斜で終わっている。したがって四圍の眺望は秀れ、北に榛名山の全容、東北方は関東平野の西北部の平地を越えて赤城山、上越の山並みを、西方は近くにせまる烏川流域の山並みを越えて浅間山を望む地である。こうした環境に恵まれたこの地域は洪積世末以降地質的にも安定した土地で、丘陵性台地とそれを侵蝕する低湿な谷戸、そして末端に接する平野地域が植生を豊富にし、動物棲息適地を形成していたらしい。榛名山南麓地帯においてはこの本郷地域から箕郷町富岡にかけて縄文時代からの遺跡は豊富な分布を示している。古墳時代、この地に居住した人々の主要な生産的背景となった地はこの丘陵地帯を侵蝕する低地と東方白川流域の沖積平野であったろうと推定される。この地が本郷であり、小字に御門の地名も残ることは榛名山南麓地域において古代主要な地域であったことを十分に推考させるものがある。

この本郷に分布する古墳は上毛古墳綜覧によれば、22基が記載されているが、本調査に先立って実施したフィールド調査では総数80基が確認されている。このうち「しどめ塚古墳」は群馬県指定史跡であるが、他はいずれも畑地及び雑木林内の小丘として残存するか墳丘部分がほとんど削平され、石室の一部を残存するのみであり、原状を比較的良くとどめるものとしては「大塚古墳」＝（本郷大仏所在古墳）、稲荷塚古墳、他は奥原地区に10基前後残存するぐらいである。他はこの丘陵の末端に近い烏川左岸に数基認められるにすぎない。

第3篇 周辺遺跡

これらの古墳分布の傾向を地図上に落してみると、本郷地区に分布する古墳群は烏川の左岸の段丘崖縁辺に近く三支群に分れ、分布していることがわかる。すなわち、奥原地区、的場、大塚地区、それに下長地区である。奥原地区は本郷古墳群の最西端を占め、烏川左岸丘崖縁辺に近く57基の円墳が存在し、その中心的な規模を有するものは直径30m内外、川原石積横穴式石室の円墳で、他は10m～15m前後がほとんどあったと考えられ、これらが200m×200mの範囲に密集し、分布している。的場、大塚地区は「大塚古墳」が径40mに近い円墳で中心的な位置を占め、最西端に稲荷塚古墳を位置し、これも烏川左岸の段丘崖寄りの高所を選定し、17基が残存しているが、分布範囲は広く、300m×400mに位置している。特に「大塚古墳」の東側では分布は粗となり、その一基が「しどめ塚古墳」である。下長地区は丘陵性台地というよりも烏川左岸の河成台地上に分布し、残存するものはすべて円墳であり、径10m～15mのもの6基が残存する。これらのことをあわせ考えてみると、本郷地区には三支群に分れる構成で100基前後の円墳が作られ、それらは、古墳時代の後半から終末期まで続存していたであろうことを推定させるのである。これらの古墳群の構成を便宜上、順を追って奥原支群、本郷的場支群、下長古墳支群として記述を進めたい。

今回、発掘調査を実施したものは群馬用土地改良事業にともない破壊されることが避けられない4基であり、それらは的場、大塚地区すなわち本郷的場支群に位置するものである。ここでは発掘調査の順を追って、A号墳、B号墳、D号墳、E号墳とした。これら4基は同支群内では西端の最高所に近く位置しておりE号墳が最大で径30mの円墳（稲荷塚古墳と呼ばれている）で、そし東方約50mにD号墳が頂部をほとんど平夷されて位置し、その南方50m、E号墳より約40mの地点にA号墳、その南東約60mにB号墳、B号墳とA号墳の三角頂点部分にC号墳が位置しており、他は、東方に向かって、ほぼ同間隔に6基、そして約250m東方に「大塚古墳」が位置し、それよりさらに100m東方に「しどめ塚古墳」が位置している。同支群の東縁に位置する古墳は「しどめ塚古墳」東方約120mの丘陵性台地の突端に近く位置し、北側には侵蝕谷を夾み、本郷神社が鎮座している。烏川左岸の丘陵性台地の突端部を広く占め、本郷的場支群が形成されていたことを示している。標高110m～137m付近、東方沖積地域との比高5m～15m前後である。

調査時、A号墳は雑木草に覆われていたが、墳丘も周囲が削り取られ、主体部石室のみを残す墳丘を形状を示し、頂部は石室天井部が落ち、後世の人為的影響をはなはだしく受けていた。C号墳は石室根石部分を残すぐらいに破壊され、集石場所の観を呈していた。墳丘東側が中世末の城館堀割りの西北部の外縁に相当することから、すでに戦国時代のころ破壊されたものであろう。B号墳は当初、発掘を計画したが、三角点が設定されていることが確認され保存することにした。D号墳は畑内でわずかに起伏が認められるにすぎず、墳丘は大部分平夷された状態であり、調査によって内部主体部の存在することが確認された。E号墳は本郷的場支群中では西端の最高所に位置し、西方に延びる小高い地形が観察されたが、同時に墳丘も残存状態が良好で、葺石の一部及び埴輪破片等も確認でき、頂部西側に石室の一部が残存しており、他の古墳に見られない様相を示していた。調査の結果、西方を向く帆立貝式古墳であり、墳丘主軸に一致する横穴式石室を構築しているものであることが確認された。

これらの4基の古墳を比較してみて注意されるのは、いずれも主体部横穴式石室を中心として形式的な相違が見られることであり、時期的に構築の年代を異にしているということである。これについては以下述べる各古墳の報告を待つこととしたい。(梅沢)

第4篇 検出された遺構と遺物

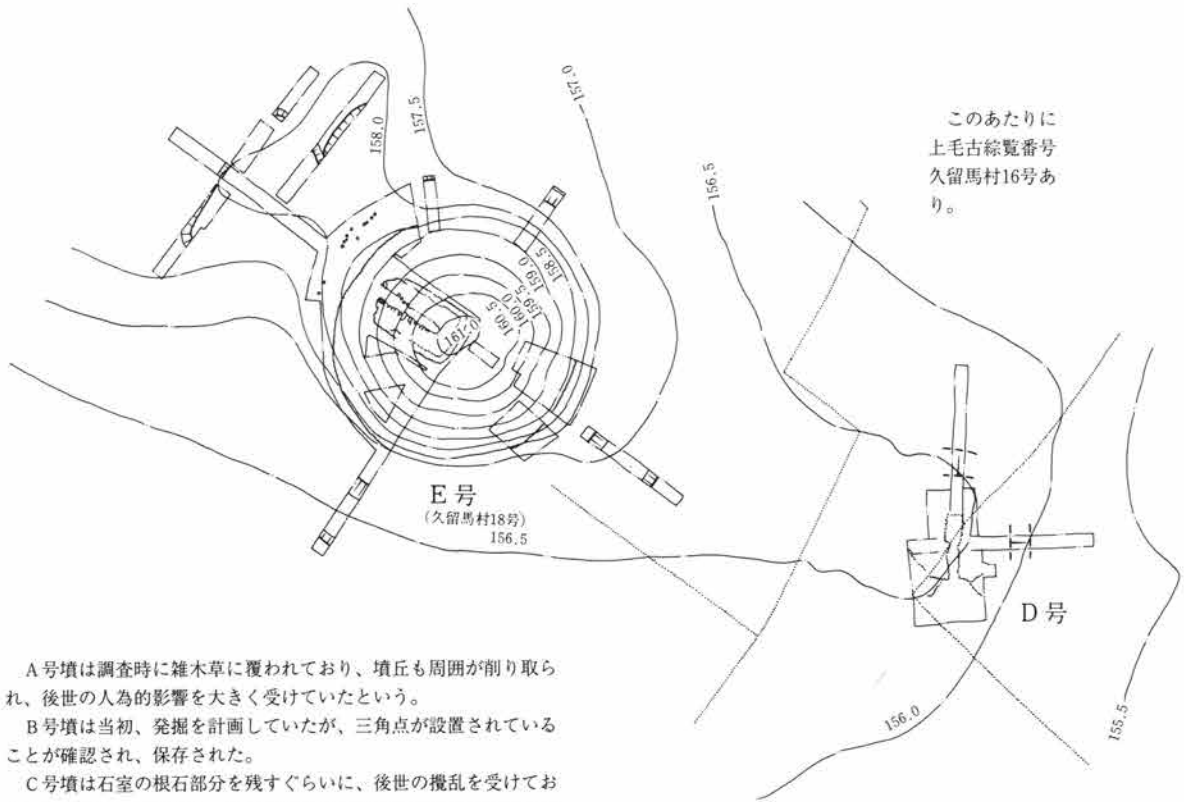
発掘調査で調査対象となったのはA～L号墳までの13基のうちA～E号墳までが工事破壊を受ける計画にあり、B号墳だけが三角点が墳頂に存在したため工事対象から除外され、図らずも保存されることになった。したがって記録保存はA・C・D・E号墳の4基のみである。この4基の調査の過程で副次的に知れた遺構はA号墳石室前方の削平段、同墳Aトレンチ内土壌、C号墳南東側掘切跡、D号墳Bトレンチ内住居跡などであった。

遺物については調査後、昭和46年度まで社会教育課が、昭和47年度は文化財保護室が、昭和48年度から昭和55年度まで文化財保護課が、それ以降群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。土器類は、約28箱あり、18箱（1595片）が埴輪類で他は須恵器で土師器は微量であった。金属器類は一部が錆落し、保存処理されている。

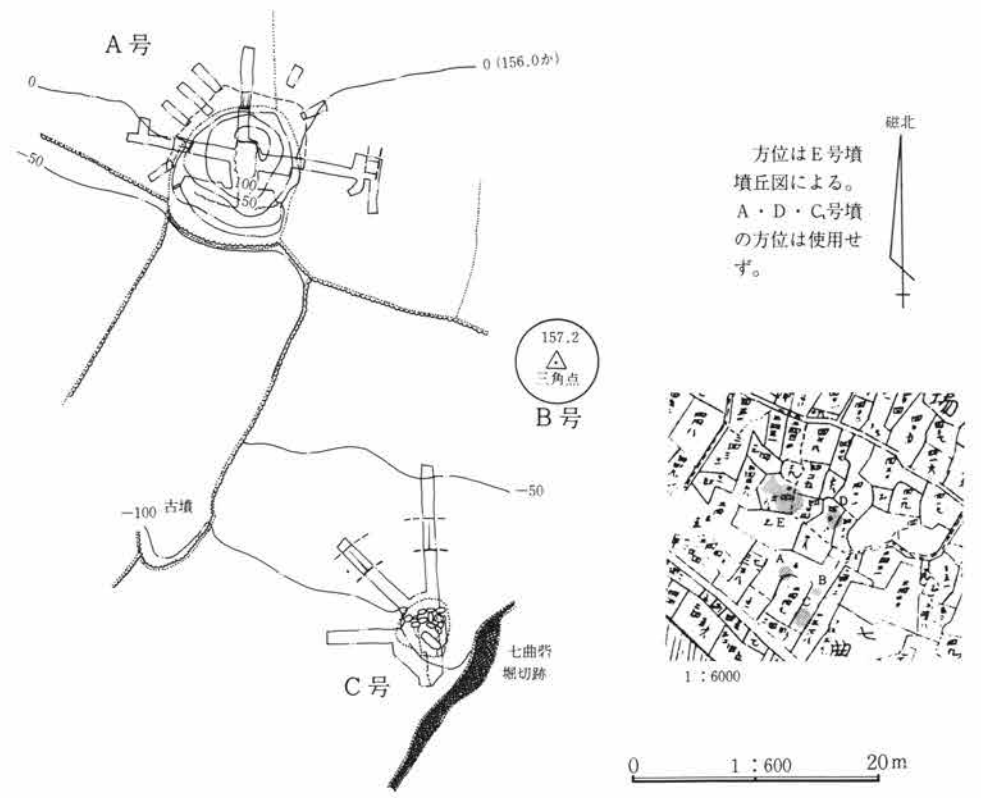
本報告中の遺構図の作成は調査図面を尊重し、極端な修正は加えていない。断面については無修正である。遺構図の扱いで苦慮した点は、水準値である。標高値はB号墳からの引照であったようであるが、部分的な使用であったので、その記入がなされている個所については標高値を用いた。各古墳とも土層断面については設置した水準高を0と記されている場合が多く、それに従って複数の土層断面を合成してみると基底面の黒色土面が不一致となってしまうような場合には、各古墳一基単位の黒色土位置を基にして水準を変更した。そのため本報告中の0点は各古墳単位で異なると共に、1古墳中では同一水準を示すし、+50とか-50とか記入された場合は、その0水準からの高さで、センチメートルである。図面作成上意識した点は、多目的に使用しうる状態が活用上の最良の方法であるので、平面図を重視し、それについて見易く仕上げるとか、重複関係にある石組を除外するとか目的本位の所作は加えていない。

遺物について、土器は1：3の縮率としたが須恵器甕に1：5とした場合があり、埴輪類は形象部材を1：3とした外は1：4である。金属製品は1：2である。実測は金属製品と土器の小片を除いて電子実測機器（スリー・スペース）による。表現法は三角法を用い質感を表現に拓影を多用。金属製品は乾拓で2H・HB鉛筆を使用。土器・埴輪実測中の中軸は実線が、直接四分実測。1点鎖線が、回転による実測で破片個体を示す。破線は通常の場合、想像であるので破線2単位、それ以上ある場合は、部分的に実測の分割位置よりも残存個所が伸びている場合に、延長して残存している意味をこめて破線を延長した。各個体は外形線のほかに形を決める線で主体的な部分ができている。そのため形を決める線は実線とし、その形を決める状態により実線と細線を使い分けた。口縁部下線は意識的に記入してあり、底部際についても同様である。線の用法は篋削について手持・回転を問わず1点鎖線。轆轤目は部分的に線中に隙間をとり、回転に伴い移動した鉋物粒の方向に矢印を記入した。両方向の矢印はよく分からない時である。矢印については篋削についても同様である。口縁部下方の横撫線も線に隙間をとり、形を決める線と判別できるようにした。断面側には粘土走行を記入したが破線は想定される時に、点描と線描をまじえた線は観察した粘土走行でおおむね紐作の紐境目である。ただし、水挽製作の場合は単に走行のみである。内面成形の整形の指の圧痕はだ円形気味の中に影を意識した細線を1本加え、埴輪中の指の搔落についても細線を加えてある。影は右光源とした時である。土器類については製作地の頭文字を記入してある。乗—高崎市観音山丘陵の乗附窯跡群。藤—藤岡窯跡群。吉—吉井窯跡群。秋—秋間窯跡群。土師器の藤は藤岡市周辺を、吉は吉井町周辺を意味する。以上の諸点と観察表を踏まえたうえで実測図を参照されたい。（大江）

第4篇 検出された遺構と遺物



A号墳は調査時に雑木草に覆われており、墳丘も周囲が削り取られ、後世の人為的影響を大きく受けていたという。
 B号墳は当初、発掘を計画していたが、三角点が設置されていることが確認され、保存された。
 C号墳は石室の根石部分を残すぐらいに、後世の攪乱を受けており、集石場所の感を呈し、さらに墳丘東側が中世末の砦跡の西北部に相当する堀切遺構外郭が存在していたという。



第5図 的場古墳群A～E号墳位置関係図

的場 A 号墳

1. 墳丘の規模と構造

本古墳は烏川段丘崖上の台地が東方に延びている主軸線よりやや段丘崖寄りに位置して構築された古墳で、南側は約100mで烏川左岸の段丘上縁に終るゆるやかな地形が形成されている。したがって本古墳を囲む等高線は北側を大きくまわり、東側から南側にかけて近接する走向を示していた。

発掘調査に先立って実施した墳丘の測量によれば墳丘は四囲を畑地の耕作等で削落され、原状をとどめないほどに変形していたが、円墳であることが推定できた。主体部横穴式石室の主軸に直交する東西径は約10.5m、南北主軸線上の径は約11mであり、墳丘残存部の高さは約1.5mを計測した。石室の位置は奥壁部が現墳丘のほぼ3分の1付近であり、それ故に、墳丘の規模と形状、構築状態を明らかにするために、石室主軸線に沿ったトレンチおよびそれに直交するトレンチを最初に設定し、目的に応じ、各部にA～Jトレンチを設定した。

まず、本古墳の構築された地層であるが、主体部石室に設定したAトレンチ内の所見では現在の墳丘外の地層が表土より耕作土層（黒褐色砂質含有有機質土）黒土層、黄褐色ローム漸移層ローム層へと移行しているが、黒色土層に古墳構築面が位置し、ロームと黒色土の混土層の積土が堆積され、主体部石室の後込め石積みの被覆土から傾斜する傾向を示していた。墳丘裾部に相当する遺構としては主体部石室の後込めより約5m離れた黒色土層に25×15cm前後の河原石のまばらな状態での石列が残存しており、この傾向はCトレンチ、Dトレンチ、Eトレンチ、Fトレンチ、Gトレンチ、Hトレンチ内にも認められた。しかしながら各トレンチ内の配石の状態はランダムな傾向を示し、部分的に黒色土層上に墳丘積土の一部が残存しているにすぎない。特に墳丘裾部に相当する付近での配石直上には浮石層が堆積する傾向を有していて、浮石層堆積以前にかなり変形していたことになる。試みに配石部分の範囲を墳丘の径に相当するものとするると本古墳の直径は12m内外であり、主体部石室の奥壁はほぼ墳丘中央部に位置することになる。墳丘裾部積石がよく残存していたのは主体部石室全面に設定したJトレンチ内であり、この部分の構造は石室羨道入口より、左右に延びており、根石には比較的大形の河原石を立て並べる状態で使用し、その上面に小形河原石を乱石積みに、ほぼ垂直に積んでいた。その範囲は石室主軸を中心と両側に3mであり、楕円形に石室後込めに続いている。この部分の全面では平坦面となっていて、この面のレベルは石室床面と35cmの差があり、低位に位置していた。一方石室を覆う積土は石室後込め石にもたせかける状態で堆積していることがDトレンチ、Hトレンチの所見から明らかであり、普通見られる枝管構造状の堆積土に比較して外に向かって下傾斜する傾向が強い。墳丘規模を径12m内外とした場合の主体部石室の主軸長に対する墳丘の径は2倍前後である。墳丘の高さは2.5m前後を推定したい。

周堀部はローム層を切り込むほど深くはなく、本来の形態をもつものではなく墳丘周辺整地程度の地表削平に終わっていたものと推定される。また、埴輪類等も存在しないが、墳丘上からは須恵器大甕破片が散在していたのが注意された。

2. 主体部横穴式石室の規模と構造

石室は南方に向けて開口する横穴式石室でそのプランは両袖形である。石室主軸線の方位は正確にはN—1°—Wで烏川方向に面していることになる。各部分の計測値は下表の通りで玄室プランは西側壁が曲線を描く形態である。

的場A号墳石室各部数値

石室全長	玄室全長	羨道全長	玄室最奥巾	玄室最大巾	羨道部巾(前)	玄室前巾
5.33m	2.85m	2.48m	1.55m	1.65m	0.85m	1.40m

石室は河原石を主要石材とした自然石乱石積であり、根石に比較的大形石材を用い礎石上に平積みに据え、その上部に内傾する壁を構成し、主要用石間の間隔には細長の河原石を充填する方法を取っている。壁面構成の傾向としては大形石材を根石とし、その上に上位になるにしたがって小形化する石材を配す傾向を示している。特に奥壁は多石構成でやや側壁の様相とは異なり、安山岩1石、河原石6石から構成している。すなわち安山岩山石と河原石の大石を根石とし、その上部に河原石を横積の方法で重ね、隙間に小形河原石を充填している。残存する奥壁部の高さ19.5mで上部での巾は1.1mである。玄室部の天井高は奥壁部で2.0m内外を推定出来る。

これにたいして、羨道部入り口の前面は、左右対象となる曲線状に延びる石積みがあり、他の部分とは異なる石組み法が注意される。すなわち羨道部側壁の石積との間には羨道入口部両側石積との間不連続な石積みが認められ、その部分は小形石材を充填している。この部分の間隔は根石部では石壁が25cm、左壁は根石が接しているが最大20cmが認められた。そして羨道入口部石組の根石は羨道部にたいして14cm～16cm低位に位置していた。石室入口部石組は墳丘茸石に続き、羨道部両側の石積は右室裏込め石に連続している。羨道部は玄室部より15cm手前に河原石を二列並列して梱石とし、梱石上に50×20×15cm内外の河原石を小口状に積み、また羨道部入口部も同様に石積し、その間の羨道部全体に河原石を填塞していた。

床面は玄室、羨道部とも側壁根右下には玉石、石室床面相当部は扁平川原石（30cm×20cm 8×cm前後）を礎石としていた。礎石上の砂利等床面敷石は攪乱の状態であった。礎石上面は構築時の地表面とほぼ同じレベルに位置しており、墳丘積土内に石室は構築されたことになる。この石室構築にあたっては黒色土層を50cm前後掘り下げ、掘り込んだ部分に礎石を敷き、その上部に石室を構築し、裏込め石を楕円プランに積みあげ、さらに積土を盛り上げたものであろう。

3. 遺物

石室床面はまったく攪乱しており、したがって原状をとどめる遺物の出土状態は認められず、わずかに礎石上の攪乱層より勾玉1コと数片の鉄片が出土したのみであった。

- ① 勾玉、メノウ製でコ字形の形式で、作もやや雑である。石室中央や、奥壁寄りの地点から出土した。
- ② 鉄片、破片のみ3片であるが形状から鉄鏃の破片と推定されるもの、刀子の切先部分および柄部分であり、出土地点は原位置をまったくとどめてはいない。

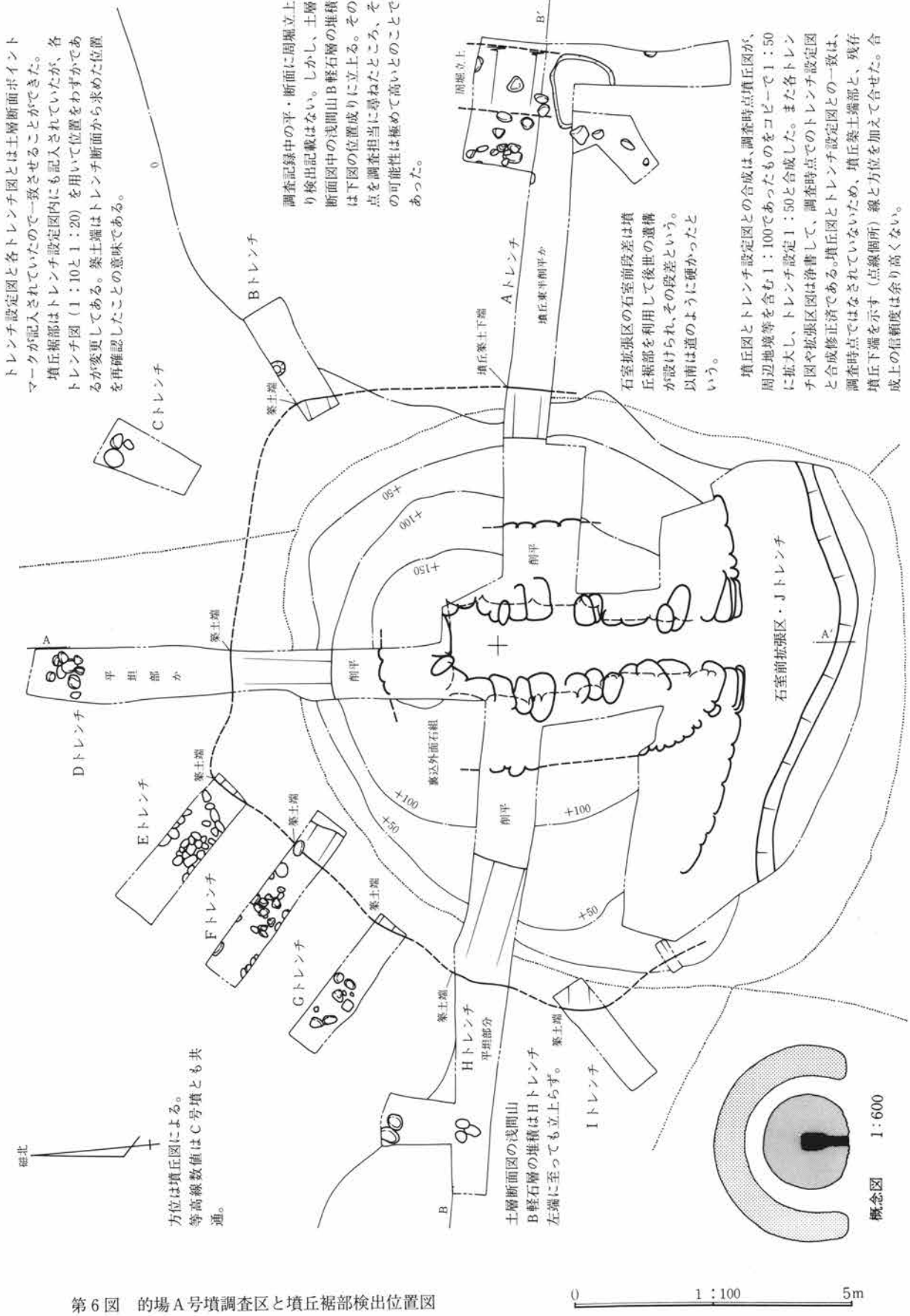
以上のほか第9～12図のとおり、土器類の出土があり、それら土器については7世紀前半頃の製品が多い。

(鬼形)

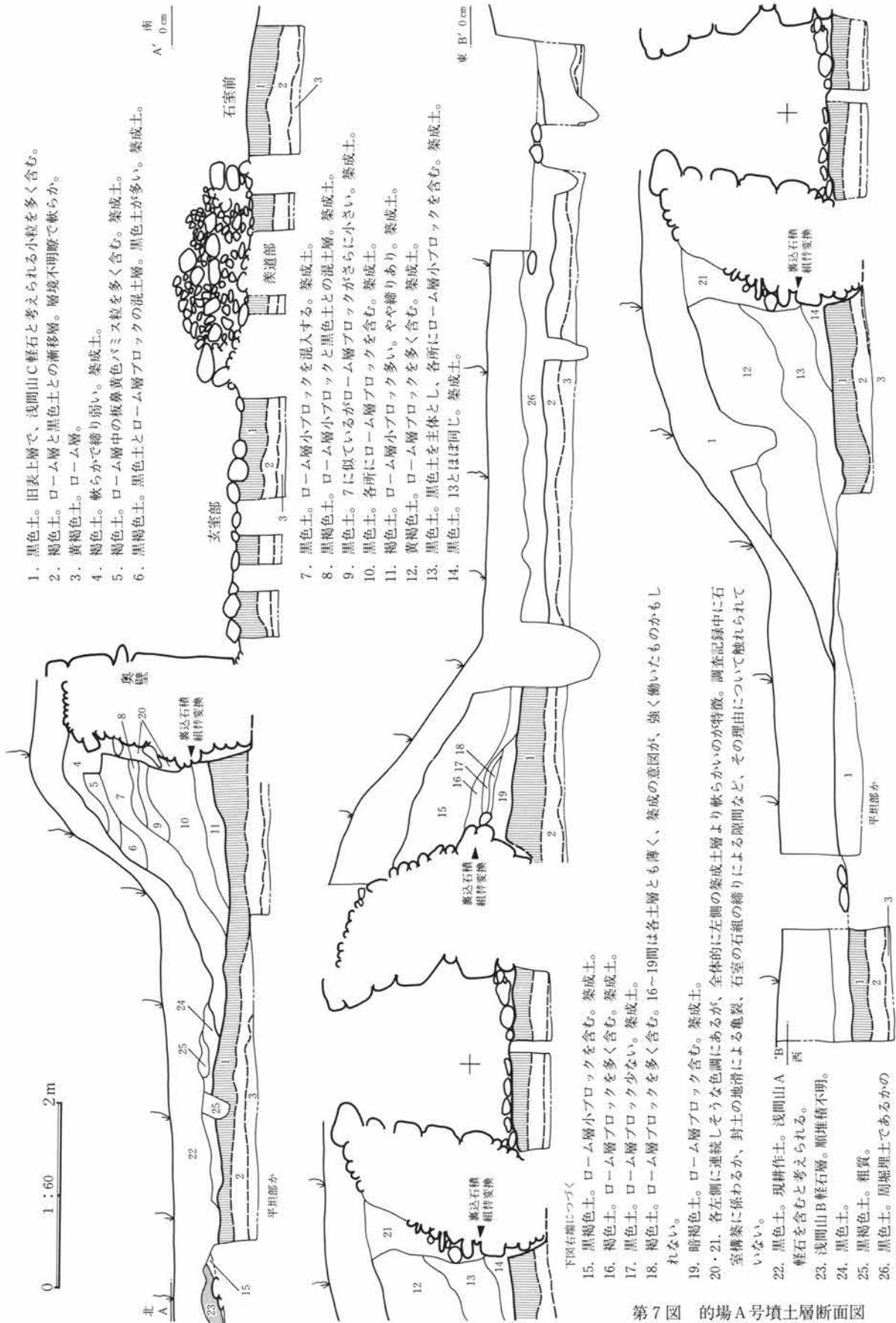
4. 整理段階の所見

概報の内容のうち墳丘との関連は、奥壁部は現墳丘のほぼ3分の1の位置、墳丘形状、各トレンチ内における河原石のまばらな状態、浮石層堆積以前の変形、墳丘裾部積石、周堀、墳丘上の須恵器などがあり、石室との関連では奥壁の川原石による多石構成、羨道部入口前面の左・右対象となる曲線状に延びる石組と墳丘茸石、石室裏込めなどについて所見が述べられている。それらについて整理段階の所見を加えておきたい。

奥壁部は現墳丘のほぼ3分の1の位置については第6図に、墳丘築土の下端位置をトレンチ土層断面とト



第6図 的場A号墳調査区と墳丘裾部検出位置図



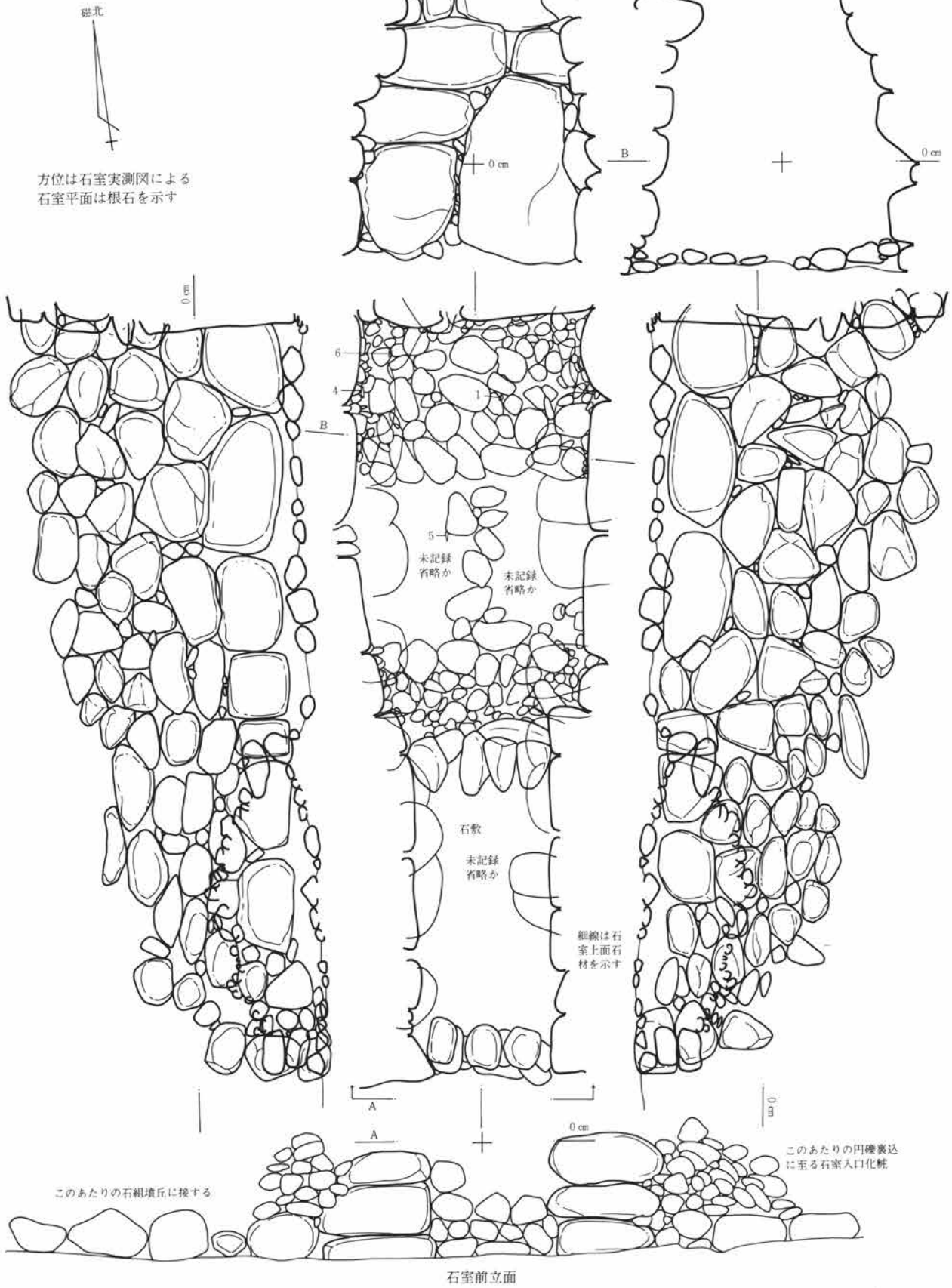
1. 黒色土。田表上層で、浅間山C軽石と考えられる小粒を多く含む。
2. 褐色土。ローム層と黒色土との漸移層。層境不明瞭で軟らか。
3. 黄褐色土。ローム層。
4. 褐色土。軟らかで締り弱い。築成土。
5. 褐色土。ローム層中の板鼻黄色バミス粒を多く含む。築成土。
6. 黒褐色土。黒色土とローム層ブロックの混土層。黒色土が多い。築成土。

7. 黒色土。ローム層小ブロックを混入する。築成土。
8. 黒褐色土。ローム層小ブロックと黒色土との混土層。築成土。
9. 黒色土。7に似ているがローム層ブロックがさらに小さい。築成土。
10. 黒色土。各所にローム層ブロックを含む。築成土。
11. 褐色土。ローム層小ブロックが多い。やや締りあり。築成土。
12. 黄褐色土。黒色土を主体とし、各所にローム層小ブロックを含む。築成土。
13. 黒色土。黒色土を主体とし、各所にローム層小ブロックを含む。築成土。
14. 黒色土。13とはほぼ同じ。築成土。

15. 黒褐色土。ローム層小ブロックを含む。築成土。
16. 褐色土。ローム層ブロックを多く含む。築成土。
17. 黒色土。ローム層ブロック少ない。築成土。
18. 褐色土。ローム層ブロックを多く含む。16-19間は各土層とも薄く、築成の意図が、強く働いたものかもしれない。
19. 暗褐色土。ローム層ブロック含む。築成土。
- 20・21. 各左側に連続しそうな色調にあるが、全体的に左側の築成土層より軟らかいのが特徴。調査記録中に石室構築に添われるか、封土の地滑による亀裂、石室の右組の締りによる隙間など、その理由について触れられていない。
22. 黒色土。現構作土。浅間山A西
23. 浅間山B軽石層。順堆積不明。
24. 黒色土。
25. 黒褐色土。粗質。
26. 黒色土。周堀埋土であるかの記録なし。

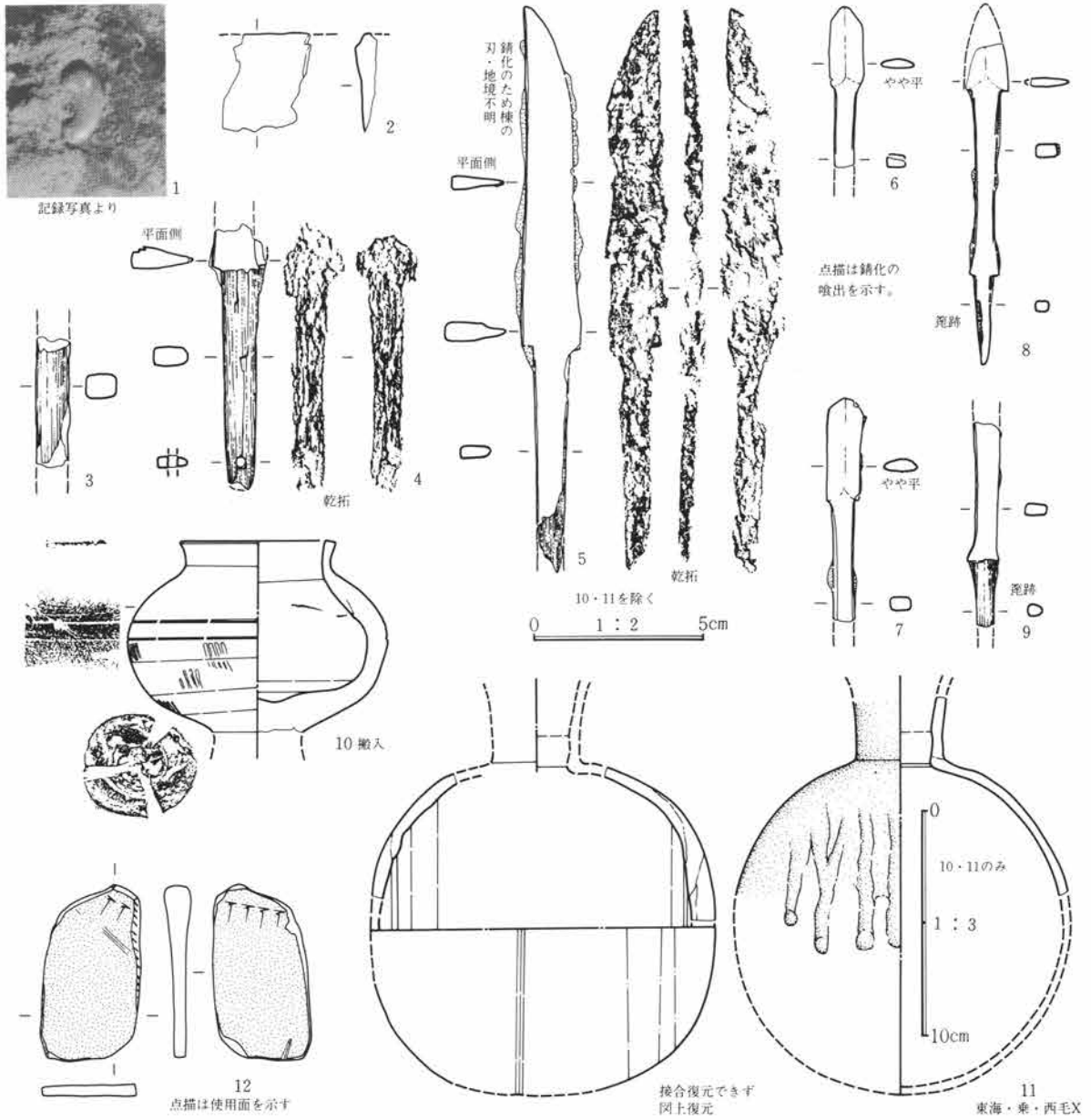
第7図 的場A号墳土層断面図

的場 A 号墳

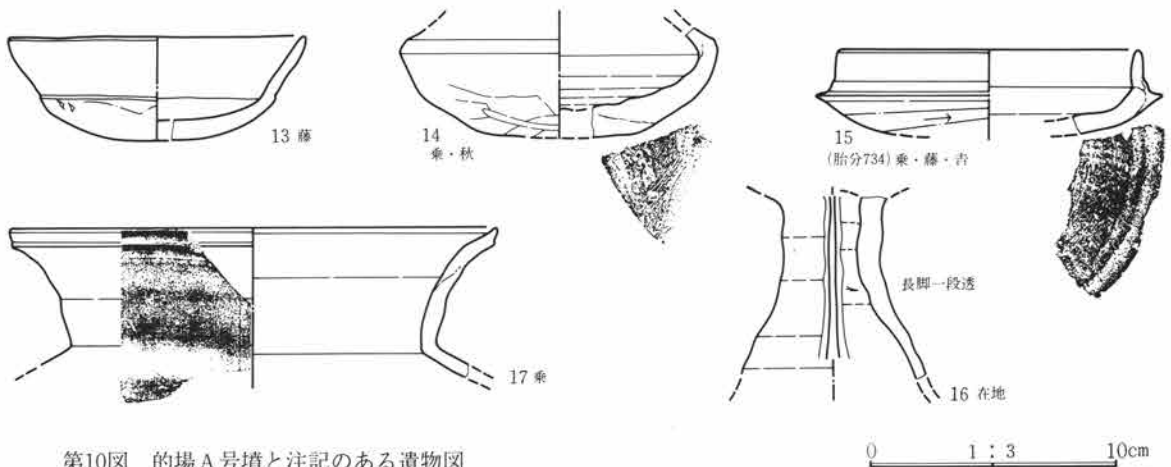


第 8 図 的場 A 号墳石室遺構図

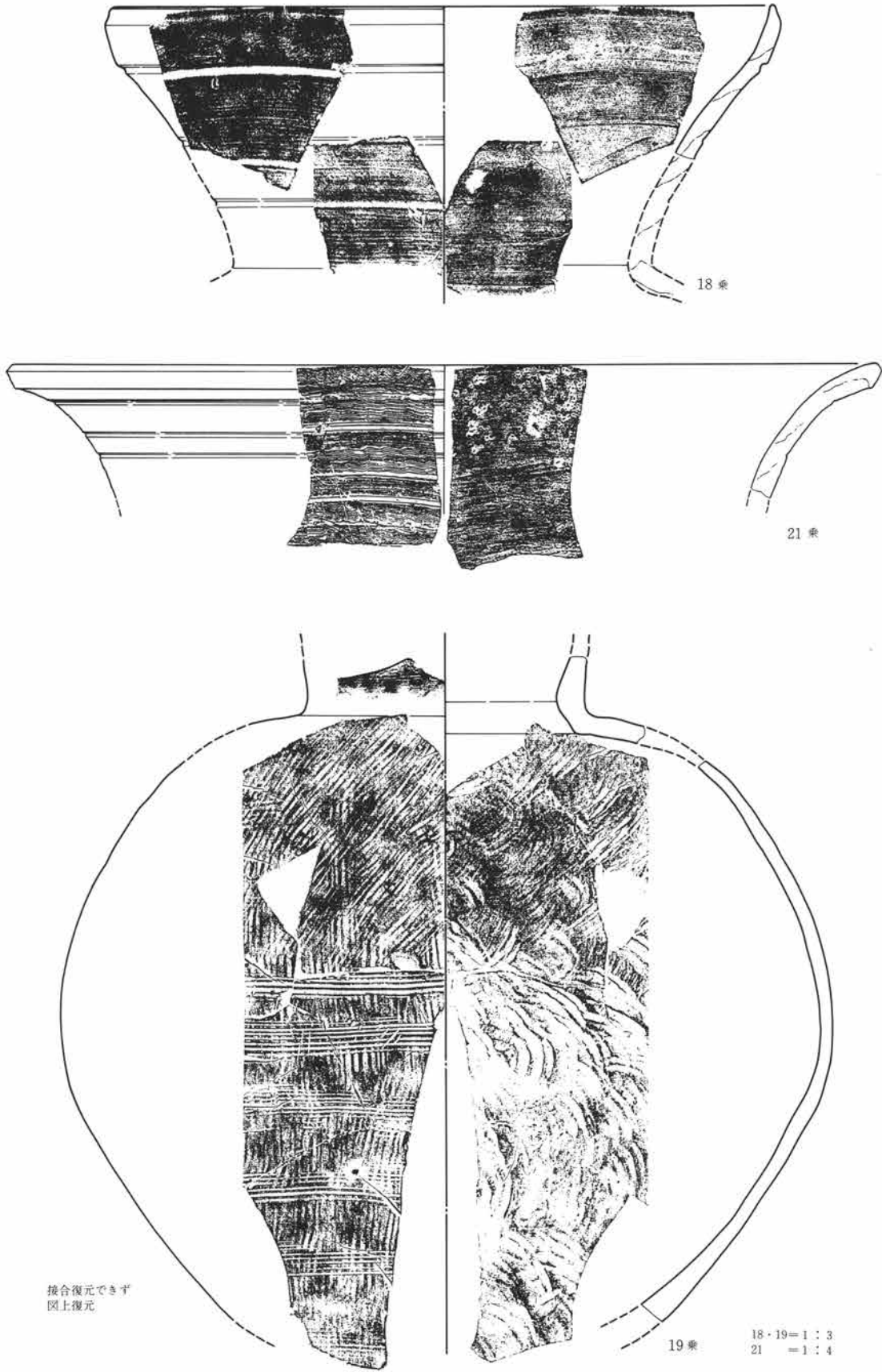
第4篇 検出された遺構と遺物



第9図 的場A号墳石室内出土遺物図

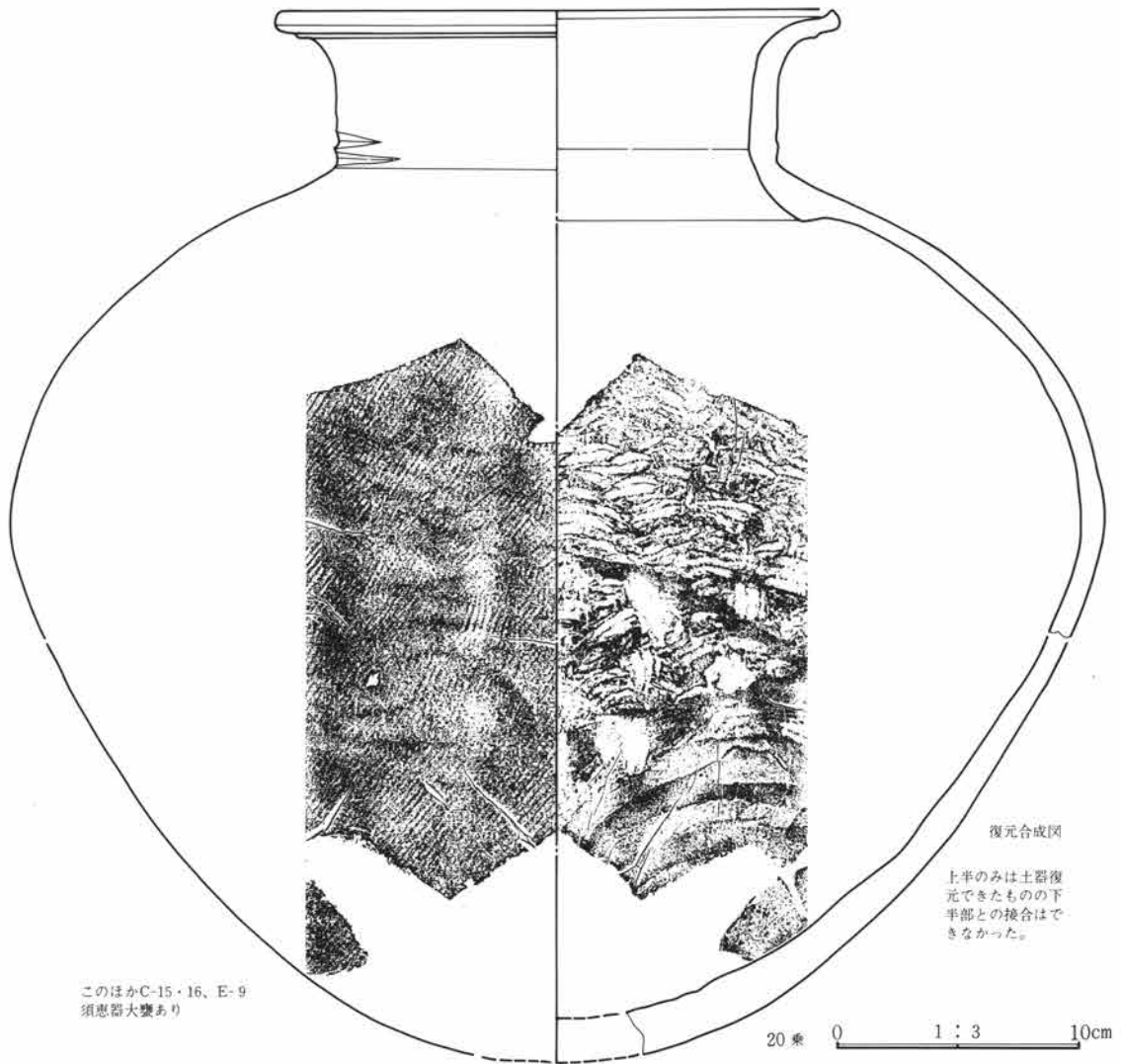


第10図 的場A号墳と注記のある遺物図



第11図 的場A号墳と注記のある遺物図

0 1:3 10cm 1:4 20cm



第12図 的場A号墳と注記のある遺物図

レンチ平面からおさえた図を掲げたが、調査図中に記入された端部線を大幅に変更してはいない。この端部を用いて石室中軸線に沿って奥壁下位置を求めると4.0(北半)：7～8(南半)mであるのでおよそ1：2となり、概報のとおりである。しかし概報は紙面の都合で言及できなかったと思われる点がある。それは墳丘築成土末端を墳丘端部と捉えるか否かである。築成土端を捉れば径約12mであるが、第7図上段のとおり、浅間山B軽石層(12世紀初頭頃)の堆積位置は、古墳築造後約500年後の降下であり、その堆積の成りは地形成りを示唆するものとして考えれば、土層注記23(浅間山B軽石層)は低位に堆積する状況が示され、それが浅いながら周堀の存在である可能性もたれる。その堆積の末端が周堀の上端であれば、築成土端との間に約2.5mの黑色土上面を基部とする平坦面(テラス)が生じていたことになる。Hトレンチでも築成土端より2.2mの位置から黑色土上面は下りはじめる。また黑色土上面を基部とするのであるから、その平坦面は墳丘・石室の山寄の割合いの高い北側が最も顕著になっていたと考えられる。そのように考えた場合は6.5：7～8mとなり、奥壁下位置は中心より北へやや奥まった位置となり、墳丘径は南北で13.5～14.5mとなる。東西は東側は不明瞭であるが西側の平坦面と石室中軸位置をとらえれば $8.2 \times 2 = 16.4$ mとなる。Aトレンチの周堀の外周立上り位置は注記番号26の末端を捉えた。

築土端の川原石について概報文中に葺石と云う表現があるので、第6図の築土端外方にある川原石は墳丘から崩落した葺石と考えられるが、記録写真や記録図を見る限りにおいては、おびただしい石材量の描写はなく、葺かれていても部分的な圍繞と考えられる。その崩落状況を見れば北側につれ密な重なりとなる。

前述の浮石層（軽石層）堆積以前の変形について、変形理由が概報には触れられていないが変形というよりも葺石用材川原石の崩落が顕著で、既に古代においてそうした状態であった。

墳丘裾部積石とは石室入口左右の石組を指しているようで、それを除く個所が葺石のようである。この石組は墳丘築成土の末端に取り付くものではなく、石組延長は築土中に接するので何んらかの形でその個所は化粧されていたことであろう。石室前の平坦部と築土下端の接点は、第7図上段の土層断面に築土の延長が認められずトレンチでも検出された記録や指摘がないのでIトレンチとJトレンチとの間で途切れていた可能性はあると思われる。

周堀については墳丘周辺の整地程度と触れられている。第7図を見ると注番号23の土層が厚くなろうとするあたりで途切れていて、いまま少し延長すれば周堀が明瞭になったのかもしれない。E・F・Gトレンチは短か過ぎて検出されていないが、D・Hトレンチには墳丘裾平坦面らしき個所が見え、特にHトレンチではトレンチ西端の黒色土上面と15cm強の差が認められ、また第6図中、Aトレンチの周堀立上りは注記番号26から求めたものであるがそれ以下に相当する東端部の未注記層がさらに落込むため、周堀外縁立上りの可能はより一層、Aトレンチ東端のはるか外側にあったものとも考えられる。Hトレンチの推定平坦部面から割り出した、堀径は16.4mであったが、上記を類推した算出上の周堀推定はAトレンチ上で周堀下端より $2.5 + \alpha$ mとなる。墳丘の東側については、Aトレンチ断面を見ると注記番号26に明確な内容が含まれていないので判然としないが、墳丘築成土が少な過ぎ、またBトレンチ築成土端部からAトレンチ築成土端部までがどうも直進的になり過ぎるので近接する七曲砦の段階など、後世に削平された疑問を考えざるを得ない。

墳丘上の須恵器大甕とは、第11図19が72片、第12図20が53片でともに多数の破片量であるのと19の破片中に石室内との注記3片、墳丘との注記3片、20の破片中に石室内との注記3、墳丘との注記3点あり、ともにそのほかの注記は古墳名称の記載にとどまる。したがって墳丘とある個体と既掘後に石室内に落下したと思われる個体があるところから2個体ともに墳丘上の大甕に相当する可能性がある。

奥壁の多石構成について川原石が多用されていることの指摘がある。天井石際まで石室上面が部分的であれ残されている例に本墳とD号墳とがあり、ともに天井部に接するまでの転びの状態は顕著で大形石材入手困難な状況かまたは優れた転びの技術を持合せていたことを思わせる。

袖の構造については玄室天井側に内傾した袖の石組を構成している。天井石は既に抜取られていたが、石室両壁の石材の残存がほぼ左右対照であることを思えば、天井石は残存両壁の上面に据えられていた可能性が特たれる。玄室部と羨道部との間には約40～50cmの差があり、玄室部と羨道部とは段差をもって玄室部天井が高くなっていたと考えられる。

石室壁石と石室掘方と裏込石材との関連は、発掘調査時点で掘方に則して裏込石を組込んだ個所と、裏込石組を上方に組上げた変換部に注記があり、第7図に矢印（写真図版1右下参照）を記入しておいた。その位置は玄室内壁石の根石大石の上面個所に相当し、概報でいう約50mの落差に通ずる。

出土遺物中、石室内に納置された可能性のある遺物について第9図に掲げた。10は4片のうち石室内に1片が、11は5片のうち3片が石室内との注記があり、10は1点のみで既掘時に、墳丘からの流入か。12は石室との注記はなく、中世以降の砥石である。第10図は墳丘側に係わる遺物である。

的場C号墳

1. 墳丘の規模と構造

本墳は本郷的場古墳群内の烏川段丘崖寄りに位置する小円墳である。烏川段丘崖から約50m北方のゆるやかな傾斜面に占地している。近接する古墳はB号墳が北西方約25m、A号墳が北約35mに位置している。

調査時では墳丘盛土は削平され、わずかに側壁部根石及びその上部の一部が残存しているのみであった。石室部分は古墳に使用された川原石の寄場となっていた。本墳の東南部には七曲砦跡の堀切跡が2mの段差をもって南西～北東方向に走り、墳丘の南東部を切込んでいた。

調査は墳丘規模を明らかにするため石室部を中心にして、幅1mのトレンチを北・西・北西側にA、B、Cの順で設定し、さらに主体部調査のため石室及びその拡張区を設定した。

各トレンチにおける土層は耕作土、褐色土層、軽石層（浅間-B軽石）、黒褐色土層、ローム漸移層、ローム層であり、本墳の構築時の表土層は黒褐色土層であり、盛土はローム層ブロックを含む黒褐色土層を主体にして築土されていた。墳丘の裾部は地層の掘込から推定して奥壁部から半径約6m前後である。また墳丘裾部付近に川原石が集中して認められ、葺石の存在が示唆された。北側裾部では黒褐色土上面から深さ60cmの舟底状の周堀が約8m幅で認められた。周堀内にはB軽石（天仁元年1108年か）による軽石層の堆積が認められ、軽石降下時には墳丘形状を良くとどめていたものと考えられる。墳丘形態は石室の開口する南面を広くした不整形の円墳が推定される。墳丘の直径は12m～14m、高さは2.5m前後と推定でき、主体部の横穴式石室は墳丘の南半分を占める割合で位置していた。

2. 主体部横穴式石室の規模と構造

主体部は両袖形の横穴式石室である。発掘時、すでに天井石は除去され玄室奥壁・側壁・羨道部西側壁の一部が残存している状態にあった。

石室の主軸はN2°Eではほぼ南面している。石室の使用石材は輝石安山岩の自然石で、側壁根石部分に大形石材を用い、上部に向かって小形の川原石を乱石積としていた。玄室奥壁は150cm×70cmと90cm×70cmほどの扁平の川原石2石を根石として立て並べ、両側壁部は100cm×50cm～60cm×40cmの川原石4石を石積し、その上部に大小の川原石を横積に積上げていた。石積は大形石材を重ね、その間隙部に小形石を間詰め用いていた。羨道部の入口部は破壊されており、西側壁が2.65m残存していた。玄室と羨道部との間には玄門柱石があり、さらに床面には20cm～30cmの自然石4石からなる框石が据えてあった。玄室部と羨道部との床面には約20cmの段差があり、玄室部が下位に位置していた。玄室床面は黄褐色粘土と小礫が敷かれ、その下部には20cm～30cmの扁平石材を礎石として敷きつめられていることが確認された。

石室各部分の計測値は玄室の長さ3.15m（右壁）、奥壁根石の幅1.63m、玄室中央部で1.65m、羨道部寄り玄室幅1.62mである。羨道部は残存部で長さ2.65m、玄門部で0.95mを計測した。玄室の長さとの比は2：1の矩形プランを有する。石室の全長計は6.0m前後を測知できる。

石室全長	玄室全長	羨道全長	玄室奥壁巾	玄室最大巾	玄室前巾	玄門部巾
5.80m	3.15m	2.65m	1.63m	1.60m	1.60m	0.97m

裏込めは卵形プランを呈し径5cm～20cmの川原石を使用し、側壁部を厚さ1.8mでめぐらせ、外縁部には

石積が見られた。

古墳の主な構築の順序としてはまず、地表面の整地、つづいて、地表面を卵形プランで長さ3.8 m、幅4.5 m前後、深さ60cmの石室掘方を設け、石室石材および奥壁、両側壁部の根石を据えて、裏込を用いるという過程をとったものと推定される。

3. 遺物

石室内の遺物は玄室中央部から羨道部にかけての床面に認められた。奥壁寄りには攪乱されており、遺物類は残存していなかった。なお石室埋没土およびトレンチから若干の須恵器破片が認められた。

床面出土の遺物は金環1点、鉄製轡1具、太刀1点、刀子1点、鉄鏃破片若干がある。

- (イ) 金環（金銅製）、径2.8cm、錆化が進み、保存は不良である。玄室部のほぼ中央部から出土した。
- (ロ) 轡（鉄製）、全体の形状をよく留めた小形の轡で、鏡板は素環である。玄室前面の東側壁寄りに置かれていた。
- (ハ) 太刀、細身で全長60cmである。玄室羨道部寄りの側壁に接して、切先を羨道方向に向けて置かれていた。
- (ニ) 須恵器、すべて甕形の破片である。石室埋没土およびトレンチから数点出土したが、原位置を示すものはない。器形・手法は7世紀代に相当するものであろう。（平野）

4. 整理段階の所見

概報中の重要内容を記述の順で補記したい。

中世末の城址の堀割西北隅に位置することについて、D号墳は、P.11のとおり七曲の砦または新波の砦の二重郭外の西南隅にあり、中世に破かいされことについての推定は、郭外に高所を設けることは築城上の不利に通ずることでもあり、また第46図1は15世紀の所産でもあるため考えられる。概報中の堀割とは空堀である。

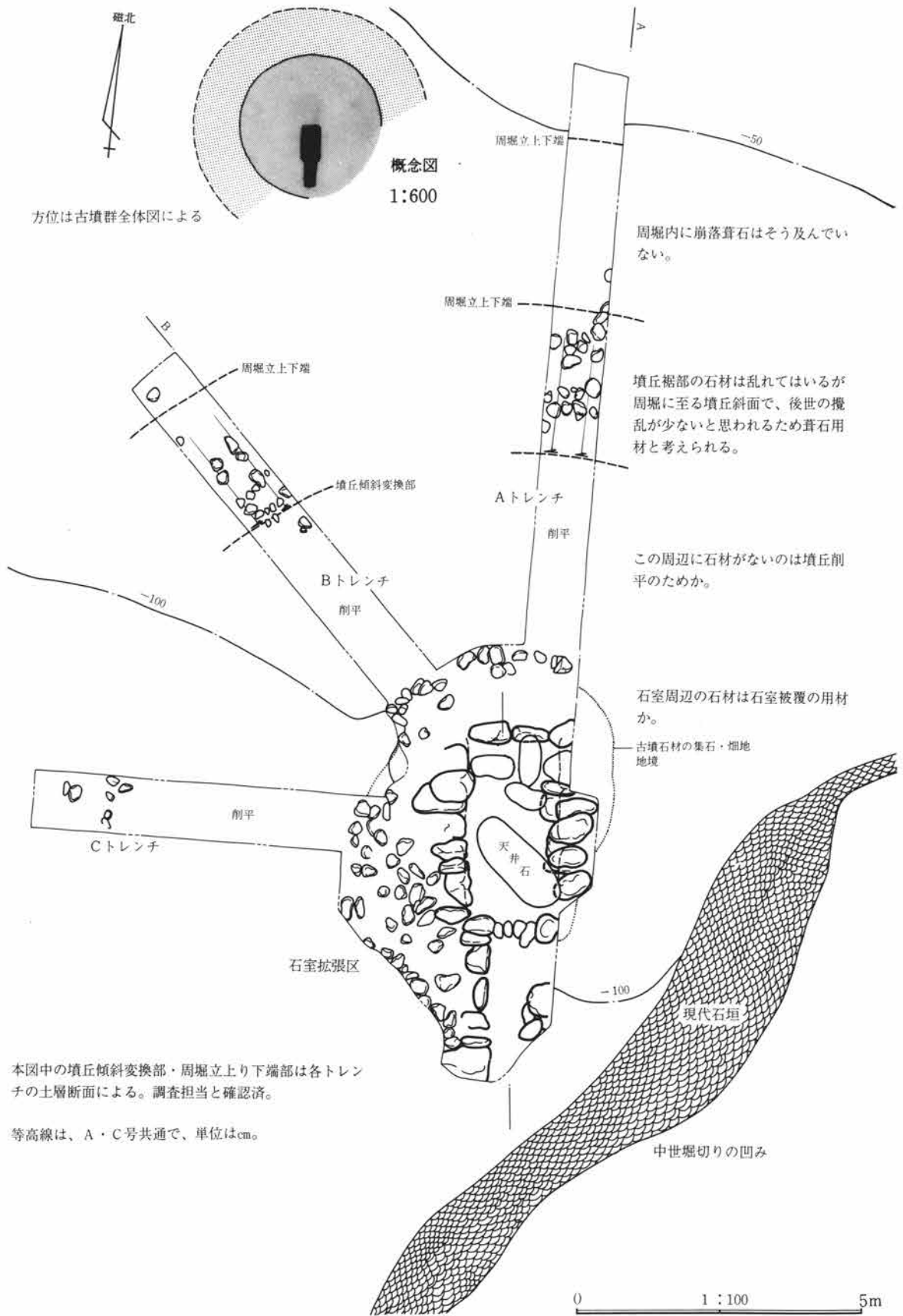
土層表現の黒褐色土は、旧表土の黒色土を意味している。

浮石層が墳丘を覆っていたことについて、それは浅間山B軽石層に相当するようで第14図のAトレンチ東壁断面では注記番号6層が周堀成りに堆積している。しかしBトレンチ東壁で、それは注記番号10層に相当してとされるが、下方の注記番号9層の層位成りが石室裏込の延長個所で幅約2.5mで凹み、その凹みが軽石の降下前に生じたものであれば凹みが埋まるほど堆積してよいはずで土層成りに不自然さが生じている。そのため注記番号10層は図の左・右で分離されるものかもしれない。したがって覆うほどの状況は記録図から窺えない。

墳丘の裾部は奥壁部及び側壁部分から半径6 m内外について、各トレンチの土層断面から墳丘側周堀末端を捉えて作成したのが第13図である。第13図中のAトレンチの墳丘側周堀底端と奥壁直下直の距離は約7.5 mである。墳丘裾部はローム層を約30cm掘り下げたことについては周堀を造出した結果においてである。周堀について空堀状の凹地と表現され、それがどのくらいの幅であったかについては、周堀底面幅の2.9mは測知でき、Aトレンチ内に周堀外縁立上りは検出されていないので墳丘末端（墳丘側周堀底面端）から考えれば4.5m以上の幅があったと考えられる。前項中の8 mは妥当値である。なをA・D号墳と3基の中では最も明瞭でAトレンチ黒色土上面より約70cmをはかる。

葺石については、周堀底に用材の堆積がそう多くないので部分的であったと思われる。

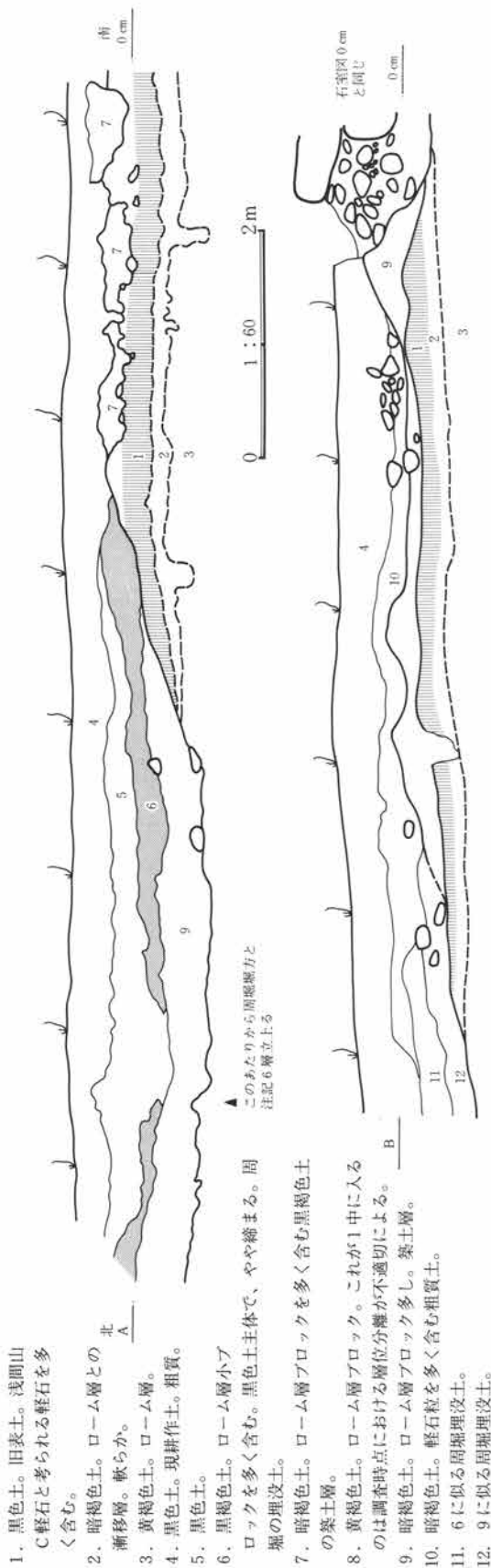
第4篇 検出された遺構と遺物



本図中の墳丘傾斜変換部・周堀立上り下端部は各トレンチの土層断面による。調査担当と確認済。

等高線は、A・C号共通で、単位はcm。

第13図 的場C号墳調査区と墳丘裾部検出位置図



第14図 的場C号墳土層断面図

石室は袖の立石を設け、玄門を有する両袖形石室である。羨道入口については第13図のとおり、調査区と羨道入口左壁とが接しているため、それが当初の羨道入口であったか疑問が持たれる。調査時点の写真（写真図版3左上）を見ると第15図、羨道入口左壁根石がやや大振の石材として、写されており、それをもって羨道入口位置とする可能性は高いであろう。その値は石室全長5.9mである。

玄室床面における粘土と小礫は、一般的には、粘土を用いる例は少ない。その下の礫石については図化がなく、どの程度の石敷状態か不明である。写真には川原石敷が写される。

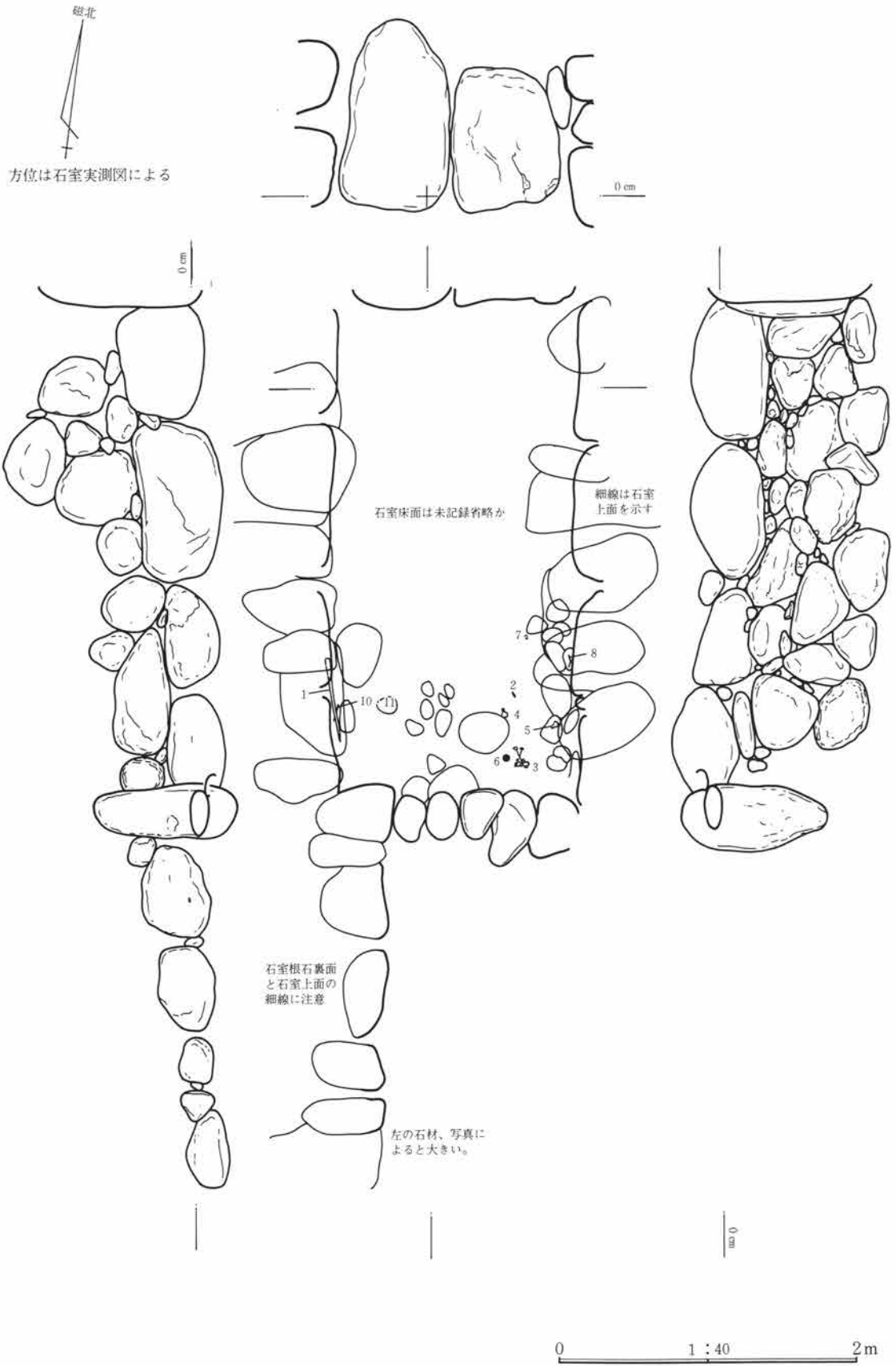
石室の構築について掘方は、第14図によれば黒色土上面より約25cm以上山寄せ状に凹めている。黒色土上面の位置は、玄室部壁石根石の高さの半分から下3分の1位置に相当する。

玄室天井について大きさの知れる用材が発掘当初の集石中に存在していたらしい。第13図の玄室内上面にある大石がそれで、玄室幅約1.6mに対し、約1.85mの長さを測る。それを奥壁用材とするには幅の割に長過ぎる。

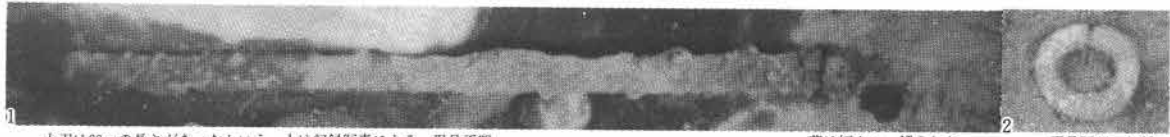
玄室と羨道との間には約20cmの差があり、玄室部が低く、羨道奥に4石からなる框石が据えられている。残念ながら、石室床付近の縦・横断・羨道の石敷についての記録は見当たらない。

玄室内の遺物出土は4基のうちでは最も多く、玄室内から7点の出土がある。原位置であったかは現時点での認定法からすれば接した石材の錆化付着状況や床面小礫の状況から確認されなければならないと思うのであるが、約20年前の緊急調査であるため、そうした図面上の注記はない。ただ大刀の出土位置は左壁石直下であり、攪乱をまぬがれているかもしれない。土器類について、第16図12は4片で、古墳名称のみ。第17図13は4点中石室内1、他は古墳名称のみ。14は30点中2点が石室内、他は古墳名称のみ。15・16は同一個体でE号墳から7片、石室内から5点が、他は古墳名称のみである。（大江）

第4篇 検出された遺構と遺物



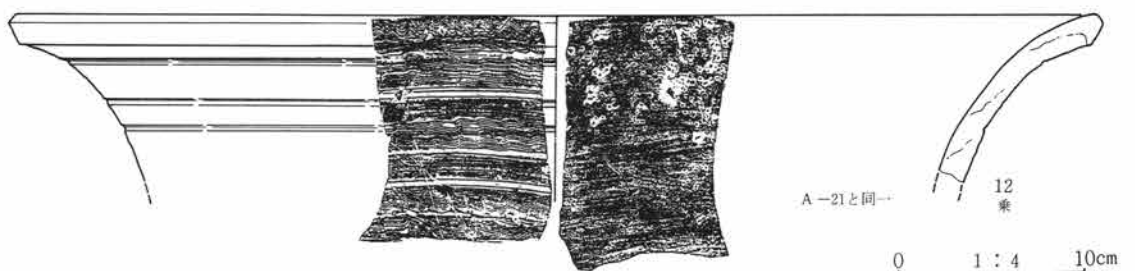
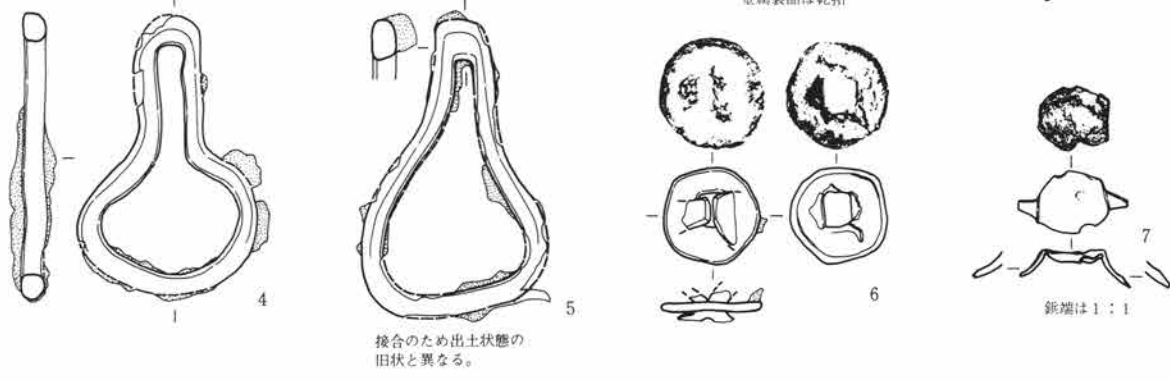
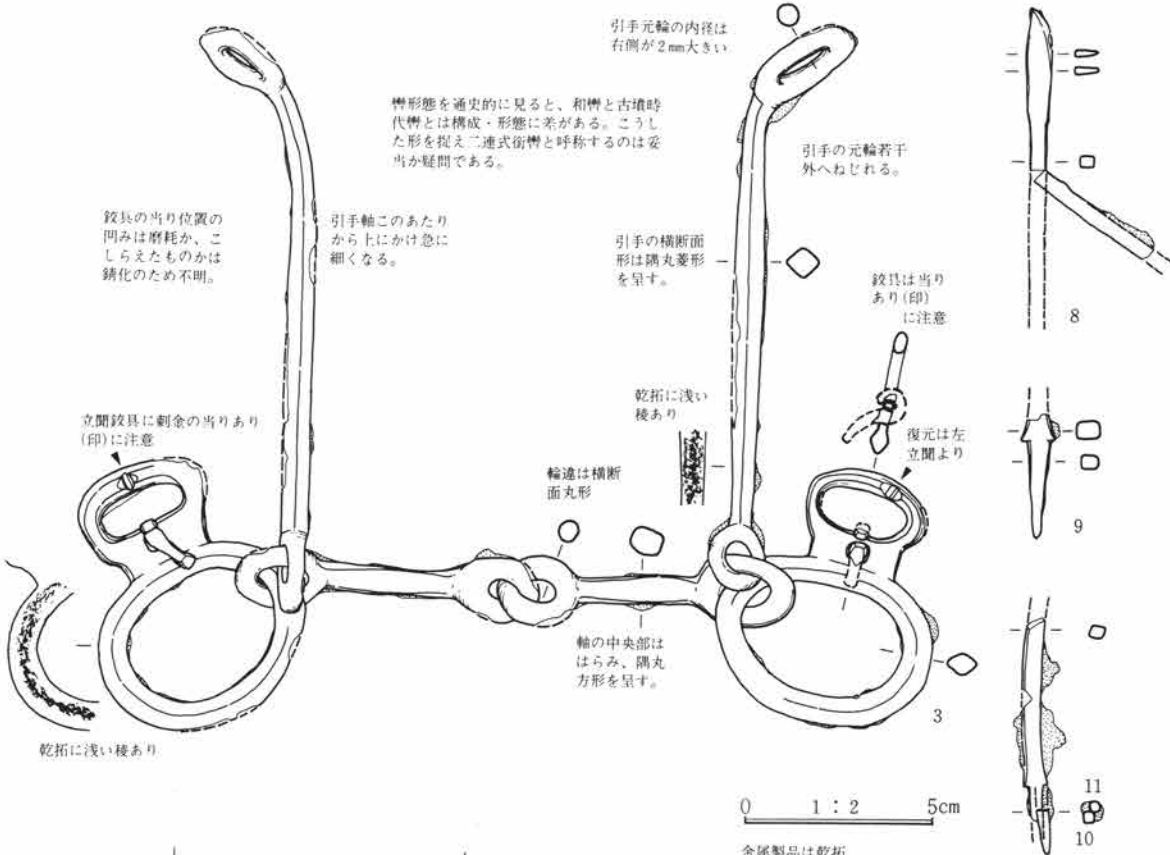
第15図 的場C号墳石室遺構図



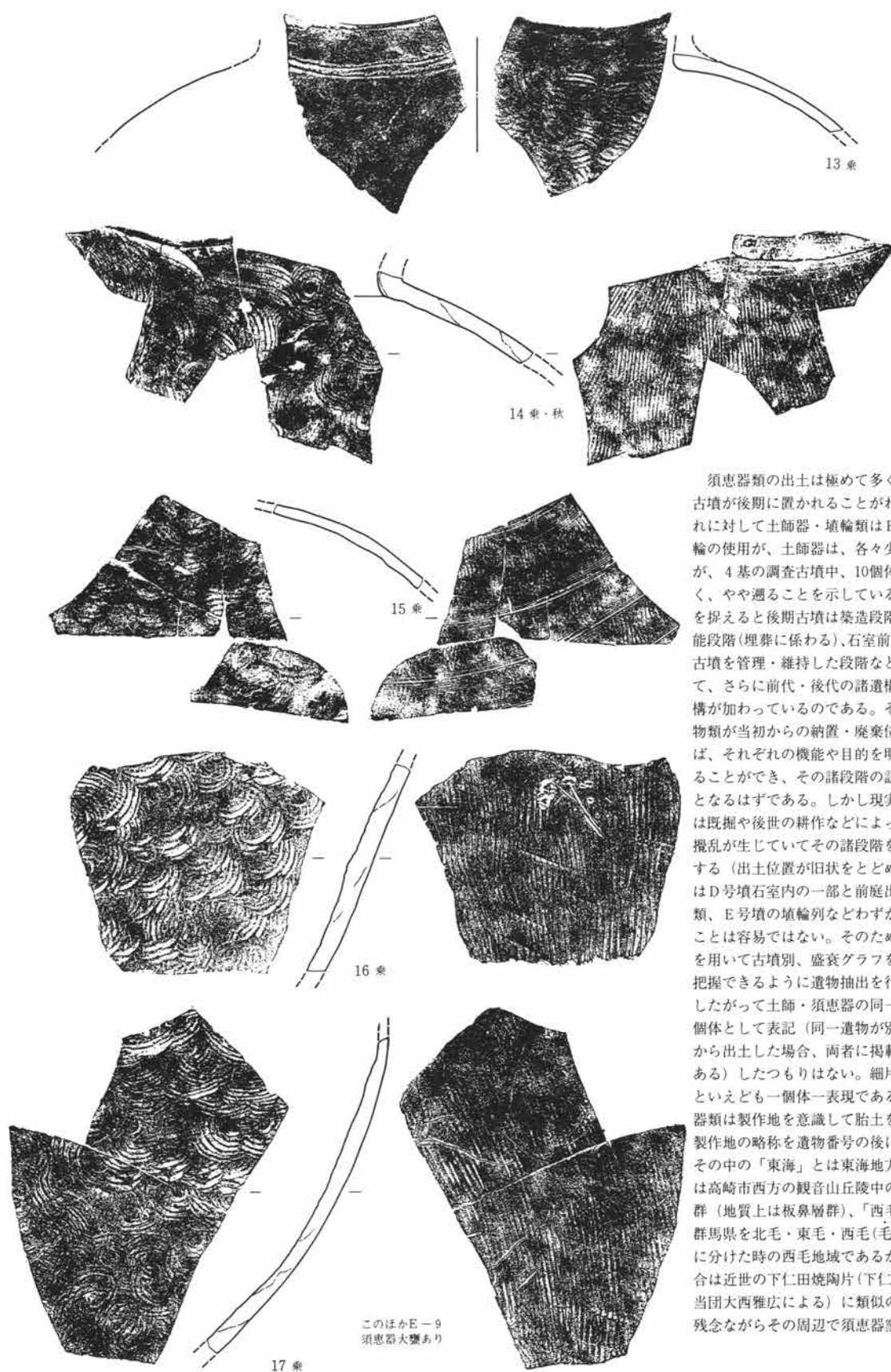
1 大刀は60cmの長さがあったという。上は記録写真による。現品不明。
鋒は付くように見える。

2 冢は短かい。鍔らしき
金具が見える。

現品不明、記録
写真による。



第16図 的場C号墳石室内出土遺物図



須恵器類の出土は極めて多く、4基の古墳が後期に置かれることがわかる。それに対して土師器・埴輪類はE号墳に埴輪の使用が、土師器は、各々少量があるが、4基の調査古墳中、10個体と最も多く、やや遡ることを示しているが、各々を捉えると後期古墳は築造段階、石室機能段階(埋葬に係わる)、石室前機能段階、古墳を管理・維持した段階などを考え得て、さらに前代・後代の諸遺構関連の遺構が加わっているのである。そうした遺物類が当初からの納置・廃棄位置にあれば、それぞれの機能や目的を明らかにすることができ、その諸段階の認定が容易となるはずである。しかし現実には古墳は既掘や後世の耕作などによって多くの攪乱が生じていてその諸段階を明らかにする(出土位置が旧状をとどめていたのはD号墳石室内の一部と前庭出土の遺物類、E号墳の埴輪列などわずかである)ことは容易ではない。そのため出土遺物を用いて古墳別、盛衰グラフを個別別に把握できるように遺物抽出を行なった。したがって土師・須恵器の同一個体を二個体として表記(同一遺物が別々の古墳から出土した場合、両者に掲載した例はある)したつもりはない。細片・大形片といえども一個体一表現である。また土器類は製作地を意識して胎土を観察し、製作地の略称を遺物番号の後に附した。その中の「東海」とは東海地方を、「乗」は高崎市西方の観音山丘陵中の乗附窯跡群(地質上は板鼻層群)、「西毛×」は、群馬県上北毛・東毛・西毛(毛は上毛野)に分けた時の西毛地域であるが、この場合は近世の下仁田焼陶片(下仁田町所在。当団大西雅広による)に類似の土味で、残念ながらその周辺で須恵器窯は未見。

第17図 的場C号墳と注記のある遺物図

0 1:4 10cm

的場D号墳

1. 墳丘の規模と構造

本墳は本郷的場古墳群中では烏川段丘崖より120m地点にあり、丘陵性台地の尾根部分に相当する地点に位置していた。発掘時、古墳の墳丘はほとんど平夷しており、畑地となっている地表面が周辺部より約1m瘤状を呈し、径3～5mの範囲を占めていた。しかしボーリング調査の結果、石室の存在が確認されたので、主体部横穴式石室部分と主体部後側（北部）及び東側部にトレンチを設定し、主体部横穴式石室の規模構造及び墳丘規模の調査を実施した。

本墳の位置する地点の自然地層は第1層表土層（40～50cm）、第2層Bスコリヤ含有砂質層、第3層浮石含有黒褐色土層、第4層茶褐色土層、第5層ローム層という層序を示しており、本墳構築時の地表面は第3層にあり、第3層を掘り下げて石室を構築していた。すなわち石室後方トレンチ及び東側トレンチ内の所見では第3層の浮石含有黒色土層の掘込みは石室裏込め根石部で深さ50cmあり、掘込み部分に小形の川原石を捨て石として、つめ込んでおり、裏込め部の厚さは奥側部で50cm側壁部で70cm、羨門付近で1mで短形のプランである。短形プランの規模は長径6m、短径3mである。この裏込め部は黒褐色土層の掘り込み面を境いに上部は内側に傾斜する石積みで表面をそろえているが、その高さは掘方部より60cm、下半部の厚さ40cmで、全高約1mである。裏込め根石は石室床面より40cmの上位に位置していることになる。

この裏込めを覆う積土は黒褐色土中にロームブロック、焼土を混入する土質で、ほぼ互層をなしていたが、その範囲は石室後方で4m、東側で3mである。

葺石は大部分が破壊され、根石のみが残存していたが、その範囲は羨道部前面の前庭部側部より西側で3m、東側で1.2mまで確認されたが、後側及び東側トレンチ内ではまったく認められず、本墳においては墳丘前面のみに施設されたものと推定される。礎石根石の設置された面は第3層の浮石含有黒色土層の上面であった。以上のことから見て、本墳の墳丘は直径8m前後を推定でき、墳丘の高さも石室天井石を覆う程度で、現在の地表面より若干高く、構築時においては1.5m前後ではなかったかと思われる。埴輪類は存在しない。

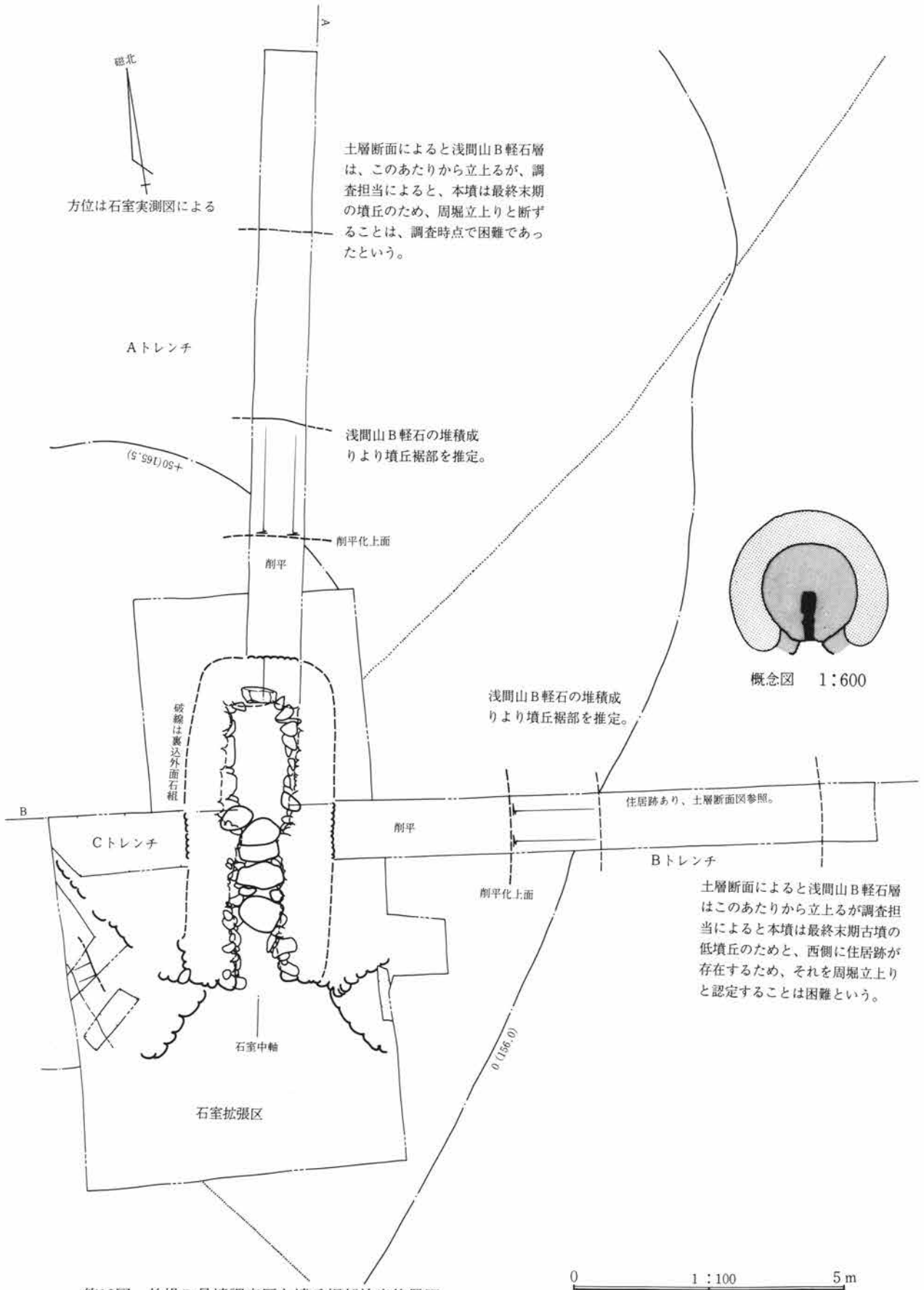
2. 主体部横穴式石室の規模と構造

主体部は両袖式の横穴式石室で前庭施設を附設している。主軸の方向は175度でわずかに東偏している。使用石材は輝石安山岩質の自然川原石であり、側壁根石と玄室奥壁には比較的大形石材を使用し、横積みであるが、上部にむかって石材は小形のものが多く、小口積み方法を取った乱石積みである。奥壁部は高さ1m、最大巾0.95mの根石に0.75m×0.45mの川原石を積み、周囲に小形川原石を横積みし、間に小石をつめた多石構成であり、残存部の高さは床面より、1.45mである。側壁根石の構成は左壁11石、右壁8石であり、玄門部は高さ0.70mの長大の川原石を両側に立て、羨門部は0.40m×0.50mの川原石を横積していた。石積みは玄室部6段、羨道部6段である。

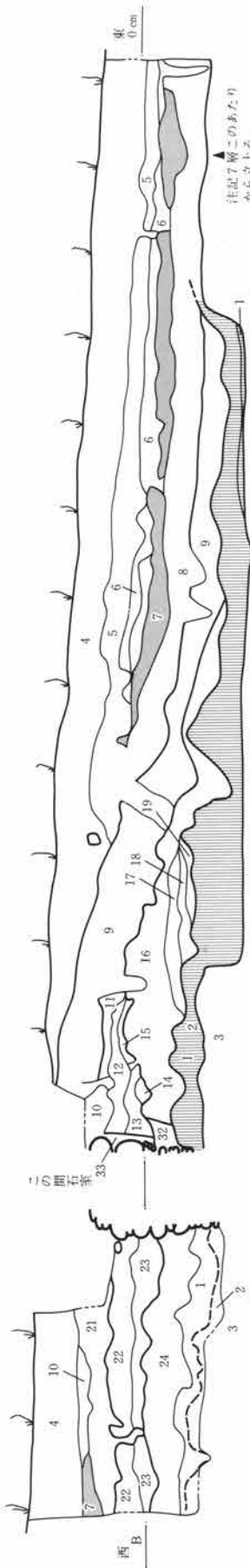
天井石はいずれも長大な川原石で5石が残存していたが、玄室部4石、羨道部4石からなっていたと推定される。

石室各部分の計測値は全長が主軸上で5.20m、玄室は主軸長2.30m、奥壁部巾1.30m、中央部巾1.35m、前面巾1.30mで、やや中央部に張りのある矩形プランである。羨道部は主軸長2.90m、玄門部巾0.80m、羨門部巾0.85m、中央部にややふくらみがあり、最大巾は1.0mである。

第4篇 検出された遺構と遺物

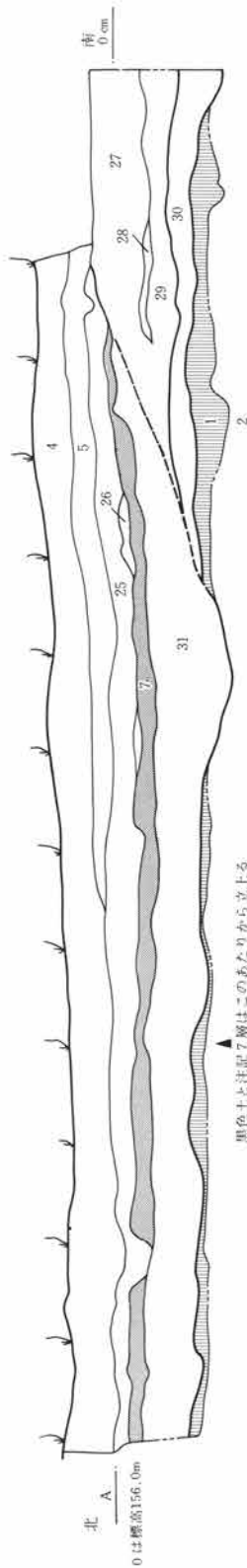


第18図 的場D号墳調査区と墳丘裾部検出位置図

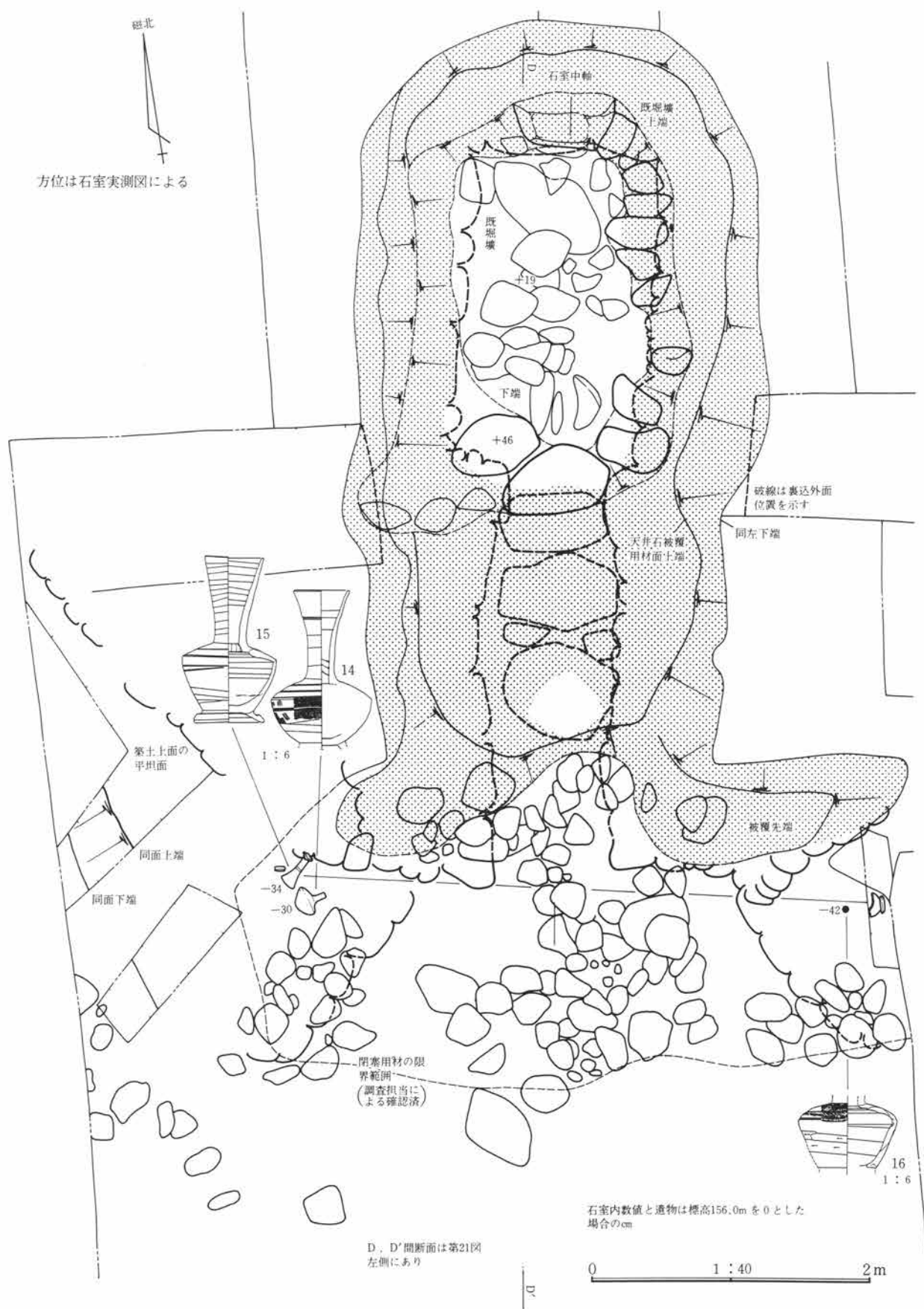


第19図 的場D号墳土層断面画図

10. 黒褐色土。ローム層ブロックを含むが黒色土味強い。築成土。
11. 黒褐色土。ローム層ブロックが多く築成土の感が10よりもさらに強い。
12. 黒褐色土。ローム層ブロック少ない。褐色土。ローム層ブロック少なく、黒色土味少ない。
- 14・15. 褐色土。軽石を含まない褐色土。12-15は築成土。
16. 黒色土。黒色土味強い旧表土層を主体とした築成土。
17. 黒色土。16に似ている（整理担当補注、旧表土か、周辺住居跡に伴なう焼土か）中に焼土を霜降状にまじえる。築成土。
18. 暗赤褐色土。焼土と灰を極めて多く含む。19. 黒色土。黒色土味強く、焼土粒入る。
20. 黒色土。浅間山A軽石と考られる軽石粒を多く含む層。粗質。
1. 黒色土。旧表土層。浅間山C軽石層を多く含む。1'は住居跡床で注記中に構式という土器名称が見られるので、住居跡は弥生時代か。上図の凹みが住居跡で出土遺物はない。
2. 暗褐色土。ローム層と黒色土との漸移層。軟らか。3がローム層。
4. 黒色土。現耕作土で、粗質。浅間山A軽石を含むと考えられる層。
5. 黒色土。浅間山A軽石と考えられる軽石粒を多く含む層が部分的に入る。粗質。
6. 黒灰色土。浅間山B軽石と考られる軽石粒を多く含む層。粗質。
7. 黒灰色土。浅間山B軽石粒を主体とする層（トーン）。上図右側、立ち上る点に注意。
8. 黒色土。茶褐色の軽石粒を特徴的に含む。黒色味の強い層。周堀埋土。
9. 黒褐色土。8よりも褐色土味が強く、一部が住居跡内覆土となる。周堀埋土。

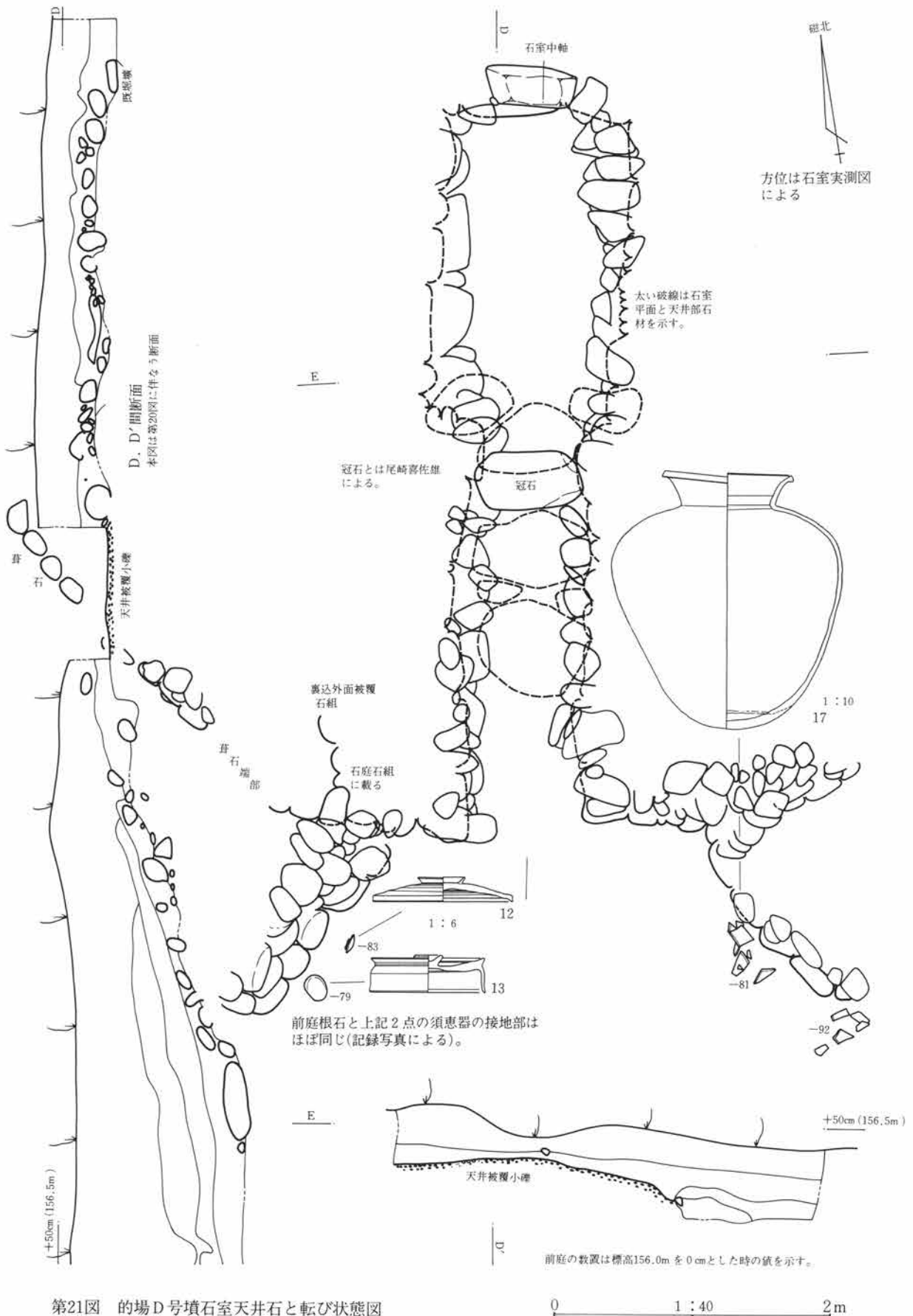


28. 黒褐色土。ローム層ブロックが集中的に入る。築成土。
29. 黒褐色土。ローム層ブロック入り、黒色土味強い。築成土。
30. 黒色土。31よりも黒色土味強く、軽石がまばらに入るか、ローム層ブロックは入らない。それでありながら29とは区分される土層。北（図左）に至るにしたがって31との区分は困難になる。
31. 黒色土。軽石粒をまんべんなく含む。
32. 暗褐色土。軽石粒を含まず、黒色土味強い。
21. 黒色土。ローム層ブロックはか軽石粒を多く含む。軽石粒は浅間山C軽石の質感あり。
22. 黒色土。ローム層ブロックは少なく、茶褐色の軽石を含む。軽石粒は浅間山C軽石か。築成土。
23. 黒色土。ローム層ブロックもほぼ全面に極めて多く含む。築成土。
24. 黒色土。浅間山C軽石と見られる軽石を極めて多く含む。粗質。
25. 黒褐色土。やや褐色味をおびる黒色土。（整理担当補注、浅間山A・B軽石を含むらしく砂質という。）
26. 黒灰色土。浅間山B軽石と見られる砂質土中に粘性の褐色土が部分的に入る。（整理担当補注、粘性の褐色土は浅間山B軽石降下当初の暗褐色の火山灰か）
27. 黒褐色土。黒色土味強く、含まれる軽石粒が乱れる。当該層は31と区別されるべきだが明確な区分が認められず漸移的に変化すると調査員松尾宜方という。図中の破線は整理担当の加筆。



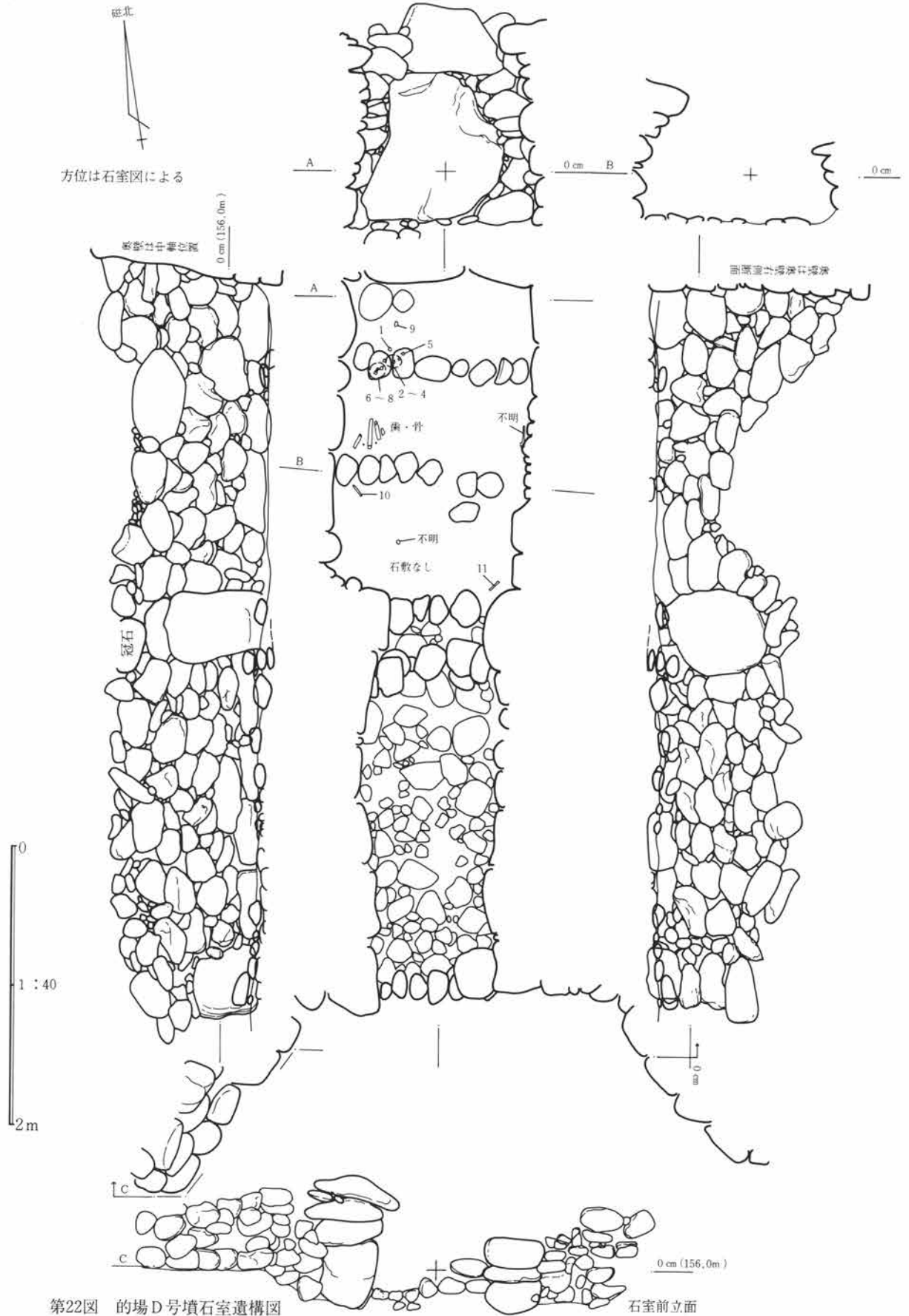
第20図 的場D号墳石室天井被覆状態図

的場D号墳



第21図 的場D号墳石室天井石と転び状態図

第4篇 検出された遺構と遺物



前庭部は石室裏込めの巾2.4mを上辺とする台形プランで、下辺は4m、斜辺は1.5mである。墳丘前面にむかって開いている。側部の根石は東側4石、西側5石でいずれも川原石である。前庭部床面は石室部床面と同一レベルであり、第3層の浮石含有黒色褐色土層下の第4層茶褐色土層上が本墳石室全体の構設面である。前庭部側壁は第3層浮石含有黒褐色土層の堀方にそって垂直に、上面が堀方上面に一致する高さである。

石室内の施設は玄室部が奥壁部より0.65m及び1.40mの地点で川原石の間仕切石を並べ、3分割している。礎石は奥壁部に2石残存したが敷石は認められず、茶褐色土層上面が床面に相当し、砂利が敷かれていた。これに対し羨道部は小礫を敷きつめている。

玄門部は玄室に向け、小口をそろえて並べて榎石とし、その上に小礫を小口積みにしており、羨門部では前庭部に向け、小口をそろえて並べた仕切石を2段に積み、その上部は小礫を重ね、羨道部全体を充填していた。

石室プランは整然としており、石室規模に比べ墳丘規模が小形である。玄室部中央部分に墳丘の中心が位置しており、墳丘規模の縮小化の見られる古墳である。

3. 遺物

本墳の出土遺物は大別して玄室内と前庭部とに区別される。玄室内からは刀子2点、大刀1点、金銅製帯金具8点、その他は人骨が出土した。前庭部からは須恵器大甕、坏、長頸壺破片が出土した。

- ㊶ 刀子、2点のうち1点は西側寄り、1点は東壁寄りの床面上面15cmほどの混土砂利層中から出土した。
- ㊷ 大刀、半折しており、西側壁寄りから刀子とともに出土している。細身である。
- ㊸ 銅製帯金具、奥壁東側隅に近い地点から発見された。鉸具および帯の飾り金具であり、飾り金具は方形の巡方と半円形の丸軋とを、四隅・三隅で鋳留したものである。奈良時代前半に類例が見られる。
- ㊹ 須恵器、いずれも前庭部であり、大甕は羨門直前で、上に羨道部裏込め石の一部が崩壊していた。坏、長頸壺は両側石垣寄りにほぼ完形で出土した。東側石垣寄りには甕破片が存在した。いずれも原位置と考えられ、供献の容器であるが、形式的には長頸壺の形式すなわち、高台を有し、胴部は肩部に張りをもつ。いわゆる奈良時代前期の特徴を有するものに同一である。

- ㊺ 人骨、玄室東壁東側に近い地点から出土したが、大腿骨、腰骨の一部、臼歯4点が集積された状態で残存した。

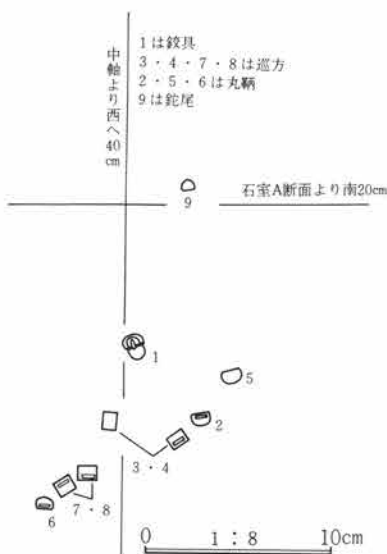
遺物の様相はいずれも古墳時代終末期から奈良時代前半の特徴を示すものであることを指摘したい。(松尾)

4. 整理段階の所見

概報中の重要内容を記述の順で補記したい。

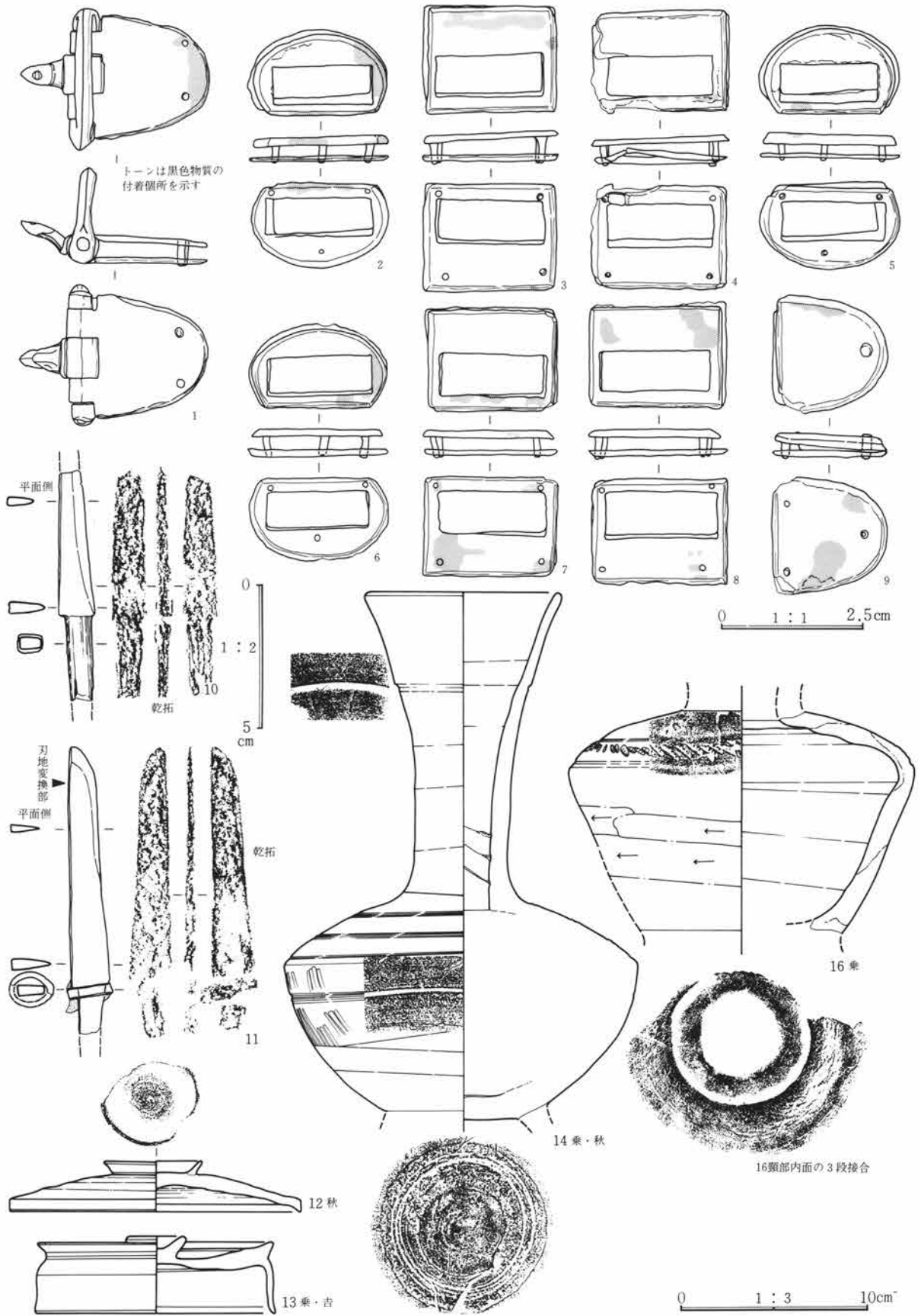
墳丘の内容に関して、第2層Bスコリヤ含有砂質層、石室裏込根石部の深さ、積土に焼土の混入あり、葺石、墳丘は8m前後、石室に関して形態、構造、前庭施設、天井構造、^{しきみ}榎石などである。

第2層Bスコリヤ含有砂質層は浅間山B軽石層のことである。第19図中の注記番号7がそれで、6・25・26が堆積以降に攪乱を受けたと考えられる層である。

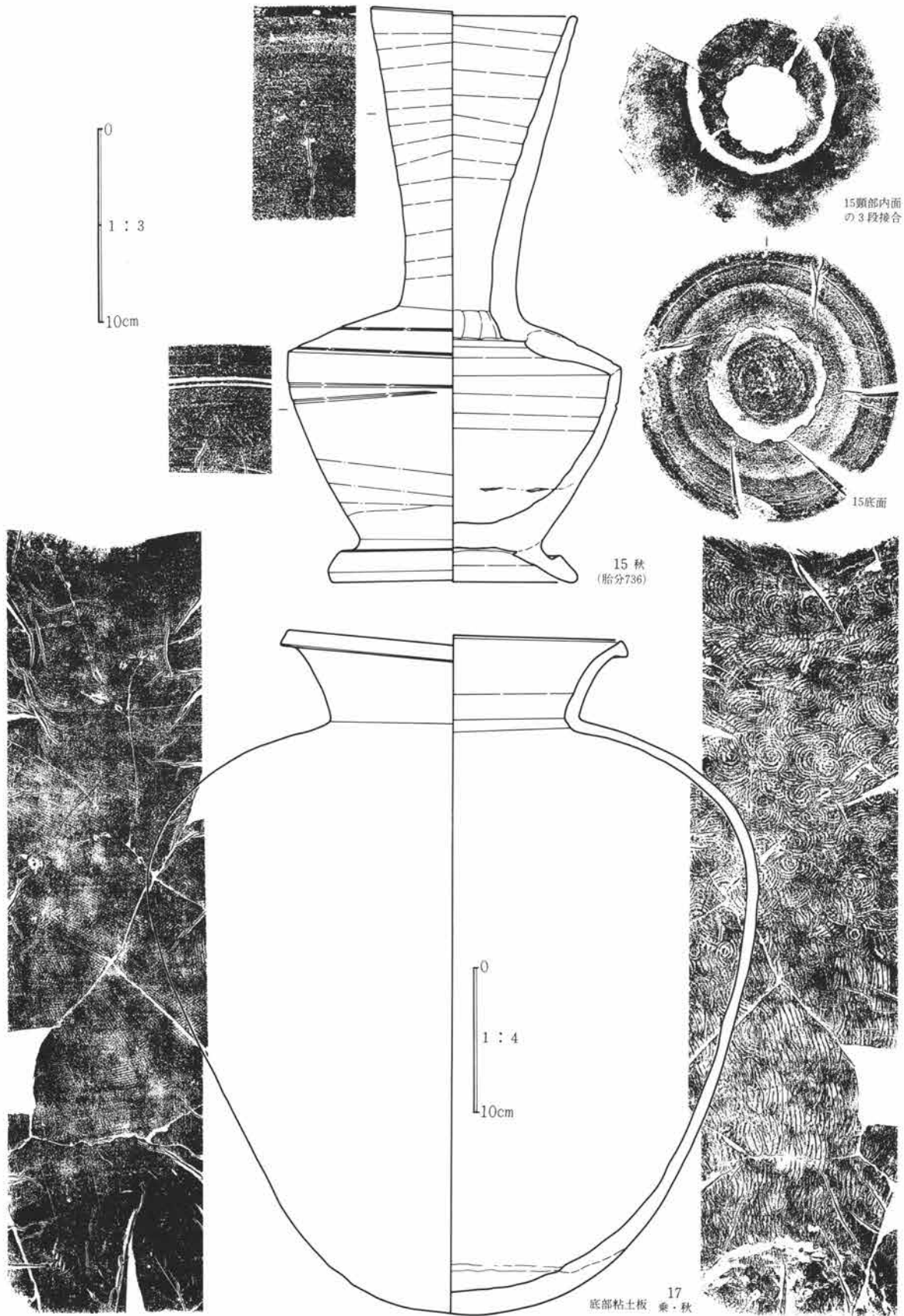


第23図 帯金具出土状況図

第4篇 検出された遺構と遺物

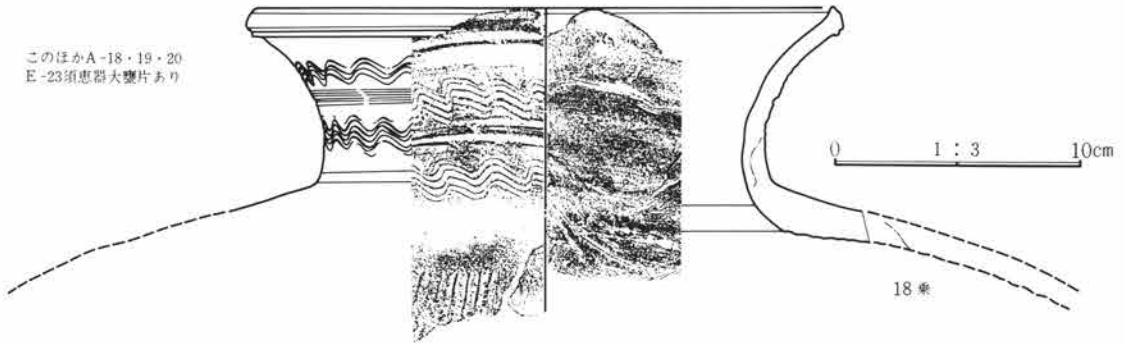


第24図 的場D号墳石室・石室前出土遺物図

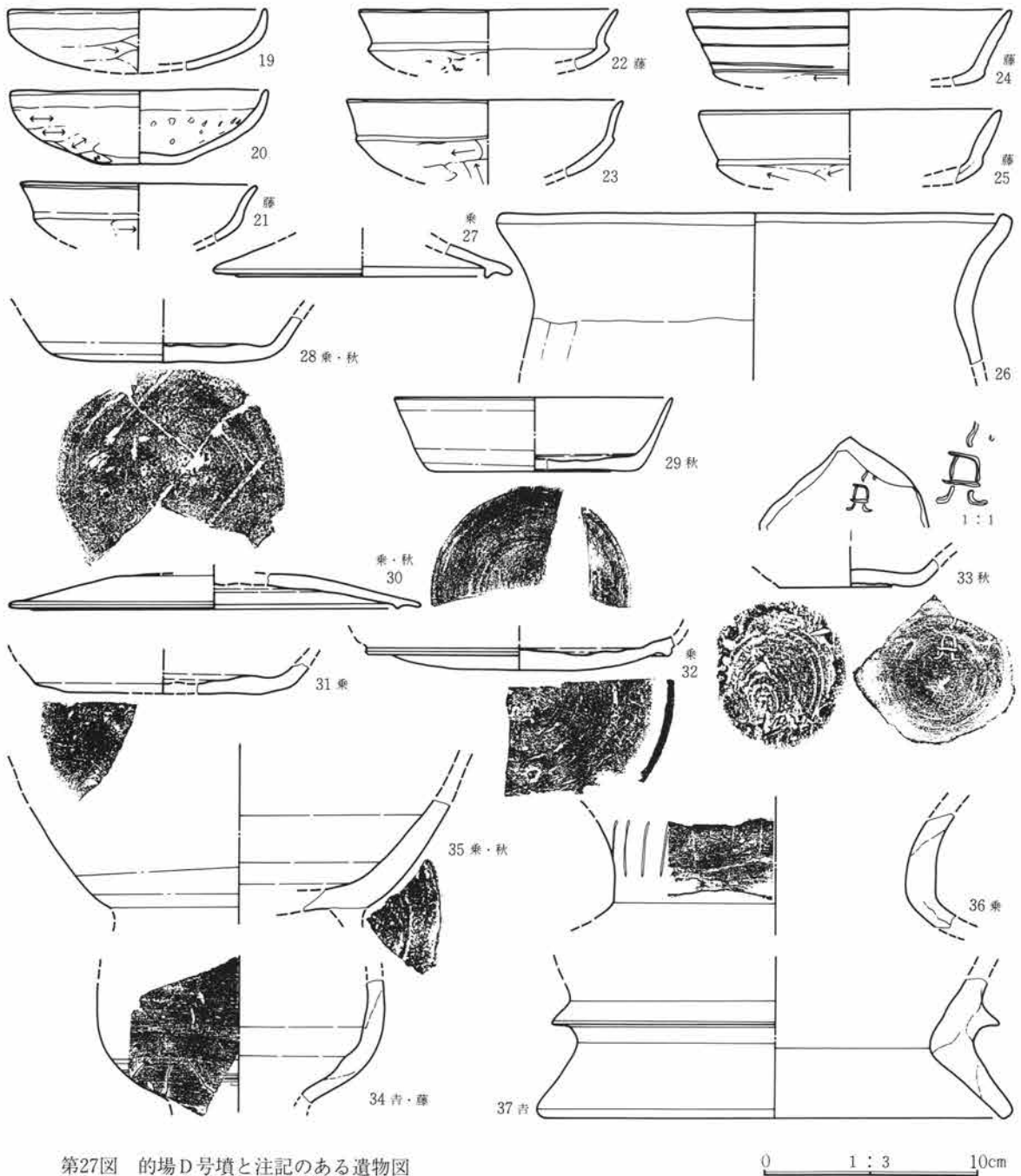


第25図 的場D号墳石室前出土遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物



第26図 的場D号墳石室・石室前出土遺物図



第27図 的場D号墳と注記のある遺物図

積土に焼土粒が混じっていた点については、平面範囲が記入されていないので、はっきりしないが、Bトレンチ断面注記17・19にそれが見える。17・19が指摘された内容と一致する築成土であれば、位置が墳丘基部側に近いことから周辺住居跡の焼土かまたは構築当初の焼土と考えられる。Bトレンチで検出された住居跡は調査員松尾宜方の日誌を見ると「樽式期の弥生住居址一棟確認。」とある。出土遺物中に弥生式土器はなかった。

葺石については大部分が破壊され、根石のみが残存していたという。第18図のとおり墳丘図を見ると石室入口左・右について石組が見え、B・Cトレンチ内および同断面には見えないので、施されたとしても、極めて限られた葺方であったようである。

墳丘の直径8m前後については、Aトレンチの墳丘側黒色土末端とトーンで示した浅間山B軽石がわずかに上り勾配となる位置と石室入口とを捉えれば約10mを測る。またBトレンチ内での墳丘末端を築成土とされる第19図注記番号16の末端とトーンで示した浅間山B軽石層のわずかに上り勾配となる変換部を捉え、それと石室中軸との距離は6.2mで、それを西側に折返せば墳丘直径12.4mとなる。

石室に関しては、両袖形石室で、立石を袖とした玄門の構えが設けられている。玄室部は既掘によって天井石材の大半を失なわれていたが、玄門のあたりから入口にかけ、玄室入口部天井石1、玄門の架材1、羨道部奥側天石2、計4石の天井石が残存していた。玄室部天井架材について調査員松尾は4石と推定している。石室内天井石の成りは石室上面を見ると、羨道部は入口側から序々に高まり、玄門において門の架構石材が天井部より約30cm下る。玄室門の入口側は羨道奥の天井高とほぼ同じで奥にしたがい高まる。

天井被覆構造は、平面状態を第20図に、断面状態を第21図に示した。県下における横穴式石室の発掘例中、天井石材を複数で調査し得た例は極めて少ないので、本例は稀少な例である。残念ながら天井石縦断面が残されていなかったため石室平断面図中に加えることはできなかった。天井石の上は、拳大前後の河原石小礫で覆われ、(記録写真による)石室裏込石材はさらに全体を囲むように石組となって記録写真に見える。その状態は裏込外面石組上を被覆しているのではなく、裏込外面石組の最上石材と接するので、裏込外面石組の最上段の石材に囲まれた内部(天井石架構後)を敷き詰めたと見てとれる。第20図のトーンは天井被覆石材をの広がりを示すトーンであるが、粘土等別の用材の範囲ではない。その範囲の形態は調査記録によるが、写真と照合すると被覆用材の範囲は漏らさず記入されたようで石室入口の左・右石組の上面まで張出してある。写真によると小礫の存在は石室入口の左右では少なく、本来的ではなさそうである。

石室の掘方は概報による黒色土層の掘込みは裏込根石部で、深さ50cmであるという。記録された墳丘・石室断面(第19図)に-50cmの深さの箇所はないため、その数値は山寄せ構造が最も深くなる奥壁裏の黒色土上面からの石室の深さと推測される。Bトレンチ内(玄室右壁裏)で約15cm、Cトレンチ(玄室左壁裏)で約25cmを測る。裏込外面は記録写真(Cトレンチ)によれば石組をなしており、雑然とした感はない。おそらく、天井被覆に達するまでその石組状態で石室裏込外面を成していたものと類推される。その石組はA・C号墳の裏込外面の用材相互に間の詰が少なくないのに対し、D号墳では小円礫により間の詰がなされている点が写真外観からの所見である。

玄室部は奥壁下に礎石が2石残存(第22図平面)したが敷石の広がりにはなかったという。床面には小砂利敷があり、写真によれば、1~2cm程の小礫を含んでいるのが見える。玄室中央には間仕切の区画が扁平な河原石によってあたかも棺座のごとく設けられ、その中から人骨や歯も検出されているが、その一方で耳環が奥壁下から、帯金具一具が奥側の間仕切石上附近から出土している。壁石は自然石乱石積と言っても変則的ではなく、概報によればある程度目を通したように小口に組まれている。壁用材は、A・C号墳を含め、

3基の両袖形石室の中では最も小振の石材を多用し、部分的に大石を組込んだ特徴がある。その特徴は3基の自然石乱積とされる中で、最も乱石積に近い状態を壁面図から窺うことができる。

羨道の閉塞状況について概報によると小礫を重ねて羨道部全体を充填していたとある。記録写真を見ると、羨道入口石組と、梱石の間は雑然とした状態で20～30cmの厚さで小円礫～人頭大の川原石が写されているので、整然と小口に積上げた閉塞ではなかったことが確認される。壁石は玄室部が石材の間を埋める小円礫が少なかったのに対し、羨道では多くなっている。転びは第21図と第22図の石室断面図のとおり迫り出し顕著な状態となり、B断面では内傾の角度は60-70°の傾きとなり、天井石材も、それに合せ、小振りであったと考えられる。その転びの状態はA号墳の玄室内B断面で内傾角75～80°、C号墳の玄室内で80～90°であるから最も顕著である。

前庭は、群馬県地域に独特な石室前特殊構造の形態にある（石室前の広場的空間は横穴墓のそれと類似するが、横穴墓の少ない当県にとって石室前庭＝石室前特殊構造であり、横穴墓の前庭とは切離して考えられている。石室前特殊構造の名称は尾崎喜佐雄「横穴式石室編年への一考察」『史学会報第5輯』1954による）。前庭の検出は石室前の崩落石材の上面で当初の整査（第20図）が行なわれ、その状況を記録写真（写真図版5左上）で見ると前庭右壁上面の石組と、その背後上方（北側）に須恵器大甕（須17）が、さらにその右奥側に、石室右側の葺石上面の石組が見える。しかし、前庭左壁側の石組上面は写真には見えないので、この時点では検知されていなかったようである。写真に明瞭な形で前庭が写されているのは写真図版5の右下の状態に至ってである。第21図は前庭記録図に漏れている上面石組および遺物出土位置とを記録写真を基にして第20図から合成したものである。その結果、いくつかの所見が得られた。読者の関心事に石室入口脇葺石の石組と前庭石組とは同時に組まれたか否かであろう。それについて第21図の石室入口左側葺石上面と前庭石組左壁上面との上に葺石の石組の一部が乗っている状態が見られ、それだけ見れば、ほぼ同時期の構築が考えられなくもないが、右壁側、葺石と前庭石組の接点とが別々に組まれた状態があり、さらに第22図の石室前立面状態のとおり、前庭石組状態は、羨道入口根石基部高よりも前庭石組根石基部が約25cm高いため、近接古墳群の前庭石組根石の在り様と異なっている（たとえば奥原古墳群例では前庭石組根石の方が羨道入口基部よりも低いか、ほぼ同じ高さ）。そのため外観の資料上からは葺石と前庭石組との関係について葺石が先に、前庭石組が後に設けられたことが明らかで、さらに前庭の構築は、同時期でなくいく分後出した頃の構築と考えられそうである。前庭の設置は石室掘り方が旧表土の黒色土が羨道入口のあたりで上面位置（±0）となるので少なくとも25cm高い前庭石組裏は客土である。それが客土であることは遺物番号15・16が含まれていたことから明らか（第20図・写真図版6）で、さらに遺物番号15は前庭石組左壁上面に上半部が、下半部が右壁裏客土中から出土し、両者合せて、完器に近い復元が成った。その点は遺物番号15の復元率の高さからも裏付けられるが前庭構築に直結する須恵器である。製作は8世紀初頭頃で秋間窯跡群製に共通の胎土に見える。そのほか前庭関連の出土遺物に12・13・17があり、12・13は前庭左壁根石の高さから出土し、8世紀前半頃の須恵器である（出土土器類は24・25が7世紀前半以前で、7世紀中頃以降の土器類について残存状態が多くなり、14・19～23・36がその頃の製品である。8世紀前半も多い段階で、12・13・15・19・20・28・29・30・31・32がその頃の製品である）。17は記録図を見ると第21図内の位置であるが、写真図版5左上のとおり、主体は前庭右壁裏の平坦部に主体破片が写って見える。

石室内からの出土遺物は第24図1～11がそれであり、特に帯金具の出土状態は一具を成していたと思える状態であるので第23図に拡大図を加えた。（大江）

的場E号墳（稲荷塚古墳・久留馬村18号）

1. 墳丘の規模と構造

上毛古墳総覧久留馬村第18号墳として記載されている本墳は的場古墳群中では大塚古墳（第13号墳）に次いで大形の古墳である。調査時、すでに主体部横穴式石室の天井石が除失して、川原石構造の石室の一部が露出していたが、おおむね墳丘の形状は良好で、雑木林の覆うところであった。周囲は畑地であった。地形的には烏川左側段丘崖上縁より約60m内側に入った台地の尾根部分に占地しており、標高161.14mが墳丘頂部の標高であり、占地する地の標高は156m前後である。

発掘時の所見によると墳丘は西方に低い張り出しが認められたが、その部分との比高が3.3m、墳丘部を圍繞するコンタは墳頂より3.5mであり、南側と北側にはほぼ東西にのびる4.0mのコンタが入るが、これは自然地形を示すものであり、このことからみて、本墳は占地する丘陵性台地の走向に一致する方向で構築されたことが明確である。西北面して石室の主軸方向302度で位置したものである。

実測による各部分の数値は次表のとおりである。

墳丘主軸方向	302度
墳丘主軸全長	34.5m（西方の張り出しを含む）
墳丘径	22m（東西）、23m（南北）
墳頂部部径	約7m
墳丘部高さ	3.5m～4.0m（周辺部より）

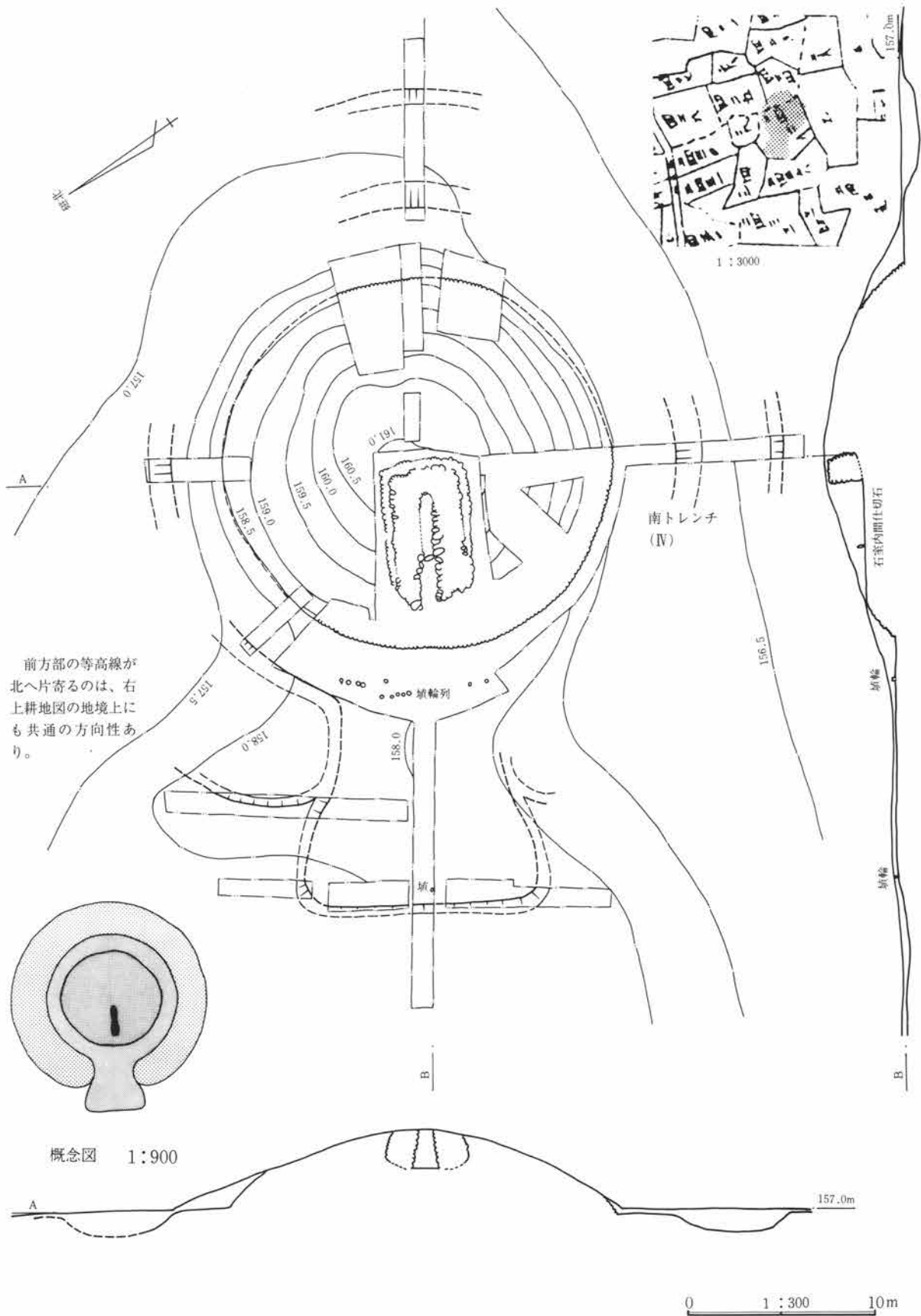
周堀の存在状態、およびつくり出しの構造については計測不明の状態であった。

発掘調査は墳丘規模、葺石、埴輪類の追求、周堀の有無の確認、主体部横穴式石室の全掘を目的とし、墳丘部を4等分し、これを基準としたトレンチを設定、必要に応じ発掘区を拡張した。この結果、墳丘東側から南側、西側裾部にかけて葺石を露し、西側において、つくり出しの存在することを明らかにし、周堀部については東側、南側で形状を明らかにすることができた。

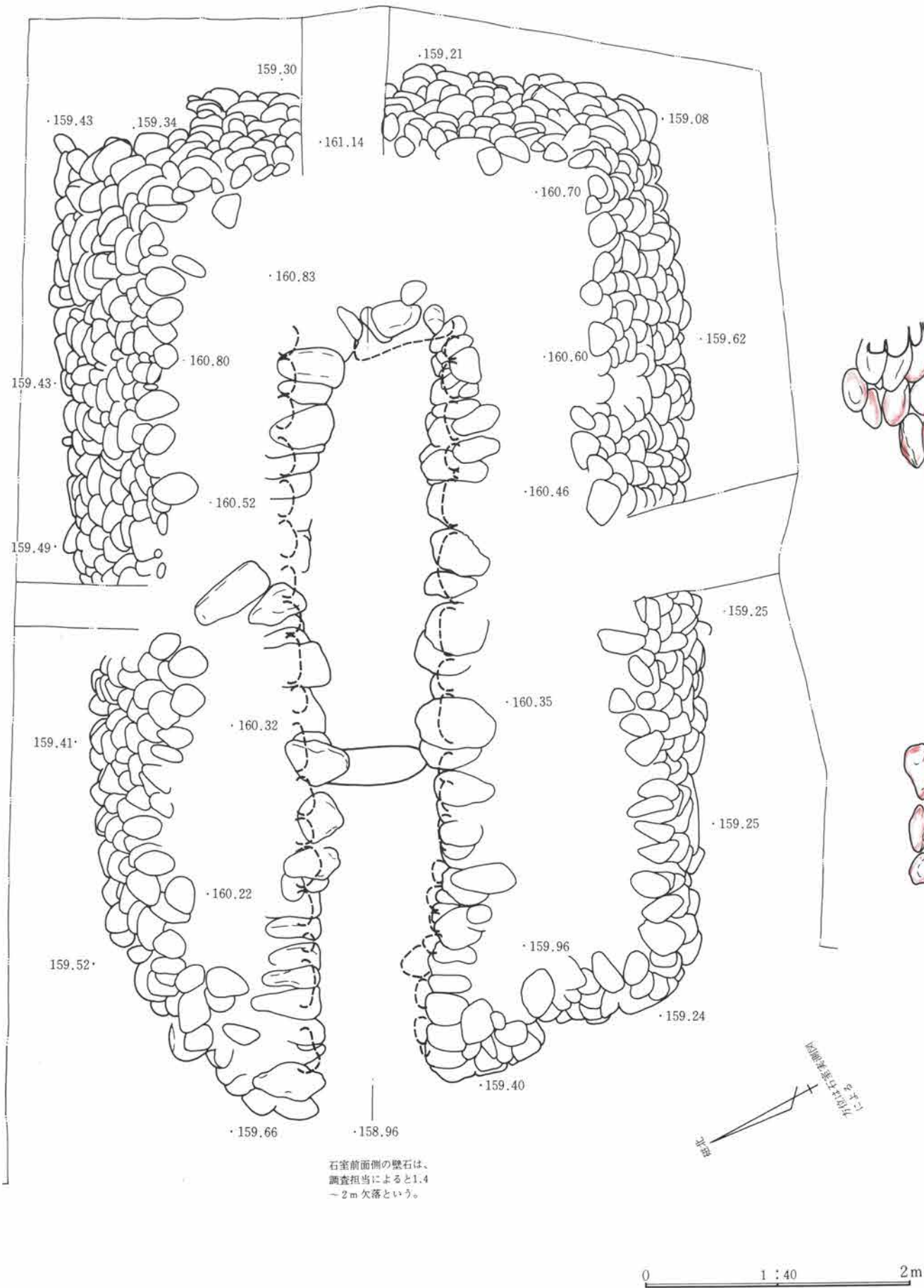
（1）墳 丘

石室後側に設定したトレンチの所見によれば墳丘の積土はローム質土、黒褐色土を主とした積土で、ほぼ水平方向に堆積し、基底部は黒色土層の上面に火山灰層があり、この上面真上に9層からなる層が構成され、各層の厚さは10～80cmで、墳頂下4.1mまで積土層であることがわかった。この傾向は墳丘主軸線東側墳裾部においても認められ、水平に積土した縁辺を傾斜50度で切り落し、この部分に葺石を高さ1.4mで圍繞しており、葺石基底部は黒色土層上面の火山灰層のレベルにはほぼ一致している。葺石基底部から外側に約3.5mの平坦面があり、周堀部に続いている。墳丘南側～西側においては葺石の保存状態は不良で根石とその上段が残存する程度であったが、墳裾部の構造は東側と同様で、周堀部との間に巾3.5mの平坦面が圍繞していることが確認された。

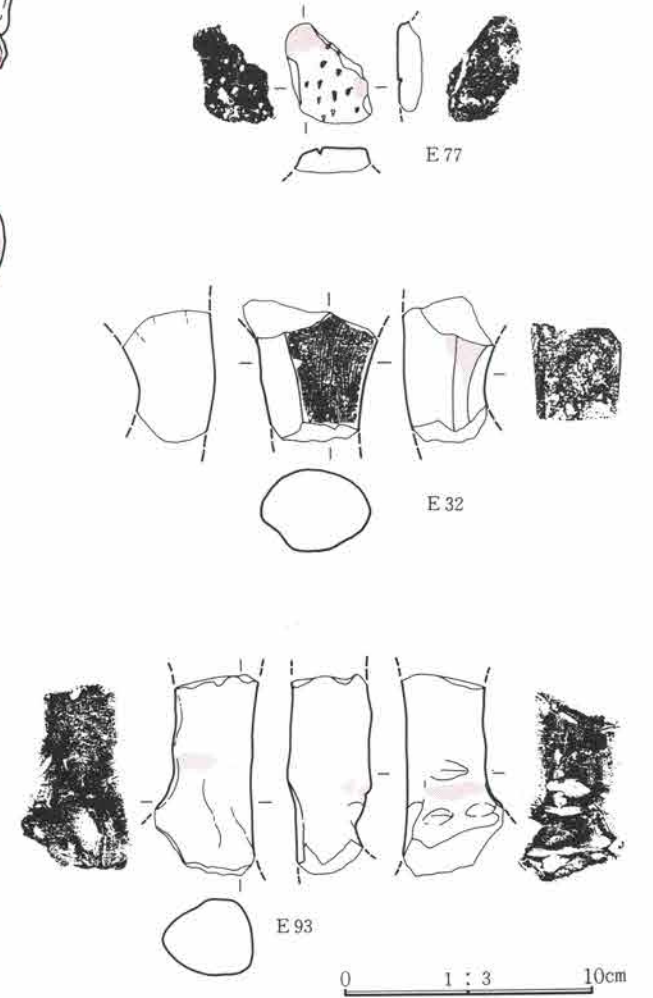
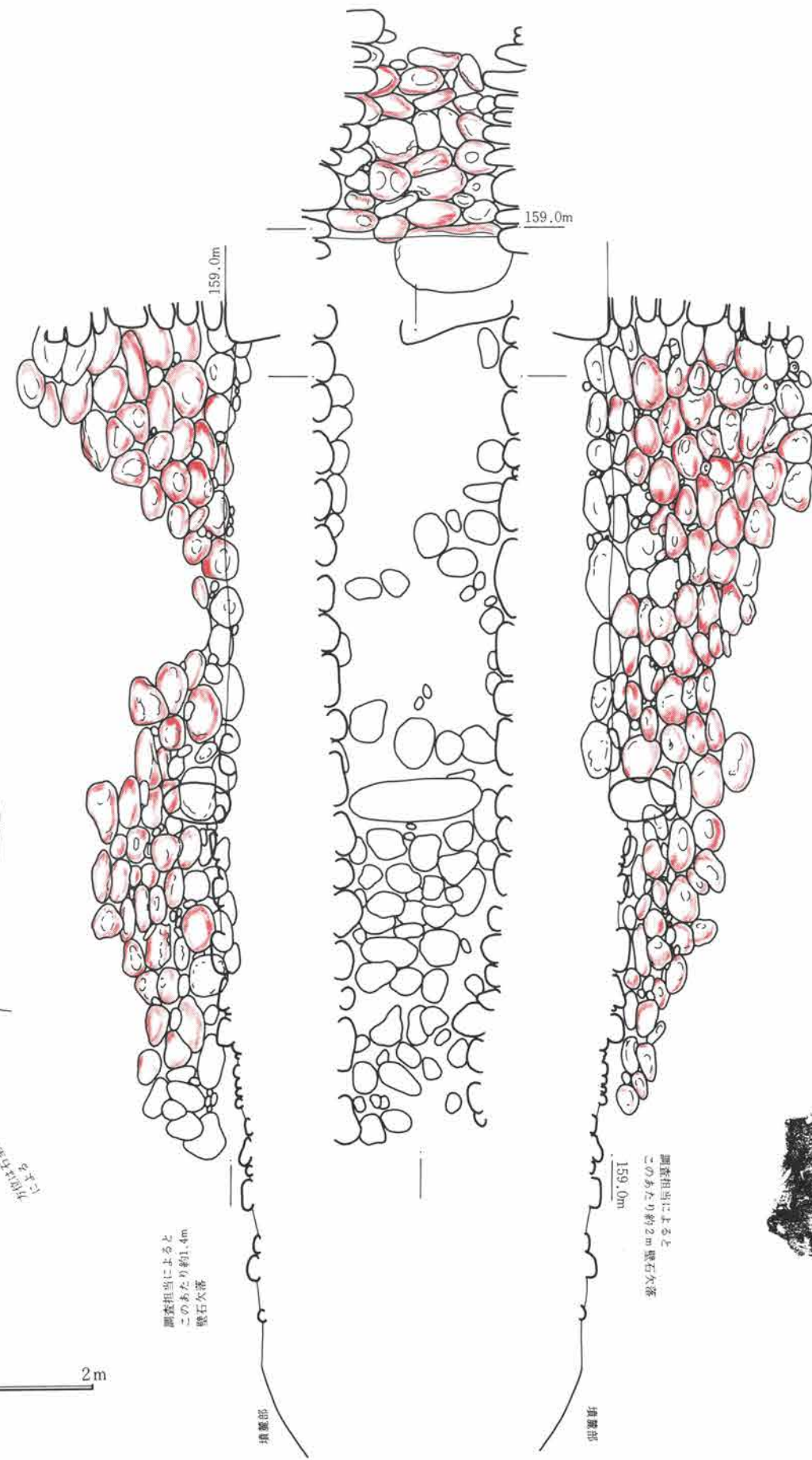
これにたいし、墳丘北側では墳丘積土の傾向は同じであるが、葺石の存在が認められず、裾まわりの平坦面もやや外側に傾斜する傾向を示していたが、その巾はほぼ3.5mであった。墳丘裾部の傾斜は50度前後、葺石は東側から南を圍繞し西側にかけて施設されていたが、北側にはまったく認められず、注意すべきである。



第28図 的場E号墳（稲荷塚）調査区と墳丘裾部検出位置図

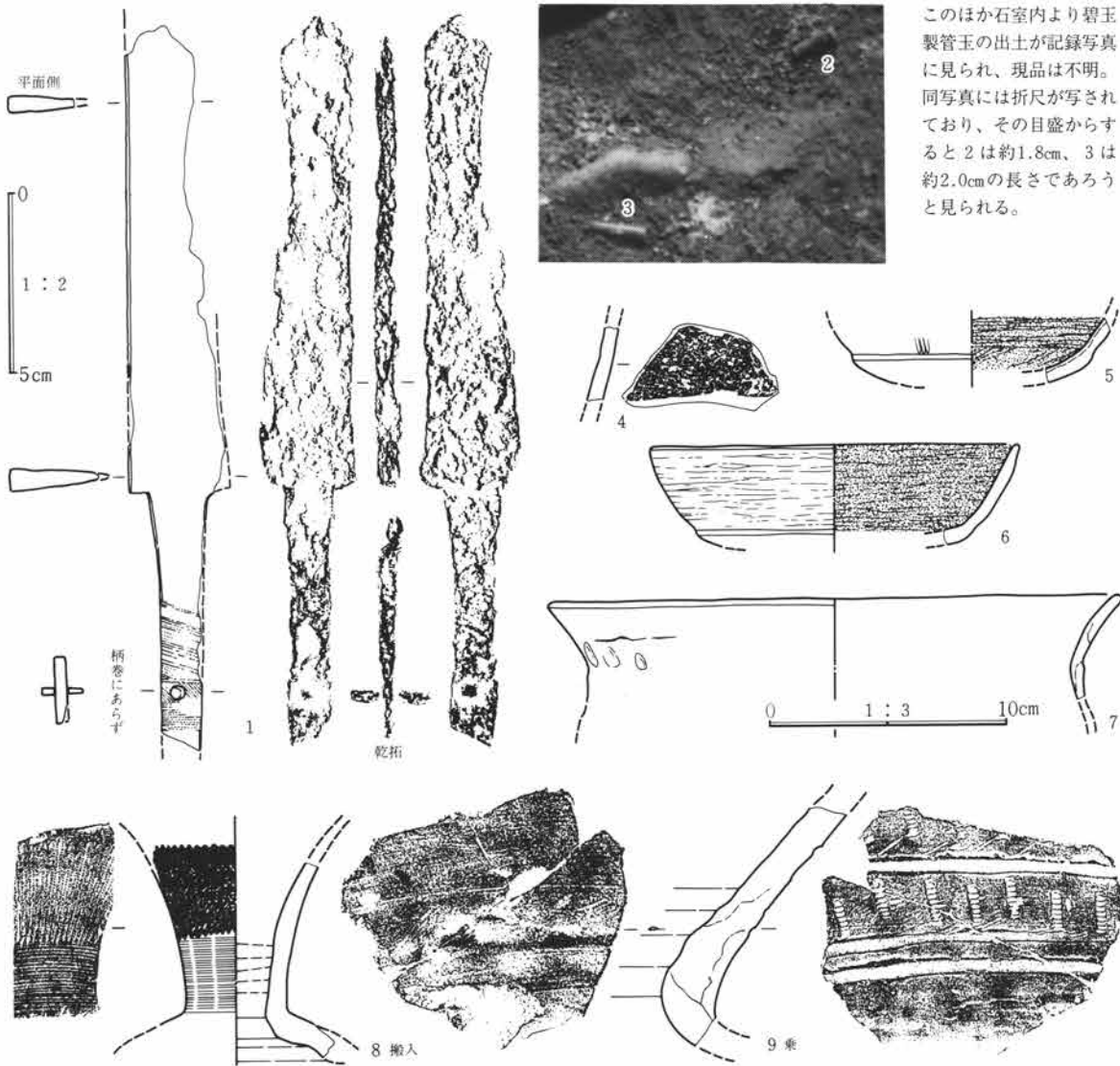


第29図 的場E号墳石室・石室上面遺構図



第30図 的場E号墳出土赤色顔料塗彩埴輪図

的場E号墳



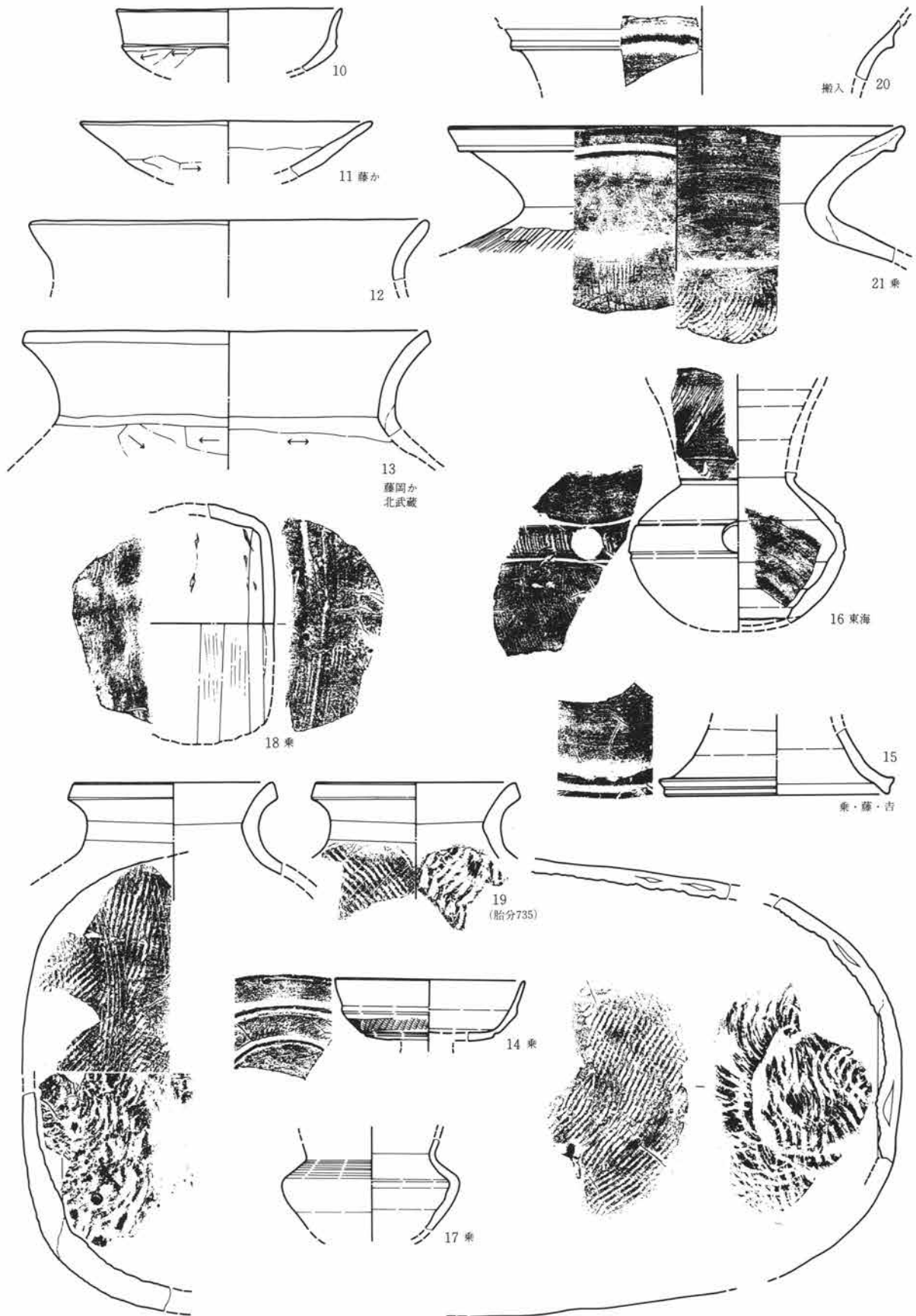
第31図 的場E号墳石室内出土遺物図

墳頂部は中心点より西側に西方を向いて横穴式石室が露出しており、墳丘現形をほとんどとどめていないが、西北から北側にかけて、一重に敷きつめた川原石が残存した。墳丘ほぼ全面を一重に敷きつめていたことを推定できる。葺石の構設状態は裾部囲りでは根石に比較的大形石を置き、その上に積み上げる方法を取り、墳頂部では敷き並べる方法を取っていた。石材の大きさは30~10cm内外の扁平楕円形の川原石である。

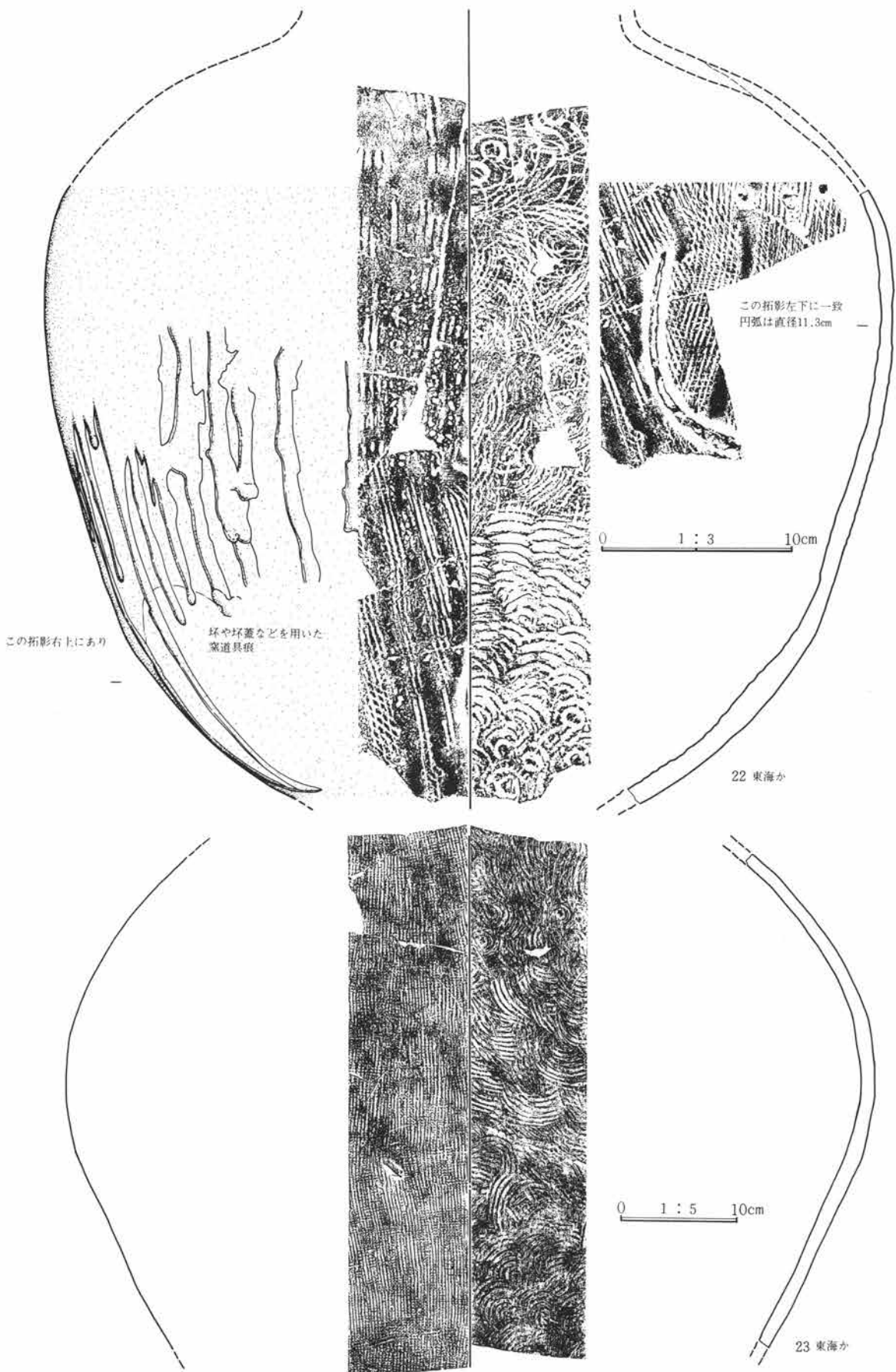
墳頂部からの墳裾平坦部上面のレベルは東側で3.86m、南側で4.28m、西側で3.50m、北側で3.96m、西北側で3.63mであり、西側部分が高い位置にある。

墳丘西側部分はほぼ同一のレベルで墳裾部より12.5mまで平坦面が続き、深さ0.8mの掘込みで終わっている。この部分が他よりも高位置であり、墳裾部より3.5m離れ埴輪類が施設されている他、前端部分にも埴輪円筒が存在していたことからみて、また主体部横穴式石室の前面に位置していることからみて、埴輪類の樹立面が墳丘前面のつくり出し施設であることが推定できた。すなわち、前端部および、中央部より北側に延ばした発掘区の所見では、このつくり出し施設のプランは前端巾12mくびれ部で9mの台形を示し、墳丘部を圍繞する周堀はつくり出し部の両側で終わっていることが確認できた。つくり出し部前面を圍繞する深い

第4篇 検出された遺構と遺物

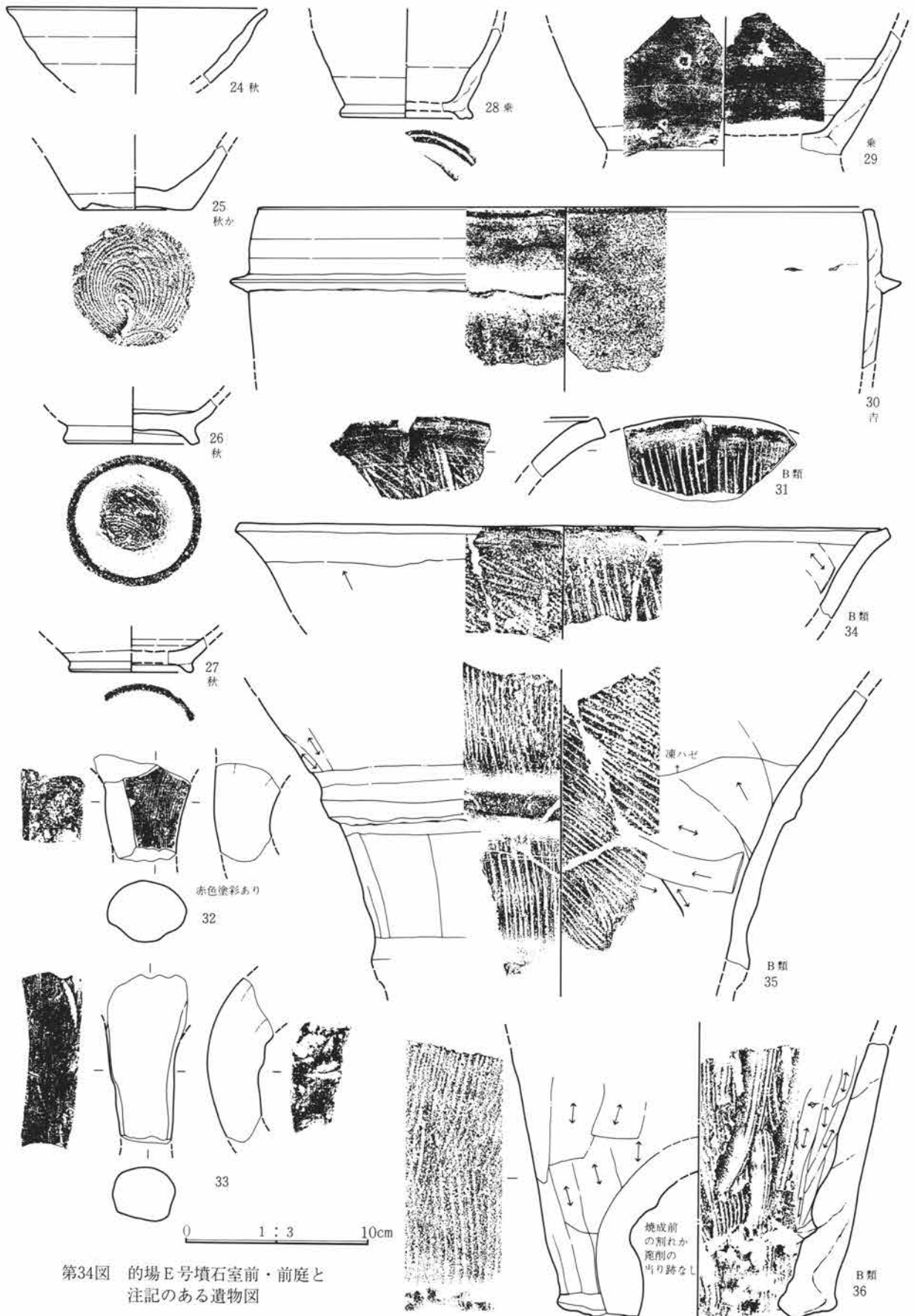


第32図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図

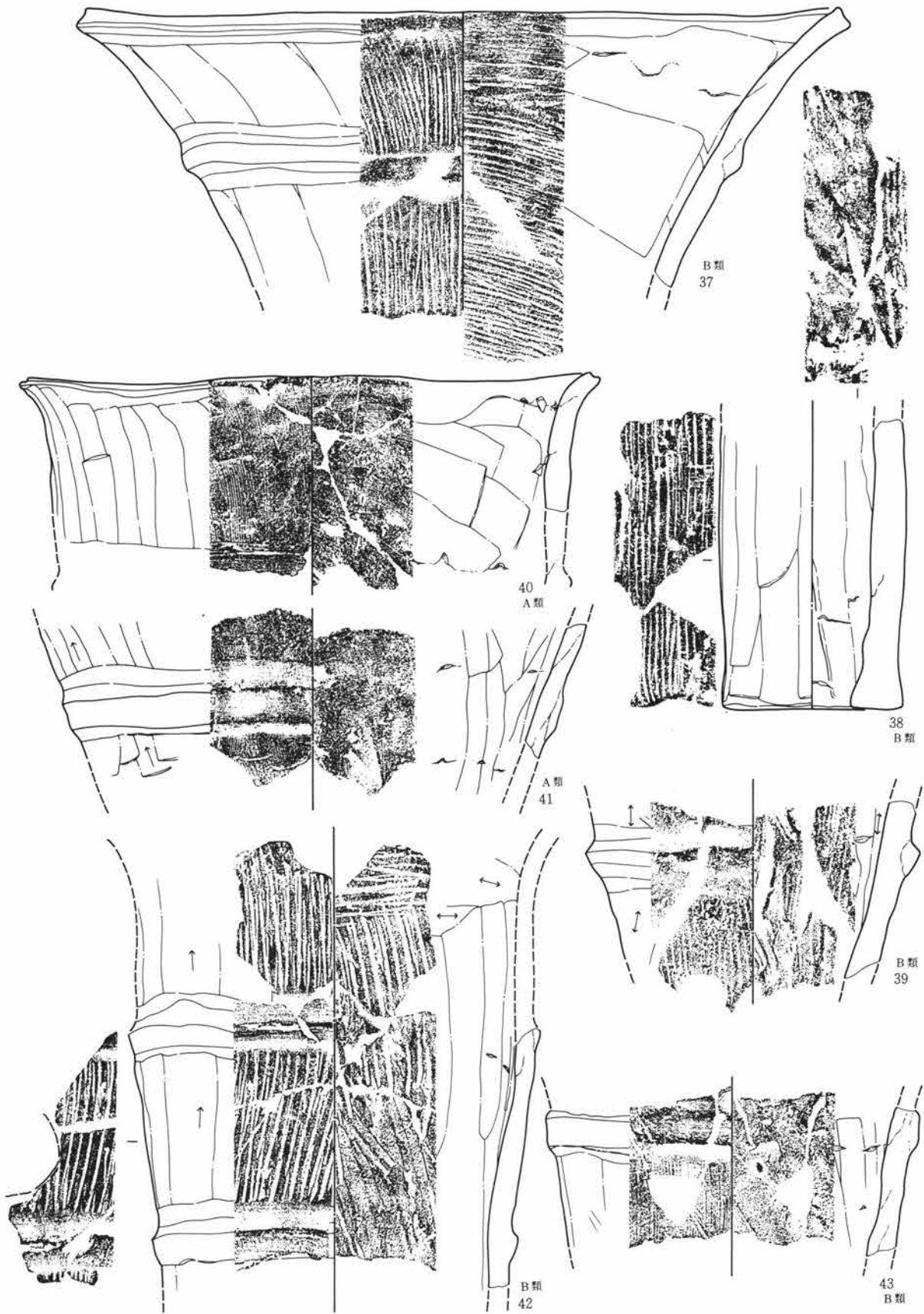


第33図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図

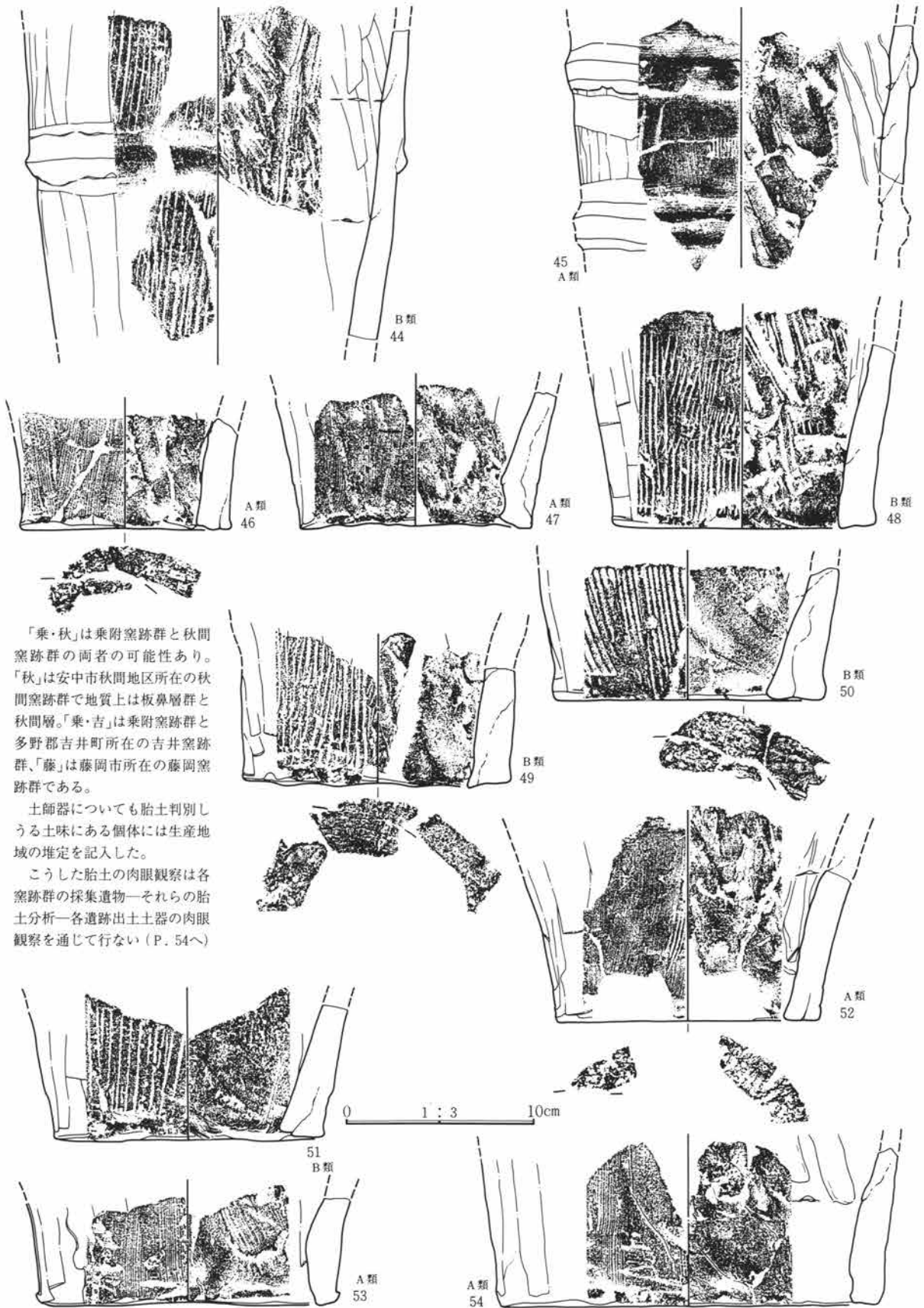
第4篇 検出された遺構と遺物



第34図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図



第35図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図

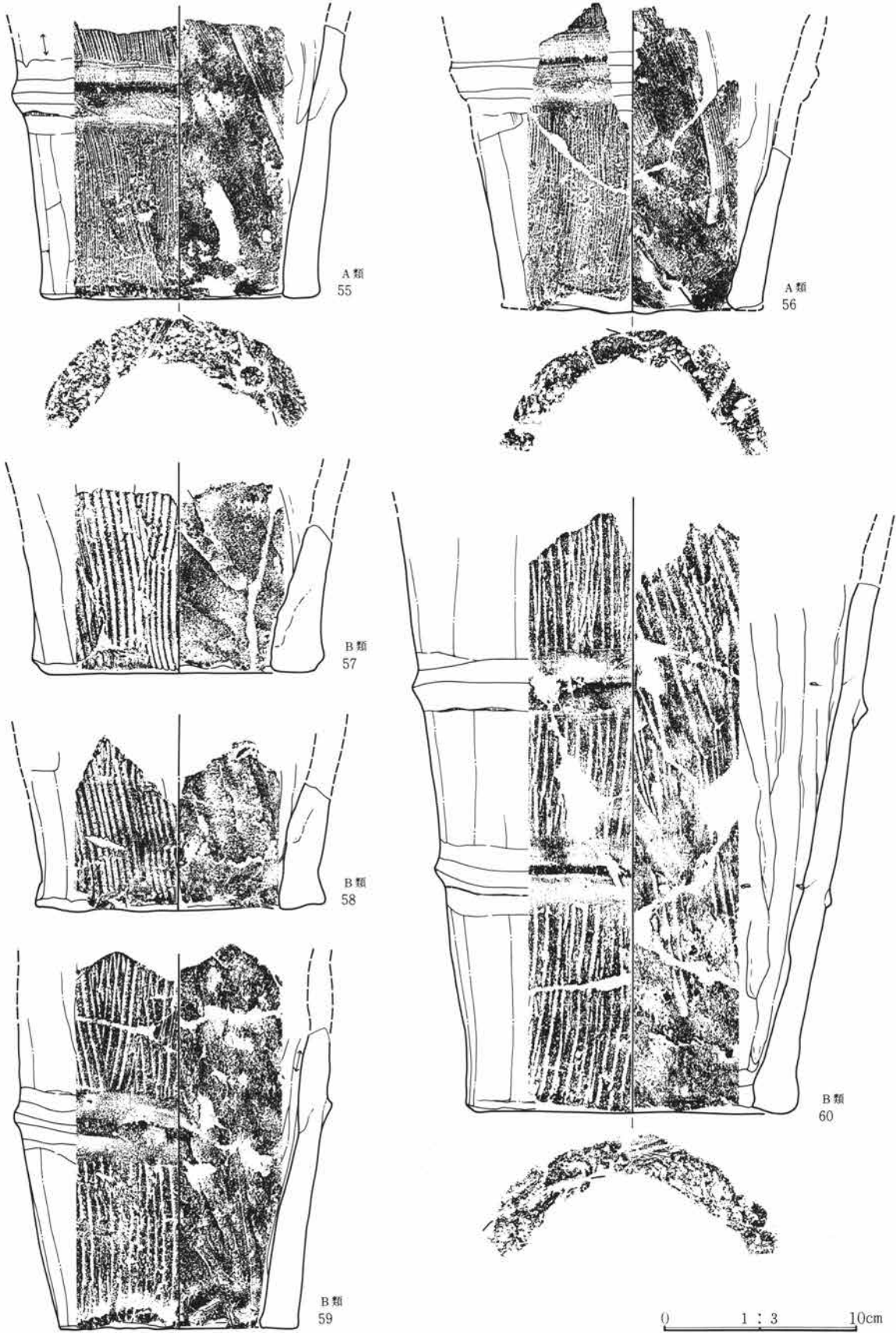


「乗・秋」は乗附窯跡群と秋間窯跡群の両者の可能性あり。「秋」は安中市秋間地区所在の秋間窯跡群で地質上は板鼻層群と秋間層。「乗・吉」は乗附窯跡群と多野郡吉井町所在の吉井窯跡群、「藤」は藤岡市所在の藤岡窯跡群である。

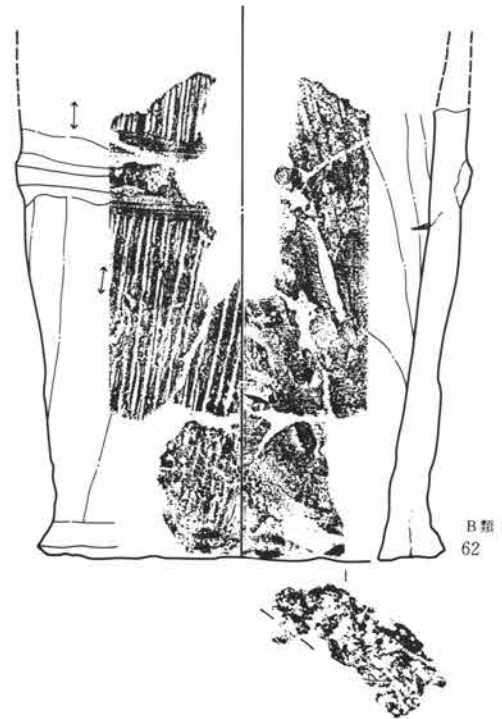
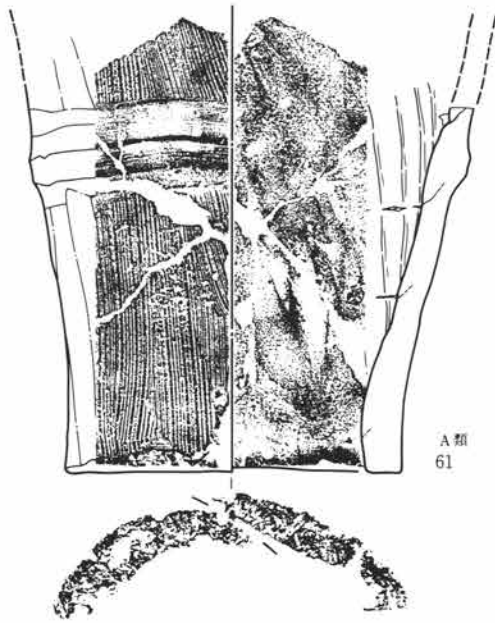
土師器についても胎土判別しうる土味にある個体には生産地域の推定を記入した。

こうした胎土の肉眼観察は各窯跡群の採集遺物—それらの胎土分析—各遺跡出土土器の肉眼観察を通じて行ない(P. 54へ)

第36図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図



第37図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図

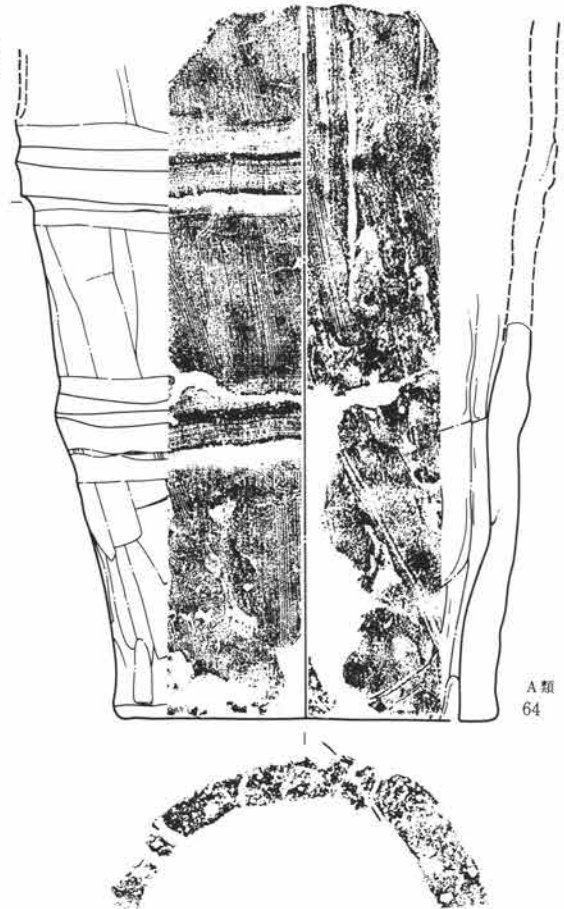
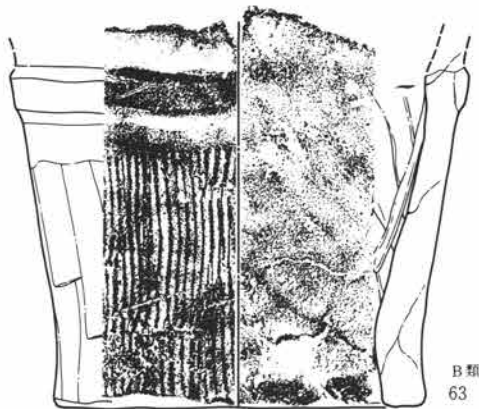


現状に至るまで10年強続けて来ている。胎土の具体的な特徴は大江「瓦類」「国分境遺跡」(財群馬県埋蔵文化財調査事業団)1990に詳しい。胎土分析は既報告21冊分に報告あり。

埴輪類の胎土については基本的にはすべての胎土とも共通する。特徴は Fe_2O_3 と SiO_2 の粘土物質と見られる褐色物質は円粒のものと不整形のものがあり、ともに硬く、白色の鉱物微粒が多く含まれ、時おり片岩粒が入る。この特色の土味は藤岡窯跡群と共通するものである。

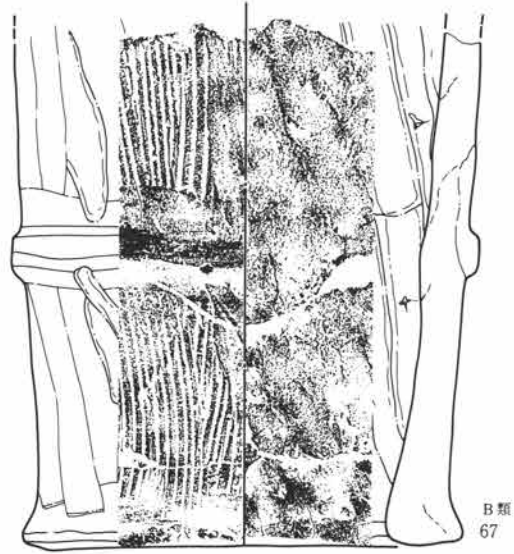
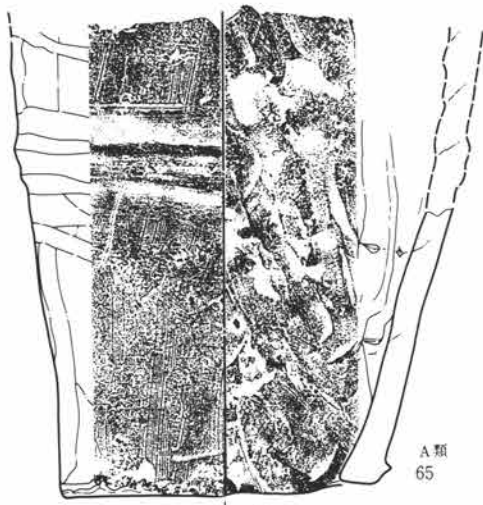
藤岡窯跡群の南域には、明治39年柴田常恵発見、昭和18・19年に尾崎喜佐雄らによって10数基の埴輪窯跡が確認された本郷埴輪窯跡があり、その後、周辺で埴輪窯が追認されている。本郷の地には「上野国神名帳」正五位下土師明神に推定されている土師神社があり、この一帯が土師器製作者集団の上毛野～上野における生産地域であることを近年、木津博明が「まどめ」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団)1990の中で触れており注目される。

埴輪類の技法のうち、円筒・朝顔形には明瞭な形でA・Bの2種がある。A種は細かな刷毛目を施し、焼成上の(P. 55へ)

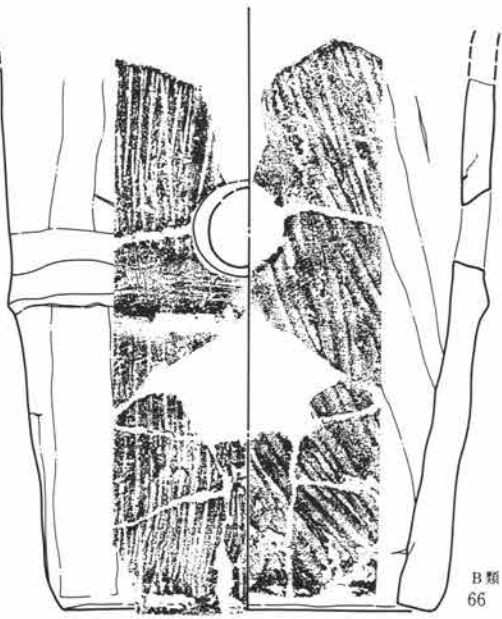


第38図 的場E号埴石室前・前庭と注記のある遺物図

0 1 : 3 10cm

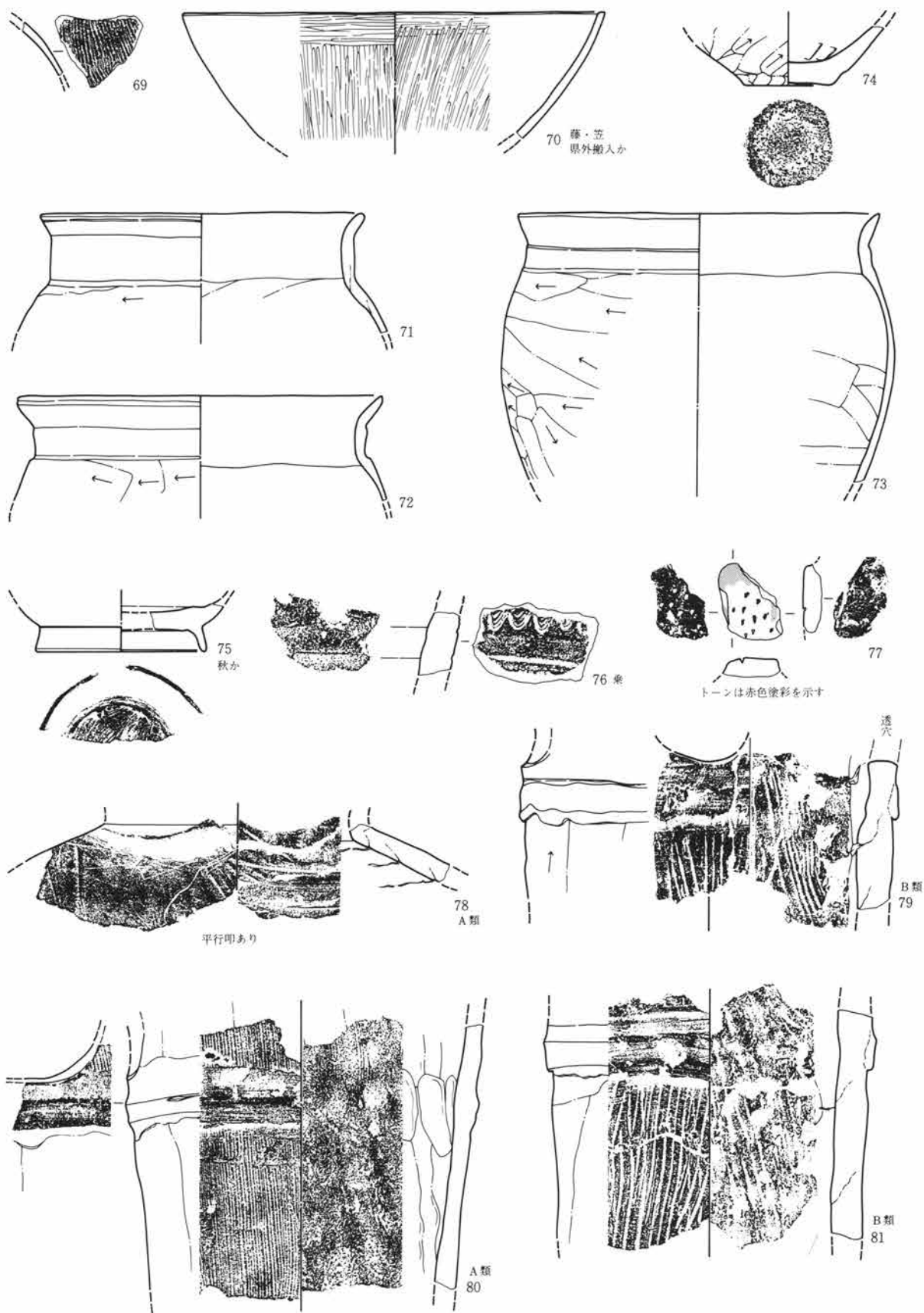


色調は明るい橙色を示す。底部最下段を粘土帯とする例に46・52・55・56・61・64・65・68・84・85・89・97(75%)がある。B類は、荒い刷毛目を用い、焼成はやや暗い褐色～橙色を呈し、粘土帯の例は49・50・60・62(25%)があり、形象はA類の焼成に近いが、38と78の壺形の焼成は、B類である。粘土帯は下から見てすべてZ巻である。それらの透しは円形を考へる例がすべてで半円形は認められなかった。突帯は40・60・64・68を用いて想定すると突帯3条、器高48～52cmを合成復元しうる。

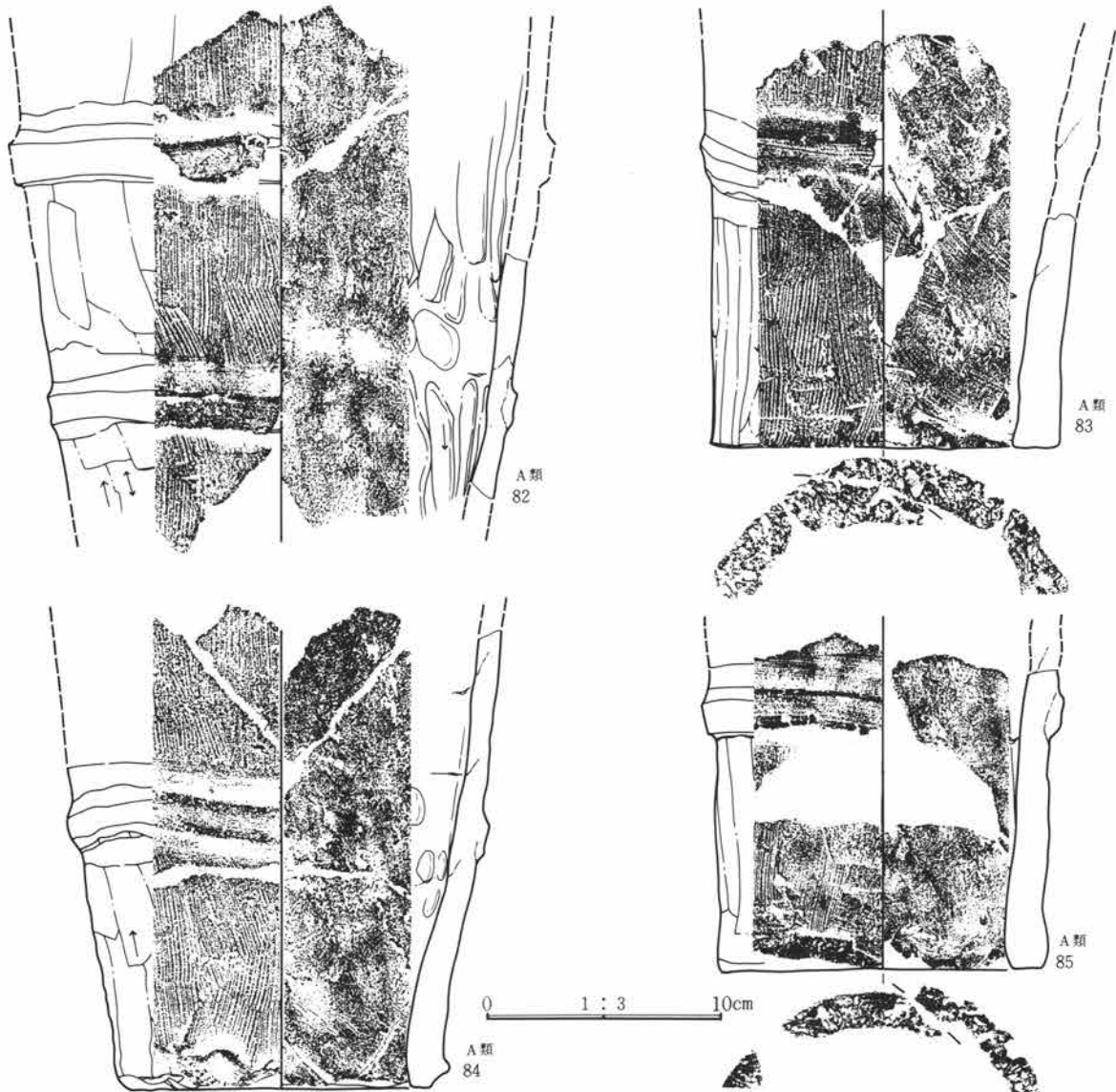


第39図 的場E号墳石室前・前庭と注記のある遺物図

第4篇 検出された遺構と遺物



第40図 的場E号墳第IVトレンチ（南トレンチ）と注記のある遺物図



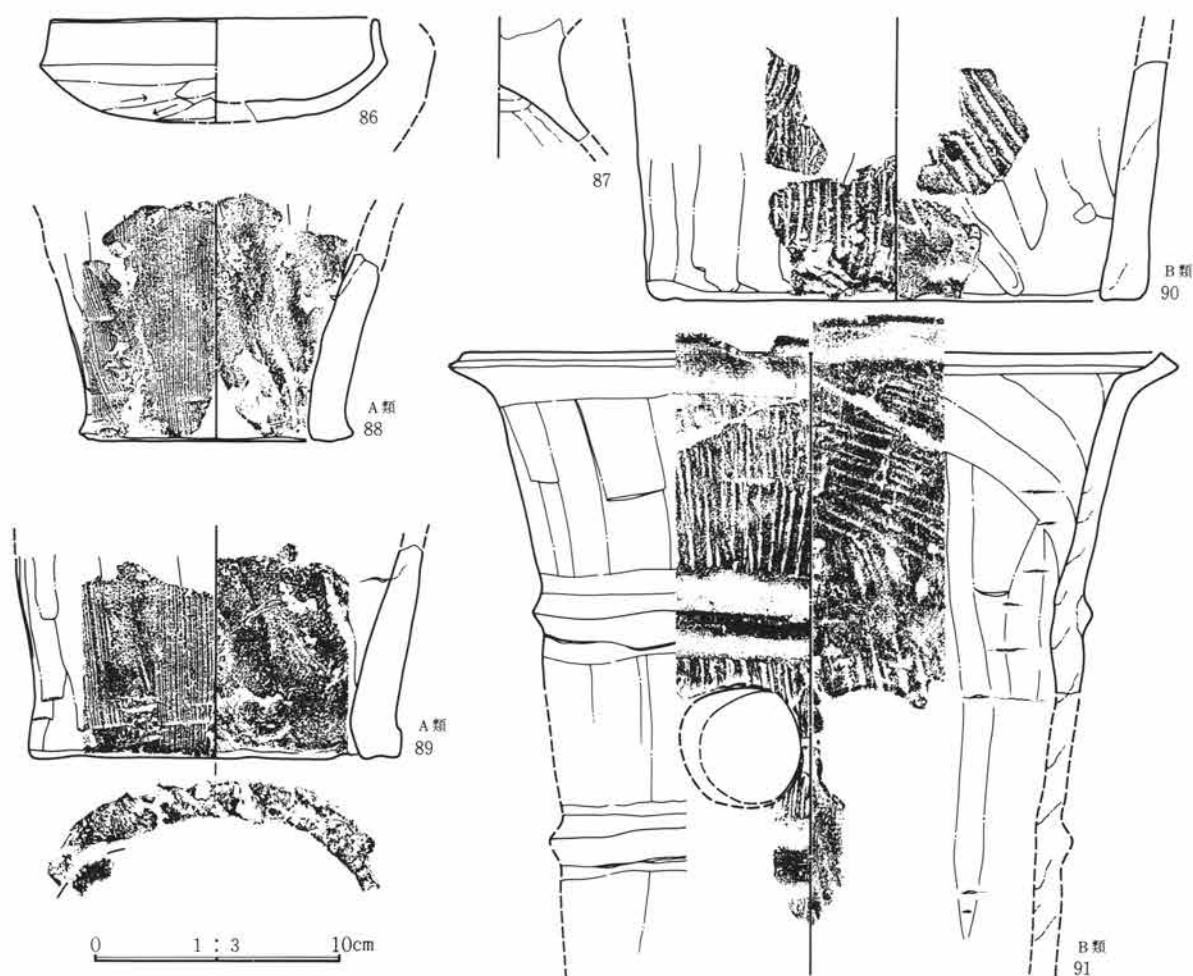
第41図 的場E号墳第Ⅳトレンチ（南トレンチ）と注記のある遺物図

掘割りの周堀は存在しないことになる。

本墳の墳丘は帆立貝形式の墳丘であり、つくり出し部はほとんど自然地形面を整形する方法で、墳丘部を囲繞する平坦面から0.4m～0.8mの比高で施設されたことになる。

墳丘部分の計測値は次のとおりである。

全長	34.5m
墳丘部径	22m～23m
墳丘裾部平坦面巾	3.5m
つくり出し全長	12.5m
つくり出し前端巾	12m
つくり出しくびれ部巾	9m
墳丘高さ（裾部基準）	4.23m（南）3.86m（東）3.96m（北）



第42図 的場E号墳南トレンチと注記のある遺物図

(2) 周 堀

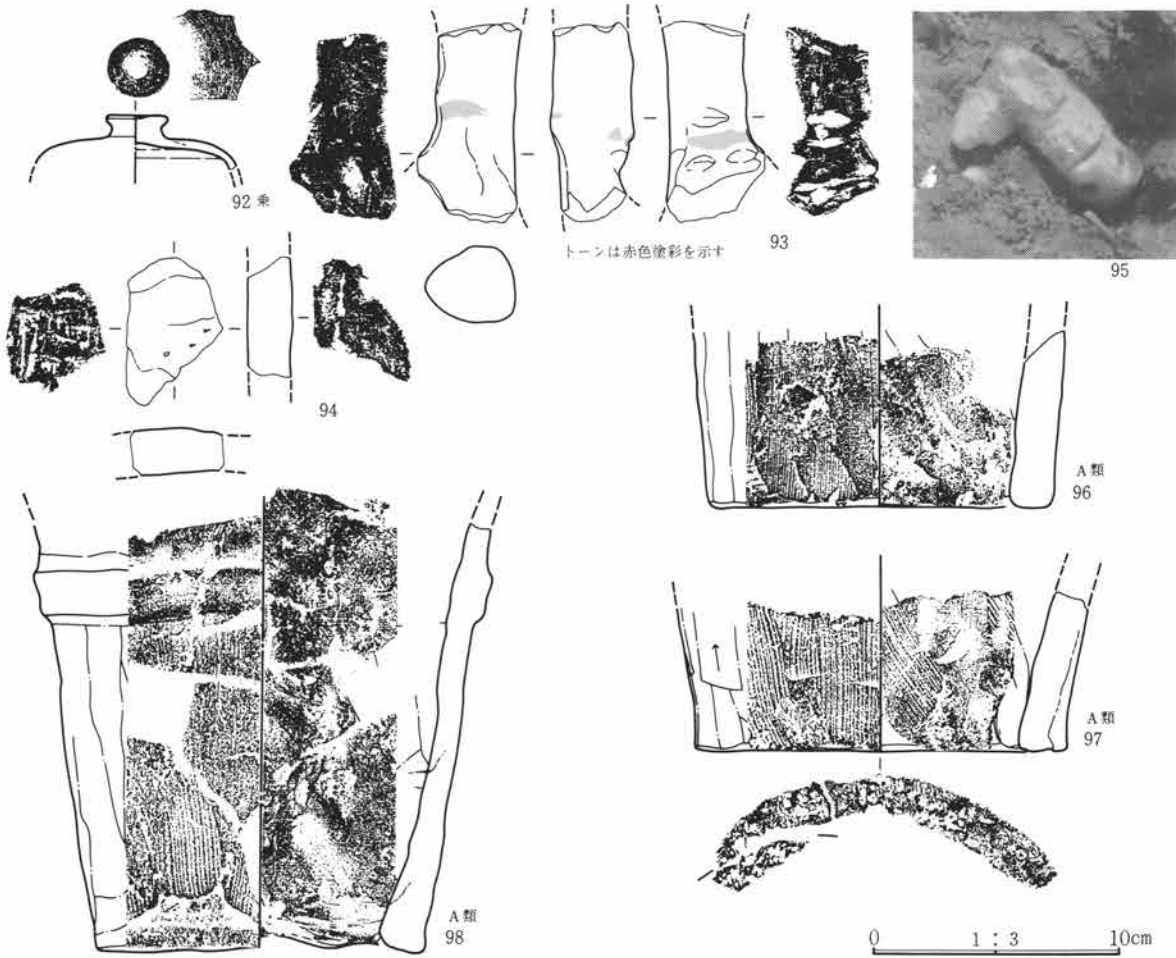
発掘時の地形は周堀の存在をまったくとどめないまでに平坦面化していたが、墳丘東側及び南側に設定したトレンチで附設されていることが確認された。

周堀は墳丘裾部を圍繞する3.5mの平坦面の外側より掘り込まれており、断面は舟底形である。墳丘東側部では上縁部巾6.2m、底部巾は4.2m、墳丘裾部からの深さは2.36m、頂部からは6.22mであり、墳丘南側部では上縁部巾5.6m、底部巾3.5m、墳丘裾部からの深さは2.18m、墳頂部からは6.46mであった。ほぼ同規模であり、墳丘北側から東側、南側にかけて施設されていることになるが、周堀は素掘りであり、湛水の痕跡はなく空堀である。

つくり出し部分はくびれ部両側に素掘りの状態で終っており、周堀掘方の上縁がつくり出し部の縁辺に相当し、やや内側にカーブをえがく平面プランとなっているが、両隅及び前面部には続かず、つくり出し部には墳丘部を圍繞する周堀は連続しないことになる。つくり出し部は縁辺を0.5~0.1m内外掘り下げて構設していることになり、縁辺部には葺石状の川原石が部分的に残存した。

つくり出し部を圍繞する掘割りが周堀の一部としても、その巾は外縁部の立上りが明確でなく、不明であり、周堀部は墳丘部を意識的に圍繞しているにとどまったものである。

周堀部を含めた本墳の規模は主軸長48m、墳丘部径37mである。



第43図 的場E号墳と注記のある遺物図

2. 主体部横穴式石室

本墳の主体部は横穴式石室である。発掘時すでに奥壁部寄りが側壁部を含めて露出し、天井石は除去されていた。側壁左壁部も玄室部が崩壊し、腐蝕土で石室内は埋没していた。現墳頂部に露出した状態であり、墳丘自体もかなり削平されていることになるが、墳丘部の形状から見て石室自体は比較的墳頂部に近い位置に墳丘中心部に近く奥壁を位置し、西面して構築されていたものである。

石室構築の用材はすべて川原石であり、上部に向ってころびをつけた壁面を構成している。石室プランは袖無形であり、玄室部門と羨道道巾とに極端な差がなく、床面はほぼ矩形である。

側壁は比較的大形の石材を奥壁部根石としているが、これのみが立てて置かれたものであり、他はすべて横積の乱石小口積の石積方法であり、壁面には丹塗した痕跡が残っていた。

側壁の石材の大きさは奥壁根石が55cm×25cm、他は30cm×15cm前後のものを多用しており、2cm×10cm前後が小形石材の大きさである。これらの石材は根石部に比較的大形石材を配し、上部に向うにしたがって小形石材を多用する傾向を示している。

床面は積土真上に扁平円礫を一重に敷きつめ、羨道部のみ円礫をその上部に充填していたが、この敷石は側壁根石の礎石であり、床面として多量の礫を敷きつめる構造を示してはいない。玄室部と羨道部境は長さ80cm、高さ45cm、厚さ22cmの長大な川原石を間仕切としている。羨道部前面には前庭部に相当する施設はなく、羨道入口が墳丘傾斜面に接する位置に一致しているのが注意された。

第4篇 検出された遺構と遺物

本石室各部分の計画値は次のとおりである。

全長	5.50m	主軸方向	298度
玄室長	3.02m	右壁部	3.18m、左壁部3.00m
羨道長	2.40m	間仕切石の厚さ	28cmを含む
奥壁巾	1.15m		
玄室中央巾	1.10m		
玄室入口巾	1.00m		
羨道入口巾	0.80m		
奥壁高（現高）	1.50m		
側壁内傾角度	10度～20度		

以上のごとき規模、構造をもつ横穴石室は墳丘の主軸方向にはほぼ一致し、石室前面につくり出しを施設していることになる。つくり出し面と石室床面とのレベル差は1.3mであり石室が墳丘上部に構築されたものである。

石室裏込めは川原石を用い、その外郭は方形に石積している。規模は底部で巾4.8m、長さ7.8mであり、石積みの傾斜は約70度、高さ1.6m内外、厚さは奥壁部で1.9m、側壁部で左側2.0m、右側1.9mである。側壁と裏込め外側積石の間は小円礫と粘土質土を充填していたが、両者の根石のレベル差は若干外側積石に位置しており、また裏込め石積を覆う積土は水平の板築状の堆積状態を示していた。

3. 遺物

遺物は石室内と墳丘表面およびつくり出し部くびれ部から発見された。石室内遺物は盗掘で残された鉄片（刀子、鉄鏃破片）と須恵器破片、および管玉であり、墳丘部出土の遺物は埴輪類と須恵器類破片であった。

(1) 石室内遺物

- ① 鉄片、刀子破片1点と鉄鏃破片若干である。玄室床面清掃中に発見された。
- ② 須恵器破片であり、焼成は良好、胎土も薄い。器形を認定できるものはないが、古様相がうかがえる。出土状態は攪乱された状態であった。
- ③ 管玉、2ヶ発見された。奥壁寄りであるが床面攪乱土中である。質は碧玉、穿孔は一方向からである。

(2) 墳丘部出土遺物

- ① 埴輪類、墳丘部周辺から発見されているが、樹立の状態が原位置を示していたのは石室前面くびれ部の埴輪類で墳丘裾部をめぐる平坦部の縁辺部に相当する位置に12ヶ所存在した。またつくり出し前端部主軸線上のものも原位置であった。他は位置が明確でないが、出土の状態から見て、墳丘頂部にも樹立されていたと推定される。くびれ部発見の埴輪類には人物の腕部、飾り鳥等があり、人物像が存在したことは明確である。後方からも人物像の一部が発見されている。

これら埴輪類の作は円筒基部から見て小形であり、焼成にも堅緻で白色味の強いものと赤褐色でやや軟質のものもある。くびれ部出土のものは後者のものであった。石室前面には人物像を何体が樹立したと推定される。

- ② 須恵器、主体部石室から発見のものと形式的には同質と考えられるものである。甕形の他に提瓶、罍の破片がある。罍の破片の形式はⅡ型式に相当し、県内では古式の様相を呈している。出土位置はいずれも攪乱層からであり、不明である。（梅沢）

4. 整理段階の所見

概報中の重要内容を記述の順で補記したい。

墳丘の規模と構造の項では、上毛古墳綜覧、墳丘標高、石室主軸方向。墳丘の項では、葺石基底は黒色土層上面に一致、幅3.5mの平坦面の圍繞・葺石・墳頂部から測った平坦面高・埴輪の樹立・造出部。周堀の項では湛水痕のない空堀、つくり出し前面の周堀について。石室の項では、墳丘中心と奥壁位置、ころび・石積み方法の横積の乱石小口積、丹塗の痕跡、間仕切石石室前面について。遺物類についてなどである。

上毛古墳綜覧は昭和13年に実施された古墳一斉調査の報告で「上毛古墳綜覧」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告 第五輯』(群馬縣)1935のことである。同報告の中でE号墳は久留馬村第18号に相当し、A・B・C号墳は記載漏となっている。ただし、D号墳は位置的には、久留馬村第16号に近いが、地番照合の結果南約15mの位置がD号墳であるので、D号墳も記載漏である。久留馬村第18号の内容は墳型一圓型、現状一雑木林、発掘の有無一有、大字一本郷、小字一未記入(今回地番照合の結果は七曲)、地番一二、四二〇、地目一山林、面積一二畝十八歩、大サ一五九尺、高サ一十一尺、所有者一関口禄三郎、内部朱塗とあり、昭和10年前後のおよその状況が知られ、内部朱塗と記録されている点は貴重である。

墳丘標高については近接のB号墳に三角点が設けられ標高157.2の数字が地理院1:25,000「下室田」に見え、それから引照したE号墳の墳丘図の墳頂等高線は161.0m第29図中の最高所が161.14mであるので概報中の墳頂高141.2mと占地する地の標高136m前後については約20mの差があり、今回の報告をもって訂正したい。

石室主軸方向は概報には磁北よりN302°EつまりN58°Wである。記録図中には、石室上面実測図と墳丘実測図に磁北の記入がある。後者図にも石室の記入がなされていてそれを(第28図)用いるとN58°、前例(第29図)を用いるとN64°30'Wであり、両者には6°30'のひらきがある。しかし位置関係図(第5図)の合成図上からはN57°30'が得られるので、全体的には概報でいう数値に多数決的な歩の利がある。しかし3者は平板実測上の磁北であるので基本的な方法上、信頼度が割引かれて扱われる点は止むを得なしとしなければならない。なお磁北は地理院1:25,000「下室田」(昭和57年)によれば座標北よりおよそ西偏6°50'してあるという。

葺石基底は黒色土層上面に一致してあることに関しては前方部である造出部の高さに大きく係わってくる。第28図中の墳丘北・北西トレンチを除き、圍繞に近い状態が見えるのが記録された葺石基底位置であるので、築成土端部はそれである程度明らかである。造出しの残存面を概報は、「つくり出し部はほとんど自然地形を整形する方法で、墳丘部を圍繞する平坦面から0.4m~0.8mの北高で施設されたことになる。」とあり、造成土に築成土が本来的になかった場合には、各トレンチの黒色土(旧表土)~ローム層上面まで30~40cmであるので、造出部の造出しはローム層を0~50cm掘り込んでいたとみられ、その延長上にある3.5m幅で墳丘を圍繞した平坦部も概報中には記載はないが、平坦面の周堀側端部はローム層に達していたと考えられる。造出部に封土があった場合は、中央トレンチ内の前方部上端より約0.6m後円部側に入った平坦面延長上の位置に埴輪の樹立が確認されているので少なくとも60m以上の平坦部が前方部に考えられ、その点は石室前の埴輪列も後円部平坦部端から約80cmで近似値にあり、しかも両埴輪の樹立高がほぼ同じの黒色土上面の内外にあるので、封土があったとしても、そう高くはなかったと察せられる。

葺石については記録図および概報中に中段が存在した場合は触れられていない。もし中段が存在したとすると石室入口石積位置と、その前面に広がる葺石の、検出された最頂部との間は、写真図版9で見る限り1m以上のひらきがあり、石室前に墓道のような施設を、または狭少な平坦面あるいは墳丘を圍繞した

幅の狭い中段を考慮したいのであるが、その場合、調査で検出された石室入口位置が、旧態であったかが問題となる。第29図、写真図版10左上を見ると、右室左・右両壁のうち、右壁側入口が、左壁入口端より30cm程短かく、さらに写真で見ると、入口を示唆する大振りの用材が組込まれて見えないので右壁入口部は根石ごと欠失しているものと見られる。それに対して左壁側は写真図版10左上を見ると入口端部根石より3石目に大振の壁石が見え、それを石室裏へ辿ると裏込外面の石組へと組まれた状態が続くので、左壁入口の根石側は本来の状態に近いと見えた。また石室前の葺石最上面（写真図版9・10のとおり石室前の標高159m前後の位置は、西～南～東に至る間の墳丘下半部葺石の最上部より上方にある。）と石室入口の約1m前後の間は、なんらかの施設を考える必要があろうことを調査担当に尋ねたところ、施設を考える状態ではなく墳丘と石室入口は接していたと想定されるとのことで中段についても否定的であった。

周堀について湛水痕のない点は、ローム層中に周堀を設けたとして、湛水していれば必ず底に水性によるローム層の漂白化、粘土化が起きるはずであり、他のA・C・D号墳の土層注記にもその粘土化表現はなかったことを考え合せれば本古墳群の主体地域の周堀における引入はなかったと考られる。現在、本郷の集落のある低地中の水田は、開さく時期不明である上野堰^{こうづげき}から給水を受けて成立（古墳時代において水田が営まれたとすれば、自然湧水を引田したものであろう）している。その低地と本古墳群のある台地上とは、およそ15～20mの落差がある。

周堀での関心事はくびれ部に始まり後円部墳丘を圍繞して終わる周堀と、造出部の前面および両側面に面する周堀とが全体観の上からはどうなっているだろうかという点である。概報には造出部の外縁立上が明確でなく、不明であり、後円部を意識的に圍繞しているにとどまったとしている。その場合は、前方部に相当する造出部は旧黒色土面を、0.5～1.0mの深さで削出して残し、その対岸側に相当する周堀外縁は設けなかったことになるので、立上り状況はゆるやかであったと読み得る。しかし、造出部に係わる各トレンチは後円部2カ所に設定されたトレンチ内検出の周堀幅5.6～6.2mに達していないので立上り位置の確認に至らなかったのではないかと疑問が生じ、そのように解釈して周堀幅5.6～6.2mを加えて主軸全長を求めると概報どおり、ぴったり48mとなるので、立上りがゆるやかであったとしても、周堀全体形状は盾形～帆立貝形を考える必要があろうと考えられる。なお、昭和20年以前の地境と地番を付した耕地図（第28図右上）には、本墳に影響されて生じた地境が、主軸側で約60m、後円部側で40m以上にわたって存在している。その状態は広域であり、周堀域がもっと広域であった可能性も考えざるを得ない。また前方部北側の等高線の張出しは耕地図内地境に同様の方向性を見いだせる。

石室は横積に小口を向けた自然石積で、主体は川原石が用いられている。後円部墳丘中心部と石室の関係を見ると、石室中軸自体は墳丘中軸上東葺石根石のあたりを0とし、南へ約2°傾むいて設けられている。墳丘全体図である第28図を用いて、葺石根石の円弧の中心を求めると墳丘中軸上で石室裏込石組上端位置が0となる。また墳丘裾部の平坦部端の円弧の中心は、墳丘中軸よりも石室中軸上で石室裏込石組上端位置が0となるため、奥壁位置は墳丘の中心にはない。

ころび、「転び」は尾崎喜左雄が『史学会報第五輯』（前出）以降、頻繁に使用され、持送りが壁石の水平方向の迫り出しを表現しようとする時用いられるのに対し、転びは壁石の内傾を捉えようとする時に用いられたと理解している。その用語の用法からすればE号墳の石室の石材は小口積であるので持送りに近い。E号墳の両壁は第29図の奥壁側断面では右壁が内傾85°前後、左壁が内傾75°前後と測りうる。

丹塗の痕跡について、昭和10年頃に開口された石室内に赤色顔料が施されていたことが既に知られていた。調査時点の彩色記録は石室実測図に彩色箇所および濃薄を赤鉛筆を用いて丁寧に描かれていて、第29図中の

石室各立面図はそれを使用して作成した。それによると各壁石に施された彩色の濃薄は、表面が薄く、隅部が濃い傾向があった。残存状況は調査担当によると全体的に薄かったという。その理由は石室開口時期が古いことに伴う風化らしく、明治11年頃開口した前橋市前二子古墳では、もう彩色がほとんど見えないし、昭和27年、群馬大学によって発掘調査された勢多郡赤城村多田山古墳での石室内は極めて鮮烈な赤褐色の彩色が昭和41年頃までは残っていた。県内の石室内における赤色彩色は初期横穴式石室に多く見られる傾向がある。

石室内の間仕切石について、長大な川原石を用いて側部面が天・地方向、両小口面が側壁方向を向いて存在していた。こうした側部面を天・地方向に用いる用法は地域において、初期横穴式石室に多く見られる手法である。その間仕切石を境にして、石室入口側には石敷である礎石面が、奥側は約15cm下がった面となり、間仕切部が框石となっている。

遺物の出土について調査が短期であったためか記録図中・遺物注記中に遺物番号の記入された例はなかった。したがって図版区分は、遺物に注記された調査区名称で仕分けを行ない編集せざるを得なかった。遺物注記にあった調査区名称は、E号墳-石室内・石室前・石室前庭・石室前埴輪列・IVトレ・南トレ・E号墳であった。このうち石室前と石室前庭という呼称については、石室前が石室入口直前という意味であるのか、石室前庭が前庭が検出されていないのに前庭というのか、あるいは前庭が検出される可能性があると思われるながらも結果的に検出されずにその間、遺物の取上げを行なったかなど不明確な点が多かった。そのため、石室前・石室前庭は一緒に扱った。その中で両者の呼称の遺物片が接合できた場合も多かったため事実上は石室前から鞍部にかけての拡張区であったようである。そのことは概報中にある鞍部の埴輪例12個体のうち埴輪列と注記があったのは第39図65・67の2個体のみで他は見られず、石室前か石室前庭とした一群に含まれている可能性が極めて強かった。理由とすれば、埴輪円筒における残存の占める量が極めて多く、出土したとすれば石室前から鞍部における出土を除くと考え難いからである。IVトレ・前トレについては記録がないが後日調査担当に尋ねたところ両名称とも同意で第28図の位置という。

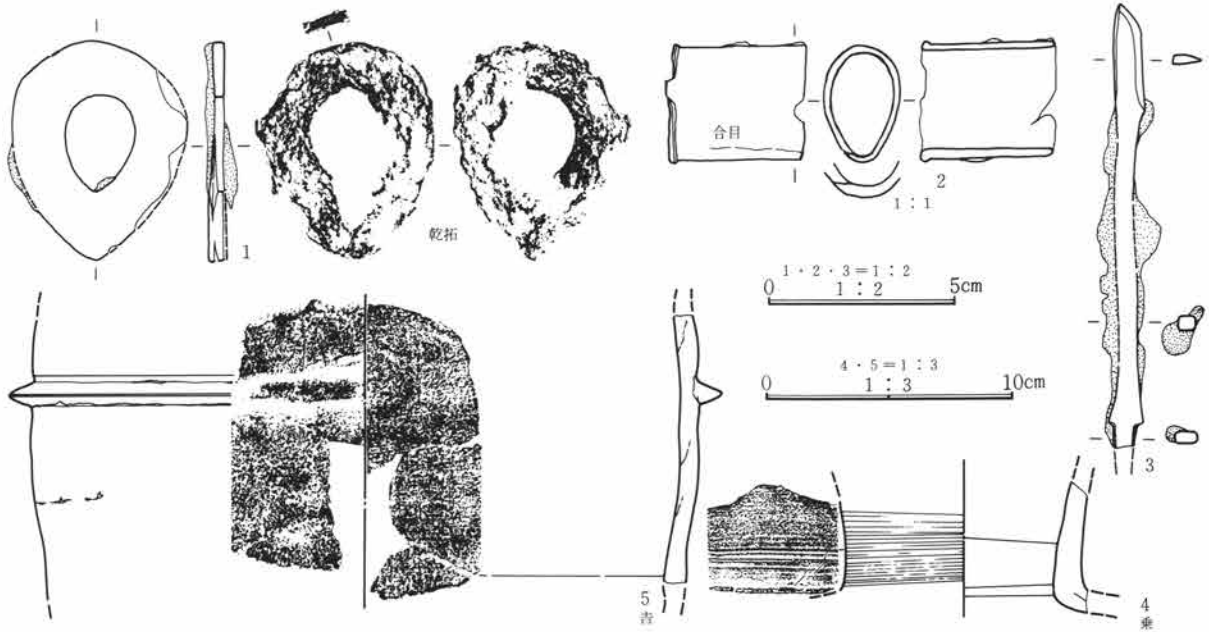
埴輪類の整理は、基本な埴輪総量を把握するため埴輪円筒、朝顔形について一切の基部と口縁部の接合を行なった。図版はその全個体を掲げたその結果、口縁部個体がわずか5（うち2朝顔形-第34図34・第35図37）であった。その一方で基部片は形象を含めると34個体であり、埴輪上半の欠失が調査段階前より前にあったことが窺われる。34個体のうち25個体（74%）が石室前と前庭とある注記の一群に含まれる。石室前・前庭の種別は円筒、朝顔ほか第34図36の剣込跡が判別がつかないこと、第35図38の直径が小さく特殊な種であること、形象は2点あり第34図32・33は人物の腕などの部材と考えられる。第IVトレンチと注記する一群は円筒・朝顔の口縁部は0、基部は3（8.8%）であった。種はそのほか第40図78が壺形埴輪片で外面に平行叩が見られ、別に胴部片がある。第40図77は形象で人物などの部材片と思われ、赤色顔料塗彩が施されている。南トレンチと注記のある一群は円筒・朝顔などの基部個体3（8.8%）、口縁部個体1であった。古墳名称しか注記のない一群は円筒・朝顔などの基部個体3（8.8%）、人物などの形象に第43図93・94がある。94は赤色塗彩されている。赤色塗彩されている個体は別に第30図にまとめておいた。

石室内と注記のある遺物は第31図に掲げたが、昭和10年頃には既に開口していたことを考慮すると4～6は石室内に副葬された器物か疑問が持たれる。7は平安時代前期、9は大甕で完器であれば幅80cmの石室入口からの搬入は困難であったであろう。8は胎土が県外からの搬入須恵器であり、5・6は古墳時代後期の土師器坏片で、同一手法をとる2個の共存のため石室内に副葬された可能性は、いく分持たれるであろう。

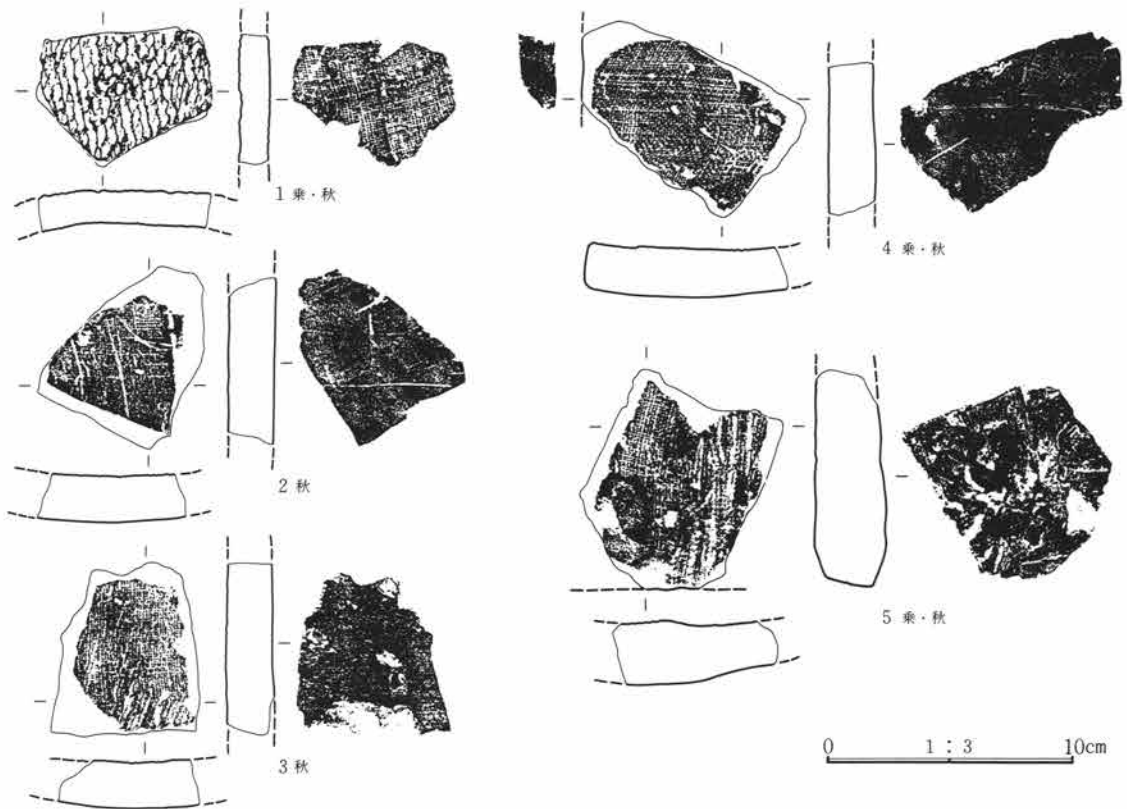
本墳との関連で、他の遺物中、可能性のありそうな個体を、破片量の多さをもってすれば、第32図8が48片、第33図22・23がともに32片あり、本墳に伴う可能性は極めて強い。2片以上は第32図16・18の2個体である。

特殊遺物

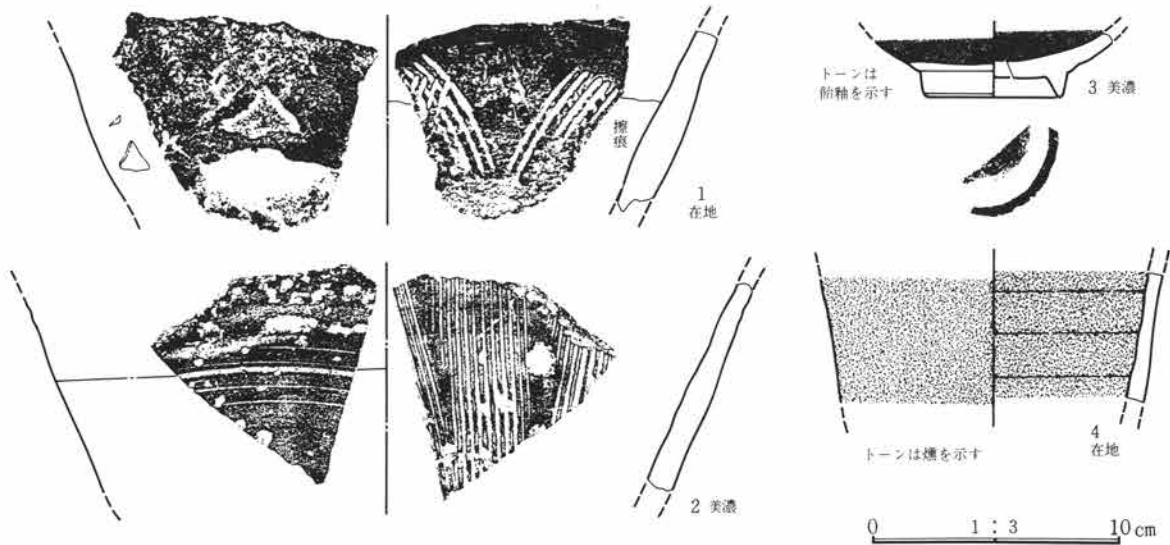
第44図1～3はD号墳周辺表採と注記があり、工事に伴ない採集したものらしい。1は茎穴が倒卵形を呈しているからおおむね古墳時代の所産と考えられ、九世紀以降の和様化した大刀以降、近世まで、茎穴は、茎の断面とほぼ同じ形態を呈する。2も和様化に先だつ頃の大刀装具鏝あるいは鞘口の筒金に見え、古墳時代



第44図 的場C・D号墳周辺と注記のある遺物図



第45図 的場E号墳第IVトレンチ（南トレンチ）出土古瓦図



第46図 的場A・C、C、E号墳出土中・近世遺物図

の所産と考えられる。3は中・近世鎌にしては区上がやや扁平で、隅丸四角形や、八角形をなさないことと、片切先、片刃鎌は近世鎌（中世の伝存を含め）ではほとんど実例を知るところがないので、1・2を含め本古墳群と直結する資料と考えられる。

第45図1～5は古瓦類で、注記にはE号墳第Ⅳトレンチ。1が男瓦か女瓦か不明のほか他は女瓦。叩は1が絡状（ローラー）か縄叩のほか他は手等による撫で、2に回転による撫が認められる。桶巻作の寄木痕は3～5に認められる。2の裏面に回転の撫が存在するのも桶作のためと考えられ、計4点が女瓦桶巻である。技法上の特徴のほかこれらの瓦は、割れ口、器面が磨耗していること、細片であることから運ばれて来た二次瓦と考えられる。所用元の可能性は北西約400～500mにある奥原古瓦散布地で、位置上の近接さと、出土瓦が調査地域の北北西から出土し、他では未見であることから関係の深さが示唆される。奥原古瓦散布地は奥原古墳群の北東約50～100mのあたり、木戸神社の東側隣接地で量は多くないが採集しうる、また8世紀頃の須恵器もやや多く散布があり生活と瓦使用段階とが接していたか同時にあたったことを思わせる。周知は1982（群馬歴史考古同人会）『土器部会資料』で奥原古瓦散布地の名称があたえられ、2点の鏡瓦と宇瓦1点が紹介された。翌1983『奥原古墳群』（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）に、古墳群調査によって得られた鏡瓦2点、宇瓦1点ほか掲載された。鏡瓦を第3図右上に掲げたが、左側が山王廃寺―秋間窯跡群の系譜にある複弁七葉鏡瓦で、8世紀初頭、右が8世紀中頃の高句麗様式の有軸素弁四葉素文中房鏡瓦であり、第3図右上下段に掲げた鏡瓦もその系譜にある。当古墳群出土瓦のおよその年代は、素文女瓦が複弁七葉鏡瓦に組まれる三重弧文字瓦の女瓦部と、胎土（乗附、秋間窯跡群中の板鼻層群に根ざす個所の）、焼成・製作技法が共通するため、8世紀初頭頃に、さらに1の縄叩の例が8世紀末以前に置かれる。奥原古瓦散布地の性格は、瓦の年代幅が50年以上（瓦に年代幅がある場合は、特殊な場合は除き一般的な考え方をすれば、差し替およびしっかりした管理・運営がなされていたと見なされる）あること、その頃の土師器・須恵器が採集（生活に直結した土器類がある程度存在することは瓦葺建物が存在する域に生活域がおよび、整然と空間機能分化した官衙・寺院は考え難い）されることなどから整然と空間機能分化せずに管理がなされた構造が浮び上り、より民に近い機能、いくばくか寺院跡としての可能性がもたれる。

中・近世の遺物は少なく、第46図に掲げた。1は15世紀代の製品で、隣接の七曲の砦との関連か。4は近代の植木鉢様の製品でE号墳の石室の開口段階が示唆される。

第5篇 遺物観察

遺物整理時の遺物抽出法は次のとおりである。後期古墳は、築造段階、石室機能段階（埋葬に係わる）、石室前機能段階、古墳を管理・維持した段階などが考え得て、さらに前代・後代の諸遺構関連の遺物が加わっているのである。そうした遺物類が当初の納置・廃棄位置にあれば、それぞれの機能や目的を明らかにすることができ、その諸段階の認定が容易となるはずで、しかし、現実には古墳は既掘や後世の耕作などによって多くの攪乱が生じていて、その諸段階を明らかにすることは容易でない（出土位置が旧状をとどめていたのはD号墳石室内の一部と前庭出土遺物類、E号墳の埴輪列）。そのため出土遺物を用いて古墳別、盛衰グラフを個体量をもって個体別に把握できるよう遺物抽出を行なった。したがって土師・須恵器の同一個体を二個体として表記したつもりはない。細片・大形片といえども、一個体一表現である。また土器類は製作地を意識して胎土観察し、製作地の略称（P.30参照）を遺物番号の後に附した。また直接遺物に係わる例言・凡例は遺物図中に表記したので参照されたい。

的場A号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第10図1 写2-1	玉類 勾玉	A号墳。 石室≒床。	不明。		記録写真に出土状態あり。やや長目のコ字形を呈する。写真によれば部分的に製作時の節理面が残され、一つは穿孔部。	瑪瑙製という。
第10図2 写2-2	鉄器 大刀か	A号墳。 石室≒床。	小片。身巾 $2.8 + \alpha$ 。 重 $0.5 + \alpha$ 。		鍛割の状態から身巾のある大形大刀の残片と思われる。そのため本墳から大刀出土の可能性を考える必要性あり。	
第10図3 写2-3	鉄器 刀子	A号墳。 石室≒床。	茎片。長 $3.4 + \alpha$ 。 重 $0.9 + \alpha$ 。		錆化ぶくれのため重ねの厚い茎になっている。表裏には木質が残され木柄が装着されていた。	木柄装着。
第10図4 写2-4	鉄器 刀子	A号墳。 石室≒床。	茎片。長 $7.9 + \alpha$ 。 身巾 1.6 。		身側は鎌元をわずか残す。身側には研出しの稜がわずか認められる。茎尻には鉄目釘が残され、木質付着。区と柄の関係一文字。	木柄装着。
第10図5 写2-5	鉄器 刀子	A号墳。 石室≒床。	茎尻欠損。長 $16.5 + \alpha$ 。 重 1.9 。		旧態は良好。わずか反あり。棟は丸か平か不明。茎に部分的に木質付着。鋒はこころ付く。	木柄装着。
第10図6 写2-6	鉄器 鎌	A号墳。 石室≒床。	残存長 $4.8 + \alpha$ 。 鎌先巾 1.0 。		形態は有柄尖根であり茎・箆被部を欠損する。鎌先は片面がやや平になり三角形を思わせる。7と揃物か。	
第10図7 写2-7	鉄器 鎌	A号墳。 石室≒床。	残存長 $6.5 + \alpha$ 。 鎌先巾 1.0 。		形態は有柄尖根であり、茎・箆被部を欠損する。鎌先は片面がやや平になり三角形を思わせる。6と揃物か。	
第10図8 写2-8	鉄器 鎌	A号墳。 石室≒床。	残存長 $9.3 + \alpha$ 。 鎌先巾 $1.2 + \alpha$ 。		鎌先を旧時欠損するが茎尻まで旧態。茎には箆跡の木質残存。鎌先は鋒のやや枯れた剣形を呈すると推定される。区は良好。	
第10図9 写2-9	鉄器 鎌	A号墳。 石室≒床。	残存長 $6.0 + \alpha$ 。 鎌先巾 $0.9 + \alpha$ 。		区部以下に箆跡が残存。区より上方は横断面形隅丸長方形を呈する。茎の横断面形はやや丸味をおびる。	
第10図10 写2-10	須恵器 台付壺	A号墳。 石室内か。	各部3片。残存高 $8.4 + \alpha$ 。	緻密。硬質。淡灰色。	器種は台付短頸壺。脚部は旧時に失う。胴部に沈線2条。以下平行叩後撫。	県外からの搬入か。
第10図11 写2-11	須恵器 長頸壺	A号墳。 石室内。	各部5片。推定残 存高 17.4 。	緻密。焼締。暗灰褐色。	5片を合成復元。外面に自然軸。内面に粘土板接合あり。フラスコ形長頸壺。	東海地方搬入・乗附・西毛か。
第10図12 写2-12	石製 砥石	A号墳。	欠損なし。全長 7.5 。巾 4.3 。		表裏に研磨面あり。側部にも一部およぶ。図中の点描部は研磨面。右平面図の右側部に整形痕があるため中・近世砥石か。	粘板岩。

的場C号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第10図13 写2-13	土師器 坏	A号墳。	写個体。口径(11.8)。器高(4.1)。	密。並。淡橙色。	体部に型肌あり、以下施削。口縁部の内外面に横撫。	藤岡。
第10図14	須恵器 短頸壺	A号墳。	写個体片。最大径(12.7)。	緻密。硬。淡灰色。	体部外面に不定方向の指撫。体部上半は内面に轆轤目が目立つほか滑らか。	秋間か乗附。
第10図15 写2-15	須恵器 坏	A号墳。	口縁部1片。最大径(13.9)。	緻密。硬。暗灰色。	体部下半轆轤による右回転施削。受部は粘土貼付。	乗附か藤岡・吉井。胎734。
第10図16 写2-16	須恵器 高坏	A号墳。	脚部2片。残存長 $6.9 + \alpha$ 。最大径(7.5 + α)。	緻密。硬。淡灰色。	長脚1段透。計算上は透3方向。内・外面轆轤整形。凹凸多く、内面側は紐作痕が部分的に残る。外面は全体的に滑らか。	在地製と見えるが製作地不詳。
第10図17 写2-17	須恵器 小形甕	A号墳。	口縁～頸部3片。口径(19.4)。	緻密。硬。淡灰色。	薄作であり。頸部外面は無文。割口に紐作痕が見える。	乗附。
第11図18 写2-18	須恵器 大形甕	A号墳。	口縁～体部6片。口径(33.2)。	やや粗。軟。淡灰色。	頸部外面に3条の沈線。割口に紐作痕明瞭。体部平行叩。内面同心円当目。	乗附。
第11図19 写2-19	須恵器 大形甕	A号墳。 墳頂。	口縁～体部72片。長(33 + α)。	緻密。焼締。黒灰色。	外面に黒光りした自然釉。口縁端から下方に至るまで細かな波状文あり。	乗附。
第12図20 写2-20	須恵器 中形甕	A号墳。 墳頂。	口縁～底部53片。口径(23.0)。	やや粗。軟。淡灰色。	頸部に篋傷2条。底面は粘土板接合か。外面平行叩。内面同心円の青海波当目。	乗附。

的場C号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第16図1 写4-1	鉄器 大刀	C号墳。現品不明。	概報に全身60cmとあり。		記録写真には切先を入口側に、茎を奥壁側に、左玄室壁に側して置く。刃側は壁側。茎に鎌様の筒金物が見える。やや細身。不鮮明ながら鉄目釘らしきものが見える。	
第16図2 写4-5	銅製品 耳飾	C号墳。現品不明。	記録写真に見えるが実寸不詳。		記録写真によれば錆化少く、遺存良好に見える。写真のため耳環の横断面形が円形か楕円形かは不詳。	
第16図3 写4-6	鉄器 轡	C号墳。玄室≒床。	引手長15.2。銜長14.9。鏡板径5.8。		二連式銜轡(含轡)で小形。記録写真によれば畳まれた状態で出土。詳しくは実測図に注記あり。錆化は全体に剥落。	
第16図4 写4-14	鉄器 吊手	C号墳。玄室≒床。	長7.5。吊手長径4.6。		鞍の鞍か錠の吊手金具か。錆化いちじるしい。実測図は接合後の状態であるので出土写真を参照。	遺物番号5と一対か。
第16図5 写4-5	鉄器 吊手	C号墳。玄室≒床。	長7.7。吊手長径5.0。		鞍の鞍か錠の吊手金具か。錆化いちじるしい。実測図は接合後の状態であり、出土状態と大きく異なるため出土写真参照。	遺物番号4と一対か。
第16図6 写4-6	鉄地金 銅飾鋸	C号墳。玄室≒床。	座金物長径2.6。		鉄地金銅張の座金物に鉄鋸が付く。欠損は調査時。座金物には方形の透あり。鉄鋸は輪状の吊手が付くためか平板2枚の残欠。	木質見られず。
第16図7 写4-6	銅製 飾金具	C号墳。玄室≒床。	頭長径1.8。		銅製で表面に渡金は観察されず。頭部表面には若干の凹凸あり。足部先端はやや尖る。木質見られず。	
第16図8 写4-8	鉄器 鋸	C号墳。玄室≒床。	残存長 $7.8 + \alpha$ 。		細身尖根で鋸は片側切刃となる。鋒はころあい。篋被と鋸先部との境は不明瞭。末端と中途の折れは調査時の欠損。	

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第16図9 写4-9	鉄器 鏃	C号墳 玄室≒床。	残存長3.3+α。		茎と莖被部の残欠で、調査時、茎元には鏃区が残される。茎は極めて短いため旧時の錆化消耗か。	
第16図10・11 写4-10	鉄器 鏃	C号墳。 玄室≒床。	10残存長5.4。 11残存長1.1。		2本の鉄が錆化ゆ着。11は茎尻のみ。11は茎元に区部を残す。両鏃の欠損は調査時。	
第16図12 写4-12	須恵器 大形甕	C号墳多。 A号墳少。	体部～口縁部片4 片。口径(57.6)。	白色鉱物粒含。焼締。黒 灰色。	口縁部以下に沈線で区割された波状文帯 4段以上あり。	乗附。
第17図13 写4-13	須恵器 中形甕	C号墳。	体部23片。 頸部径(29.0)。	白色鉱物粒含。硬。灰色。	拓影図のとおり頸部より上方に剝離痕あ り。外面平行叩。内面同心円当目。	乗附。
第17図14 写4-14	須恵器 大形甕	C号墳。	体部3片。	白色鉱物粒含。硬。暗灰 色。	外面平行叩。内面同心円当目あり。器肉 やや厚いため大形甕片か。	乗附、秋間。
第17図15 写4-15	須恵器 中形甕	C号墳及び 石室内。	体部上半5片。	白色鉱物粒含。並。淡灰 色。	外面平行叩。内面同心円当目。外面は叩 後、4段以上掻目条痕を施す。	乗附。
第17図16・17 写4-17	須恵器 大形甕	C号墳多。 E号墳少。	体部32片。	白色鉱物粒含。並。淡灰 色。	外面平行叩、内面同心円当目、割れ口に 部分的に紐作痕あり。	乗附。

的場D号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第24図1 写7-1	銅製品 鉸具	D号墳。 石室≒床。	軸側最長。 最大巾3.3。		刺金部には受金の当り痕あり。鉸2個所。表・裏に黒色物質付着。 製作時の鏝目各所に、シャープに残り、砥石ヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図2 写7-2	銅製品 丸柄	D号墳。 石室≒床。	最大長2.4。 厚0.45。		座金物に鉸3個所。表・裏・側部に黒色物質付着。各所に製作時の 鏝目シャープに残り、砥石のヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図3 写7-3	銅製品 巡方	D号墳。 石室≒床。	最大長2.35。 厚0.55。		座金物に鉸4個所。表に黒色物質付着。各所に製作時の鏝目シャ ープに残り、砥石のヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図4 写7-4	銅製品	D号墳。	最大長2.35。 厚0.55。		欠損は調査時。座金物に鉸4個所。表に黒色物質付着。各所に製作 時の鏝目シャープに残り、砥石のヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図5 写7-5	銅製品 丸柄	D号墳。 石室≒床。	最大長2.40。 厚0.45。		座金物に鉸3個所。表・側部に黒色物質付着。各所に製作時の鏝目 シャープに残り、砥石のヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図6 写7-6	銅製品 丸柄	D号墳。石 室≒床。	最大長2.40。 厚0.55。		座金物に鉸3個所。表に黒色物質付着。各所に製作時の鏝目シャ ープに残り、砥石のヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図7 写7-7	銅製品 巡方	D号墳。石 室≒床。	最大長2.35。 厚0.45。		座金物に鉸4個所、表・裏・側部に黒色物質付着。各所に製作時の 鏝目シャープに残り、砥石のヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図8 写7-8	銅製品 巡方	D号墳。 石室≒床。	最大長2.30。 厚0.50。		座金物に鉸4個所、表・裏に黒色物質付着。各所に製作時の鏝目 シャープに残り、砥石のヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図9 写7-9	銅製品 鉈尾	D号墳。 石室≒床。	最大長1.95。 厚0.45。		座金物に鉸3個所。表・裏に黒色物質付着。各所に製作時の鏝目 シャープに残り、砥石のヒケ傷と異なる。	1～9で一具の 帯金具。
第24図10 写7-10	鉄製 刀子	D号墳。 石室≒床。	残存長7.8+α。 重1.3。		平作。切先・茎尻は調査時欠損。茎に柄痕の木質あり。両区部と柄 との関係は一文字。表・裏に研磨による刃部の浅い稜あり。	錆ぶくれ少なく 良鉄か。

的場D号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第24図11 写7-11	鉄製 刀子	D号墳 石室 \times 床。	残存長10.0+ α 。 重1.7。		平作。茎尻は調査時欠損。踵半欠。両区。棟の切先から1.2cmの位置に地刃境変換部あり。表・裏に研磨による刃部の浅い稜あり。	錆ぶくれ少なく 良鉄か。
第24図12 写7-12	須恵器 坏蓋	D号墳前庭 左壁下。	直径13.2。 器高1.4。	黒色物質含。並。灰色。	大きな摘みを貼付。外面天井部は轆轤による回転斲削。	秋間。
第24図13 写7-13	須恵器 壺蓋	D号墳前庭 左壁下。	直径11.3。 器高2.0。	白色鉾物粒含。焼締。暗灰色。	台付短頸壺蓋。天井部に低い隆帯。摘み貼付。内面轆轤目。器面滑らか。	乗附。吉井。
第24図14 写7-14	須恵器 長頸壺	D号墳前庭 左右組。	胴径18.7。 器高27.5+ α 。	白色鉾物粒含。硬。灰色。	体部下半叩目・轆轤右回転斲削。胴部2条1単位4段の沈線帯。台部旧時欠。	乗附・秋間。
第25図15 写7-15	須恵器 長頸壺	D号墳前庭。	胴径17.4。 器高29.4。	黒色物質含。並。灰色。	1条1単位の沈線帯4。体部下半に轆轤右回転斲削。頸部3段接合。	秋間。胎土分析 736。
第24図16 写7-16	須恵器 長頸壺	D号墳前庭 右裏。	8片。胴径18.3。 器高(11.4+ α)。	白色鉾物粒含。硬。淡灰色。	体部上方列点刺突文。下半轆轤右回転斲削。頸部3段接合。台・頸部旧時欠。	乗附。
第25図17 写8-17	須恵器 中形甕	D号墳前庭 と周辺。	65片。胴径42.2。 器高46.8。欠損少。	白色鉾物粒含。硬。淡灰色。	打欠の敲打痕不明瞭。外面平行叩。内面同心円当目。底部は粘土板接合。	乗附・秋間。
第26図18 写8-18	須恵器 中形甕	D号石室内。	26片。口～体部。 口径(23.0)。	白色鉾物粒含。硬。淡灰色。	頸部立上に2条1単位の沈線、波状文帯2段。外面平行叩、内面同心円当目。	乗附。
第27図19 写7-19	土師器 坏	D号墳。	口縁部片。 口径(12.0)。	鉾物粒含。並。橙色。	口縁部の内外面横撫。対部外面下方手持斲削。	
第27図20 写7-20	土師器 坏	D号墳。	1/2個体。口径(12.0)。 器高3.4。	鉾物粒含。並。暗橙色。	口縁部の内外面横撫。体部外面下方手持斲削。内面凍ハゼ顕著。	この場合の凍は 露出咬。
第27図21 写8-21	土師器 坏	D号墳。	口縁部片。 口径(10.8)。	鉾物粒微素地き目細。軟。明橙色。	口縁部の内外面横撫。体部外面下方手持斲削。	藤岡。
第27図22 写8-22	土師器 坏	D号墳。	口縁部片。 口径(11.8)。	鉾物粒微。軟。明橙色。	口縁部の内外面横撫。体部外面下方手持斲削。	藤岡。
第26図23 写8-23	土師器 坏	D号墳。	口縁部片。 口径(12.8)。	鉾物粒含。硬。橙色。	口縁部の内外面横撫。体部外面下方手持斲削。	
第27図24 写8-24	土師器 坏	D号墳。	口縁部片。 口径(15.0)。	鉾物粒微。硬。暗橙色。	口縁部立上に3段の浅い稜あり。その内外面横撫。体部手持斲削。	藤岡。
第27図25 写8-25	土師器 坏	D号墳。	口縁部片。 口径(14.0)。	鉾物粒微。並。橙色。	口縁部内外面横撫。体部手持斲削。体部と立上との稜は浅い。	藤岡
第27図26 写7-26	土師器 甕	D号墳。	口縁部片。 口径(23.6)。	鉾物粒含。硬。暗橙色。	口縁部の内外面横撫。体部外面縦方向の斲削。斲削が先で横撫は後。	
第27図27 写8-27	須恵器 坏蓋	D号墳。	口縁部1片。 口径(13.8)。	白色鉾物粒含。硬。淡灰色。	口縁部先より受部先端が外面に突出。その点は再度確認、小形である。	乗附。
第27図28 写8-28	須恵器 坏	D号墳。	底部片3片。 底径(10.3)。	白色鉾物粒含。硬。淡灰色。	内面轆轤目あり、外面底および際、回転斲削。器肉やや厚い。	乗附・秋間。
第27図29 写8-29	須恵器 坏	D号墳。	1/2個体。2片。 口径(12.8)。	黒色物質粒含。硬。淡灰色。	内面轆轤目あり。外面底および際、回転斲削。	秋間

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第27図30 写8-30	須恵器 埴蓋	D号墳。	口縁部3片。 口径(19.0)。	白色鉾物粒含。焼締。淡 灰色。	口縁部端より受端が外面に突出。その点 と器高は再度確認。器肉は薄く水挽は上 手である。	秋間・乗附。
第27図31 写8-31	須恵器 坏	D号墳。	底部片。 底径(9.0)。	白色鉾物粒含。硬。暗灰 色。	底面は轆轤による回転斲削。外面底際は 水挽による凹み。	乗附。
第27図32 写8-32	須恵器 埴	D号墳。	底部2片。高台端 部径(15.0)。	白色鉾物粒多。硬。暗灰 色。	底面が高台部より大きく突出する。付高 台。高台は小作。外面底回転斲整形。こ の突出底の埴は地域において出土数が少 なく生産量が少なかったと考えられ、そ のため生産時期が限定される可能性大。 8世紀前半。	乗附。
第27図33 写8-33	須恵器 坏	D号墳。	底部片。 底径(6.5)。	黒色物質含。軟。淡暗灰 色。	全体に軟質。底面は轆轤右回転の糸切。 内面に2字以上の刻字あり。図上方は旧 時欠損。焼成前遺書。	秋間。刻字あり、 判読できず。
第27図34 写8-34	須恵器 不詳	D号墳。	体部片。 最大径(13.3)。	白色鉾物粒含。並。淡灰 色。	天地不詳。図の天地は割口粘土走行から。 下方に浅い掻目あり。体部外面上方回転 斲削。内面轆轤目。	吉井・藤岡
第27図35 写8-35	須恵器 台付壺	D号墳。	体部～底部片2片。 底部径(11.7)。	白色鉾物粒微。硬。淡灰 色。	外面体部下方は回転斲削。内面轆轤目あり。 。	乗附・秋間。
第27図36 写8-36	須恵器 小形甕	D号墳。	頸部片。 頸部径(15.0)。	白色鉾物粒含。焼締。淡 灰色。	立上外面に斲による細線文あり。外面に 自然釉が附着。	乗附。
第27図37 写8-37	須恵器 甌	D号墳。	脚部片。 脚端部径(21.8)。	白色鉾物粒多。硬。淡灰 色。	くびれ部上方に大きな突帯を貼付。内面 と脚外面は横撫。	吉井。

的場E号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第31図1 写11-1	鉄器 小刀	D号墳石室 内。	残存長20.0+ α 。 元重0.7。	平作。茎尻と先は旧時欠損。目釘は鉄。両区であるが刃側は錆化の ため不明瞭。茎に柄の下地と思われる繊維の巻付けあり。		錆ぶくれ少なく 良鉄か。
第31図2・3 写11-2・3	碧玉 管玉	E号墳床攪 乱。	写真によれば1.8 ～2.0前後。	やや小形の管玉で、細身。穿孔は片側であったという。		概報に碧玉とあ り。
第31図4 写11-4	土師器 甕	E号墳石室 内。	体部片。	6世紀代の長甕片で、外面は斲削。内面は撫。図中の拓影は外面側 である。		
第31図5 写11-5	土師器 坏	E号墳。 石室内。	体部片。 最大径(11.5)。	鉾物粒含。硬。暗褐色。	内面は黒色処理され、研磨あり。外面立 上も研磨・割口の破線は黒色箇所。	黒色処理(ト ーン)。
第31図6 写11-6	土師器 坏	E号墳。 石室内。	口縁部片。 口径(15.2)。	鉾物粒含。硬。暗褐色。	内面のみ黒色処理。外面体部下半を除き 研磨。黒色化は5ほど滲み込まず。	黒色処理(ト ーン)。
第31図7 写11-7	土師器 甕	E号墳。 石室内。	口縁部片。 口径(23.8)。	鉾物粒含。硬。暗褐色。	口縁部下に紐作痕あり。その下に指頭圧 痕あり。内外面に横撫。	
第31図8 写11-8	須恵器 罍	E号墳。石 室内。	頸部片。 残存器高8.0。	鉾物粒目立ず、焼締。黒 灰色。	頸部下方に掻目、上方に細かな波状文あ り。内面轆轤目あり。外面自然釉。	県外より搬入。 岡段階。

的場E号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第31図9 写11-9	須恵器 大形甕	E号墳石 室・前庭。	頸部片2片。	白色鉾物粒含。焼締、黒 灰色。	沈線帯の間に列点刺突文。内面紐作後、 水挽の轆轤目あり。割口に接合痕。地域 で甕に列点刺突文は少ない。	乗附。 頸部列点文の例 として稀少。
第32図10 写11-10	土師器 杯	E号墳。	口縁部片。 口径(12.0)。	鉾物粒含。並。淡橙色。	口縁部の内外面は横撫。体部外面は手持 の寛削。	
第32図11 写11-11	土師器 杯	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(15.3)。	鉾物粒含。軟。明橙色。	口縁部の内外面は横撫。体部外面は手持 の寛削。	藤岡か。
第32図12 写11-12	土師器 甕	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(21.0)。	鉾物粒含。軟。暗橙色。	口縁部の内外面に横撫あり。口縁形態は 6世紀後半～7世紀前半頃か。	
第32図13 写11-13	土師器 甕	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(21.3)。	鉾物粒含雲母粒入る。硬。 暗橙色。	口縁部の内外面に横撫あり。体部外面寛 削。内面寛撫。	藤岡か北武蔵。
第32図14 写11-14	須恵器 高杯	E号墳石室 前。	口縁～体部片。 口径(10.0)。	白色鉾物粒含。焼締。暗 灰色。	体部下半に隆線2条、その間に波状の疑 似刺突あり。隆線は沈線2条間隆線。	乗附。
第32図15 写11-15	須恵器 高杯	E号墳石室 前。	脚部片。 脚端径(12.0)。	白色鉾物粒微。焼締。暗 灰色。	内外面轆轤目。脚端は端部に浅い沈線を 入れ、その上下を浅い隆部とする。	乗附、藤岡・吉 井。
第32図16 写11-16	須恵器 罎	E号墳石室 前。	頸部～胴部片。 最大径(11.4)。	鉾物粒微。焼締。暗黒灰 色。自然釉は黒褐に発色。	燻強く、自然釉あり。頸部に波状文。胴 中位に列点刺突文。下半に細かな平行叩 目あり。内面に轆轤目あり。薄作であり 精作。大形化した段階。	東海。陽徳寺段 階で岐阜二又1 号墳例などに酷 似同一窯か。
第32図17 写11-17	須恵器 短頸壺	E号墳石室 前。	胴部片。 最大径(9.5)。	白色鉾物粒含。硬。淡灰 色。	肩部に掻目施文あり。内外面轆轤目あり。 委小化傾向あり。	乗附。
第32図18 写11-18	須恵器 提瓶	E号墳石室 内。前。	胴部2片。 最大径(12.8)。	白色鉾物粒含。硬。暗灰 色。	胴部の平部は粘土板。胴立上外面は掻目 か平行叩か不詳。内面紐作痕。	乗附。
第32図19 写12-19	須恵器 横瓶	E号墳石室 前。	口縁～体部48片。 口径(10.5)。	鉾物粒微。焼ぶくれ多。 焼締。淡灰色。	自然釉。両小口は粘土板接合。外面平行 叩。部分掻目施文。内面同心円当目。	東海。胎土分析 番号735
第32図20 写11-20	須恵器 小形甕	E号墳石室 前。	頸部立上片。頸部 突帯部径(20.8)。	鉾物粒微。硬。灰色。	体部の外面に隆帯1条あり。器面の内外 は滑らかで薄作。	東海。
第32図21 写11-21	須恵器 小形甕	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(24.0)。	白色鉾物粒含。硬。灰色。	口縁部外面に浅い凹みあり。体部外面は 平行叩、内面は同心円当目。	乗附。
第33図22 写12-22	須恵器 中形甕	E号墳石室 前。	体部32片。 最大径(44.0)。	白色鉾物粒微。焼締。淡 灰色。自然釉淡暗緑色。	外面平行叩。内面同心円当目。外面下方 に坏などを用いた窯道具痕あり。	東海。
第33図23 写12-23	須恵器 大形甕	E号墳石室 前。	体部32片。 最大径(69.0)。	白色鉾物粒。焼締。淡灰 色。	外面細かい格子叩(平行叩のくり返して はない)を丁寧に施す。内面の同心円当 目も同様に丁寧。	東海
第34図24 写11-24	須恵器 坏・埴	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(14.1)。	鉾物粒含。軟。淡灰色。	底部欠損のため坏・埴不明。軟質化した 段階の坏である。外面に轆轤目あり。	秋間。
第34図25 写12-25	須恵器 坏	E号墳石室 前。	底部片。 底径(6.2)。	鉾物粒含。軟。淡灰色。	軟質化段階。内面にコテ跡なし(瓶では ない)。底面轆轤目右回転糸切。	秋間か。
第34図26 写12-26	須恵器 埴	E号墳石室 前。	底部片。 高台端部径7.2。	黒色物質粒含。並。暗灰 色。	高台は貼付。轆轤目右回転糸切。内面底轆 轤目。	秋間。

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第34図27 写12-27	須恵器 壺	E号墳石室 前。	底部片。高台端部 径(6.7)。	黒色物質粒含。並。灰色。	高台は貼付。轆轤目が内外面にあり。高台は比較的小作である。	秋間。
第34図28 写11-28	須恵器 壺・瓶	E号墳石室 前。	底～体部下半片。 高台部径(7.2)。	白色鉾物粒含。硬。暗灰色。	8世紀以降の高台付短頸壺の小片。内外面に轆轤目あり。	乗附。
第34図29 写11-29	須恵器 壺・瓶	E号墳石室 前。	底～体部下半片 最大径(19.0)。	白色鉾物粒含。硬。暗灰色。	台付長頸壺では径が大過ぎ、8世紀代の有蓋台付短頸壺片か。内外面轆轤目。割れ口の接合面は明瞭。	乗附。
第34図30 写11-30	須恵器 罎釜	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(33.5)。	白色鉾物粒含こわばる。 硬。暗橙灰色。	大形の罎釜で口径は再確認済。罎部は貼付。内面に紐作痕あり。	吉井。
第34図31 写13-31	埴輪 朝顔か	E号墳石室 前。	口縁部2片。	鉾物粒多。並。橙色。	口縁部の周辺は横撫。刷毛目は荒い。器肉は薄作。	藤岡・吉井。 B類。2片。
第34図32 写13-32	埴輪 形象	E号墳石 庭。	人物の腕片か。	鉾物粒含。並。明橙色。	図上方に粘土の出柄接合痕あり。刷毛目は細く外面のみ。内側指頭圧痕。	藤岡・吉井。
第34図33 写13-33	埴輪 形象	E号墳石 庭。	人物の腕片か。	鉾物粒含。並。明橙色。	図上方に粘土の出柄接合痕あり。刷毛目は細く、外面のみ。内側指頭圧痕。	藤岡・吉井。
第34図34 写13-34	埴輪 朝顔	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(35.5)。	鉾物粒含。並。橙色。	口縁部の周辺は横撫。内外面は荒い刷毛目。内面に凍ハゼ顕著。	藤岡・吉井。 B類。2片。
第34図35 写13-35	埴輪 朝顔	E号墳前 庭。	上半部。 最大径(32.8)。	鉾物粒含。並。橙色。	突帯2条あり。内外面に荒い刷毛目。内面の上方は凍ハゼ顕著。	藤岡・吉井。 B類。3片。
第34図36 写13-36	埴輪 形象か	E号墳石室 前。	基部片。 基部径(15.2)。	鉾物粒含。並。暗橙色。	基部に半円の剥込みあり。作為的か不明。内外面荒い刷毛目。内面指搔落。	藤岡・吉井。 B類。1片。
第35図37 写13-37	埴輪 朝顔	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(39.2)。	鉾物粒含。並。暗橙色。	口縁部周辺刷毛目後の横撫。内外荒い刷毛目、突帯1条。内面紐作痕。	藤岡・吉井。 B類。10片。
第35図38 写13-38	埴輪 形象	E号墳石室 前トレ。	基部片。 最大径(9.4)。	鉾物粒含。硬。暗橙色。	内外面荒い刷毛目、内面指による搔落あり。内面紐作痕。	藤岡・吉井。 B類。3片。
第35図39 写13-39	埴輪 形象	E号墳石室 前。	部位不詳。 最大径(17.5)。	鉾物粒含。並。明橙色。 黒斑あり。	内外面荒い刷毛目、内面の下地整形に指の搔落あり、内面紐作痕。	藤岡・吉井。 B類。4片。
第35図40 写13-40	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	口縁部片。 口径(30.0)。	鉾物粒含。軟。橙色。	口縁部の内外横撫、外面刷毛後、内面刷毛が先、刷毛目細い。	藤岡・吉井。 A類。4片。
第35図41 写13-41	埴輪 朝顔か	E号墳前 庭。	上半部片。 最大径(28.5)。	鉾物粒含。軟。橙色。	外面細い刷毛目、内面指整形上紐作痕。外面に突帯1条。内面紐作痕。	藤岡・吉井。 A類。3片。
第35図42 写13-42	埴輪 円筒	E号墳前 庭。	中位～上半部。 最大径(21.6)。	鉾物粒含。硬。淡橙色。	内・外面に荒い刷毛目。外面に突帯2条、下方に透、内面に紐作痕。	藤岡・吉井。 B類。6片。
第35図43 写13-43	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	中位片。 最大径(19.5)。	鉾物粒含。軟。明橙色。	突帯1条あり。外面細い刷毛目、内面指撫。搔落。	藤岡・吉井。 B類。3片。
第36図44 写13-44	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	中位片。 最大径(20.0)。	鉾物粒含。軟。淡橙色。	突帯1条あり。内外面荒い刷毛目、内面の下地は指搔落、内面に紐作痕。	藤岡・吉井。 B類。6片。
第36図45 写14-45	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	中位片。 最大径(18.4)。	鉾物粒含。硬。明橙色。	突帯2条あり。内外面に細い刷毛目。内面の下地は指撫と搔落。内面紐作痕。	藤岡・吉井。 A類。3片。

的場E号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第36図46 写13-46	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(11.2)。	鉞物粒含。硬。暗橙色。	基部は粘土帯成形、下から見て接合面Z 巻(以降、逆をS巻とする)。外面に細 い刷毛目。内面に指撫と搔落。	藤岡・吉井。 粘土帯Z巻。 A類。2片。
第36図47 写13-47	埴輪 円筒	E号墳前 庭。	基部。 基部径(12.3)。	鉞物粒含。硬。橙色。	外面細い刷毛目。内面に指撫と搔落。基 部成形は粘土帯による。	藤岡・吉井。2片。 粘土帯。A類。
第36図48 写14-48	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(13.5)。	鉞物粒含。硬。橙色。	内外面に荒い刷毛目。内面の下地は指搔 落。内面に紐作痕。	藤岡・吉井。 B類。6片。
第36図49 写13-49	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(14.0)。	鉞物粒含。並。淡橙色。	外面荒い刷毛目。内面指搔落。基部成形 は粘土帯Z巻1段とし上方は紐作。	藤岡・吉井。3 F。 粘土帯Z巻。B類。
第36図50 写14-50	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(14.3)。	鉞物粒含。並。橙色。	外面に荒い刷毛目。内面に指撫。基部成 形は粘土帯Z巻1段。上方は紐作。	藤岡・吉井。2片。 粘土帯Z巻。B類。
第36図51 写14-51	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(14.3)。	鉞物粒含。軟。橙色。	外面に荒い刷毛目。内面は指撫。基部の 成形は粘土帯か紐か不詳。	藤岡・吉井。 B類。2片。
第36図52 写14-52	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(13.8)。	鉞物粒含。軟。明橙色。	外面は細い刷毛目、内面に指撫。基部成 形は粘土帯Z巻1段。上方は紐作。	藤岡・吉井。4片。 粘土帯Z巻。A類。
第36図53 写14-53	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(15.8)。	鉞物粒含。並。明橙色。	内外面に細な刷毛目。内面は指撫と搔落 あり。	藤岡・吉井。 A類。2片。
第36図54 写14-54	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(20.1)。	鉞物粒含。並。淡橙色。	やや大形の基部で直径再確認済。外面細 い刷毛目。内面に指搔落、紐作痕。	藤岡・吉井。2片。 大形基部。A類。
第37図55 写14-55	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(14.2)。	鉞物粒含。並。淡橙色。	内外面に細い刷毛目。内面に指撫、搔落。 基部成形は粘土帯Z巻、上方紐作。	藤岡・吉井。7片。 粘土帯Z巻。A類。
第37図56 写14-56	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(13.5)。	鉞物粒含。硬。明橙色。	内外面に細い刷毛目。内面下地指撫搔落。 基部成形は粘土帯Z巻、上紐作。	藤岡・吉井。6片。 粘土帯Z巻。A類。
第37図57 写14-57	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(15.0)。	鉞物粒含。硬。橙色。	外面に荒い刷毛目。内面下地は指撫、搔 落。基部成形は紐。	藤岡・吉井。 B類。2片。
第37図58 写14-58	埴輪 円筒	E号墳前 庭。	基部。 基部径(14.8)。	鉞物粒含。硬。橙色。	外面に荒い刷毛目。内面下地は指撫、搔 落。成形は紐作。	藤岡・吉井。 B類。1片。
第37図59 写14-59	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径(12.5)。	鉞物粒含。並。淡橙色。	外面に荒い刷毛目。内面下地は指撫、搔 落。成形は上方が紐作による。下方不詳。 突帯1段残存。	藤岡・吉井。 B類。4片。
第37図60 写14-60	埴輪 円筒	E号墳前 庭。	基部。 基部径15.0。	鉞物粒含。硬。淡橙色。	内外面に荒い刷毛目。内面下地は指撫、 搔落。基部成形は粘土帯Z巻による。上 方紐作による。	藤岡・吉井。 粘土帯Z巻。 B類。28片。
第38図61 写14-61	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径13.5。	鉞物粒含。硬。橙色。	外面に細い刷毛目。内面下地は指撫、搔 落。基部成形は粘土帯Z巻による。上方 紐作による。	藤岡・吉井。 粘土帯Z巻。 A類。13片。
第38図62 写14-62	埴輪 円筒	E号墳石室 附近。	基部。 基部径(16.4)。	鉞物粒含。硬。淡橙色。	外面に荒い刷毛目。内面指撫、指搔落。 基部成形は粘土帯Z巻。上方紐作。	藤岡・吉井。8片。 粘土帯Z巻。B類。
第38図63 写14-63	埴輪 円筒	E号墳前 庭。	基部。 基部径(15.0)。	鉞物粒含。並。橙色。	外面に荒い刷毛目。内面は指撫、指搔落。 成形は紐作による。	藤岡・吉井。 B類。1片。

第5篇 遺物観察

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第38図64 写15-64	埴輪 円筒	E号墳前 庭。	基部。 基部径(15.4)。	鉾物粒含。硬。明橙色。	内・外面に細い刷毛目。内面は指撫、指 搔落。基部粘土帯Z巻。上方円形透。	藤岡・吉井。13片。 粘土帯Z巻。A類。
第39図65 写14-65	埴輪 円筒	E号石室前 埴輪列	基部。 基部径13.2。	鉾物粒含。硬。明橙色。	外面に荒い刷毛目。内面は指撫、指搔落。 基部粘土帯Z巻。上方は紐作。	藤岡・吉井。13片。 粘土帯Z巻。A類。
第39図66 写15-66	埴輪 円筒	E号墳前 庭。	基部。 基部径(15.0)。	鉾物粒含。硬。淡橙色。	外面は荒い刷毛目で、内面はさらに荒い。 粘土紐作。突帯1段目上に円形透。	藤岡・吉井。 B類。11片。
第39図67 写15-67	埴輪 円筒	E号石室前 埴輪列	基部。 基部径(17.8)。	鉾物粒含。硬。淡橙色。	外面に細い刷毛目。内面は指撫、指搔落。 基部は粘土帯か紐か不詳。	藤岡・吉井。 B類。5片。
第39図68 写15-68	埴輪 円筒	E号墳石室 前。	基部。 基部径19.4。	鉾物粒含。並。明橙色。	外面に細い刷毛目。内面は指撫、指搔落。 基部は粘土帯のZ巻1段、その上方を紐 作とする。突帯2段目上に透がわずかに 残存。	藤岡・吉井。 E号墳出土円筒 の最長例。 A類。18片。
第40図69 写11-69	土師器 台付甕	E号墳 IVトレ。	体部片。	鉾物粒含。並。暗褐色。	古式土師器片で器肉は薄作。外面に刷毛 目あり。	古式土師器。
第40図70 写11-70	土師器 高坏か	E号墳 IVトレ。	口縁～体部7片。 口径(22.0)。	鉾物粒含。並。橙色。	古式土師器片で内外面に細な研磨が施さ れる。高坏でなければ鉢。	古式土師器。
第40図71 写11-71	土師器 甕	E号墳。 IVトレ。	口縁部片。 口径(17.0)。	鉾物粒含。硬。暗橙色。	口縁下に沈線。口縁部の内外面横撫。肩 部以下篋削。内面篋撫。	
第40図72 写11-72	土師器 甕	E号墳。IV トレ。	口縁部片。 口径(19.0)。	鉾物粒含。硬。暗橙色。	口縁部の内外面に横撫。体部外面篋削。 口縁部形態のコ字形明瞭。	藤岡・吉井。
第40図73 写12-73	土師器 甕	E号墳。 IVトレ。	口縁～体部片。 口径(18.8)。	鉾物粒含。硬。暗橙色。	口縁部の内外面に横撫。体部外面は篋削。 内面篋撫。篋当痕あり。	
第40図74 写12-74	土師器 小形壺	E号墳。 IVトレ。	底部片。 底径4.8。	鉾物粒含。硬。淡橙色。	体部外面に篋削。内面に篋当痕あり。底 面はやや中凹みとなる。	6世紀代の小形 壺か。
第40図75 写12-75	須恵器 碗	E号墳。 IVトレ。	底部片。 底径(9.0)。	黒色物質含。硬。淡灰色。	高台は貼付。内外面滑らかであるが内面 轆轤目あり。高台は薄作で高い。	秋間か。
第40図76 写11-76	須恵器 大形甕	E号墳。 IVトレ。	頸部片。	白色鉾物粒含。焼締自然 釉かかる。黒灰色。	外面に波状文と沈線1条入る。内面に紐 作後の横撫入る。	乗附か。
第40図77 写13-77	埴輪 人物か	E号墳。 IVトレ。	手など細部貼付の 剥落片。	鉾物粒含。並。明橙色。 赤色顔料塗彩(トーン)。	帯状粘土の剥落部。外面に小三角形の刺 突文と赤色顔料塗彩。裏は剥落面。	藤岡・吉井。 赤色顔料塗彩。
第40図78 写11-78	埴輪 壺	E号墳。 IVトレ。	頸部～体部6片。 頸部径(14.0)。	鉾物粒含。並。暗橙色。 黒斑なし。	土師器にしては器内が厚過ぎるので壺形 埴輪か。内面紐作痕明瞭。外面に浅い平 行叩あり。内面当目なし。埴輪の平行叩 例は少ない。	壺形埴輪か。 埴輪の叩目例は 藤岡周辺に少数 あり。A類。6片。
第40図79 写15-79	埴輪 円筒	E号墳。 IVトレ。	中位片。 最大径(20.0)。	鉾物粒含。硬。淡橙色。	内外面荒い刷毛目。内面の整形下地は指 撫、搔落。突帯上透あり。紐作。	藤岡・吉井。 B類。2片。
第40図80 写15-80	埴輪 円筒	E号墳。 IVトレ。	中位片。 最大径(18.4)。	鉾物粒含。硬。明橙色。	外面に細い刷毛目。内面の整形下地は指 撫。突帯上に透あり。	藤岡・吉井。1片。 透あり。A類。
第40図81 写15-81	埴輪 円筒	E号墳。 IVトレ。	中位。 最大径(17.6)。	鉾物粒含。硬。淡橙色。	内外面に荒い刷毛目あり。内面下地は指 撫、搔落。内面に紐作痕あり。	藤岡・吉井。 B類。4片。

的場E号墳

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調	および 摘要	備考
第41図82 写15-82	埴輪 円筒	E号墳。 Ⅳトレ。	中位。 最大径(22.8)。	鉾物粒含。並。明橙色。	外面に細い刷毛目あり。内面に指圧痕と 撫。内面に紐作痕。	藤岡・吉井。 A類。3片。
第41図83 写16-83	埴輪 円筒	E号墳。 Ⅳトレ。	基部。 基部径(14.6)。	鉾物粒含。硬。明橙色。	内外面に細い刷毛目あり。内面に紐作痕 あり。内面下地は指撫と搔落による。 基部は粘土帯Z巻1段。	藤岡・吉井。 粘土帯Z巻。 A類。9片。
第41図84 写15-84	埴輪 円筒	E号墳。 Ⅳトレ。	基部。 基部径14.0。	鉾物粒含。並。明橙色。	外面に細い刷毛目。内面下地は指撫、圧 痕。内面に紐作痕あり。 基部は紐か粘土帯か不明。	藤岡・吉井。 A類。12片。
第41図85 写16-85	埴輪 円筒	E号墳。 Ⅳトレ。	基部。 基部径13.5。	鉾物粒含。硬。明橙色。	外面に細い刷毛目。内面の下地は指撫。 基部は粘土帯Z巻1段。上方紐作。	藤岡・吉井。6片。 粘土帯Z巻。A類。
第42図86 写12-86	土師器 杯	E号墳。 南トレ。	口縁～体部片。 最大径(13.8)。	鉾物粒含。並。橙色。	体部下半に篋削。口縁部の周辺にわずかに 横撫痕が残される。	藤岡・吉井。
第42図87 写11-87	土師器 高坏か	E号墳。 南トレ。	脚部片。 最大径(7.5)。	鉾物粒含。硬。暗橙色。	台付甕の脚部か高坏の脚部か不明。脚部 内に篋跡あり。	藤岡・吉井。
第42図88 写15-88	埴輪 円筒	E号墳。 南トレ。	基部片。 基部径(11.0)。	鉾物粒含。並。淡橙色。	外面に細い刷毛目。内面の下地に指撫、 搔落あり。内面に紐作痕あり。 基部は紐か粘土帯か不詳。	藤岡・吉井。 A類。2片。
第42図89 写16-89	埴輪 円筒	E号墳。南 トレ。	基部片。 基部径15.0。	鉾物粒含。硬。橙色。	外面に細い刷毛目。内面の下地に指撫、 搔落あり。内面に紐作痕あり。 基部は粘土帯Z巻1段。	藤岡・吉井・粘 土帯Z巻。 A類。4片。
第42図90 写15-90	埴輪 円筒	E号墳。 南トレ。	基部片。 基部径(20.0)。	鉾物粒含。硬。淡橙色。	内外面に荒い刷毛目。内面下地に指撫。 基部は粘土帯か紐か不詳。	藤岡・吉井。 B類。3片。
第42図91 写16-91	埴輪 円筒	E号墳。 南トレ。	口縁～中位。 口縁部径(29.2)。	鉾物粒含。硬質。暗橙色。	口縁部の内外横撫。先行して荒い刷毛目。 中央に円須透。内面紐作痕。	藤岡・吉井。円 形透。B類。6片。
第43図92 写11-92	須恵器 袋物蓋	E号墳。	天井部片。 最大径(8.0)。	白色鉾物粒微。硬。暗灰 色。	直口壺や短頸壺などの蓋か。萎小化のため か小形。内面に轆轤目。 外面は篋削後撫。摘みは貼付。	乗附。
第43図93 写13-93	埴輪 形象	E号墳。	人物の腕片。 最長7.0+α。	鉾物粒含。軟。明橙色。 赤色顔料塗彩(トーン)。	刷毛目整形痕は見られず、全体に撫あり 滑らか。部分的に篋による細部造形痕あり。 手の平の表現か。	藤岡・吉井。 赤色顔料塗彩。
第43図94 写13-94	埴輪 形象	E号墳。	粘土貼付文片。	鉾物粒含。軟。明橙色。	外面に荒く浅い刷毛目のような痕跡と刺 突文あり。旧態は表・裏のみ。	藤岡・吉井。
第43図95	埴輪 形象	E号墳。 くびれ部。	現品不明。記録写 真によると部材か。		記録写真によると左下が頭で右上が尻に 見え。部分的に剥落に見える箇所あり。 人物などに付された部材か。	概報によるとく びれ部出土とあ り。
第43図96 写15-96	埴輪 円筒	E号墳。	基部。 基部径(14.0)。	鉾物粒含。硬。明橙色。	外面に細い刷毛目。内面に指撫と、搔落 あり。	藤岡・吉井。 A類。3片。
第43図97 写16-97	埴輪 円筒	E号墳。	基部。 基部径15.0。	鉾物粒含。硬。明橙色。	外面に細い刷毛目あり。内面に指撫、搔 落あり。基部は粘土帯Z巻。	藤岡・吉井。2片。 粘土帯Z巻。A類。
第43図98 写16-98	埴輪 円筒	E号墳。	基部。 基部径(13.2)。	鉾物粒含。硬。明橙色。	外面に細い刷毛目あり。内面に指撫、搔 落あり。内面に紐作痕あり。	藤岡・吉井。 A類。7片。

第5篇 遺物観察

C・D号墳周辺と注記のある遺物

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調		および 摘要	備考
1	鉄器 鏝	C・D号墳 周辺。	部分欠損。 長径5.8。重(0.5)。	倒卵形の小形鏝で、中央に刀身用の倒卵形透あり。肉置は中央で薄く耳側で厚い。やや錆ぶくれがある。			表採遺物。
2	鉄器 鞘口か	C・D号墳 周辺。	部分欠損。 長径3.2。	鞘口金物か鎌金物で図左側端に折返しあり。筒金は薄く、左平面図下方に合目あり。接合は熱圧着か。			表採遺物。
3	鉄器 鎌	C・D号墳 周辺。	茎欠損。 残存長11.8+ α 。	茎は調査時欠損。全体に錆化顕著。尖根の右片刃で細身。下方に鎌区あり。篋被は長い。			表採遺物。
4	須恵器 鏝釜	C・D号墳 周辺。	体部片。 最大径(9.9)。	鉾物粒多。硬。暗灰橙色。	内・外面は撫。外面に紐作痕あり。鏝は貼付。吉井窯跡群特有のこわばった胎土。		吉井。
5	須恵器 提瓶	C・D号墳 周辺。	頸部2片。最大径(28.8)。	白色鉾物粒含。焼締。黒灰色。燻かかる。	大形提瓶の頸部か。頸部に掻目文あり。内面轆轤目あり。外面自然釉かかり黒光を呈す。		乗附。

的場E号墳第Ⅳ(南)トレンチ出土古瓦類

図版番号	種別	焼成地	厚さ	胎土 焼成				成形技法							整形・再調整		摘要			
				素地	夾雑物	焼色	色調	粘土板糸切	寄木	一枚	粘土	布	叩	篋	轆轤	布擦消		側部		
								凹	凸			合目	合目		撫		凹	凸	面取	
45図1	男か	乗・秋	1.3	密	少	硬	暗灰色	なし	なし	なし	/	なし	なし	縄	なし	なし	/	なし	/	全体的に器面荒れる。
45図2	女	秋間	1.8	粗	少	締	灰色	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	撫	なし	○	/	/	全体的に器面荒れる。
45図3	女	秋間	1.8	密	少	締	灰色	○	なし	○	/	なし	なし	素文	撫	なし	なし	/	/	全体的に器面荒れる。
45図4	女	乗・秋	1.9	密	少	締	灰色	なし	なし	○	/	なし	なし	素文	撫	○	なし	/	3	全体的に器面荒れる。
45図5	女	乗・秋	2.2	密	少	締	灰色	なし	なし	○	/	なし	なし	素文	撫	なし	なし	/	/	全体的に器面荒れる。

的場A・C、C、E号墳出土中・近世遺物図

図番号 写真番号	器種 器形	出土 位置	量目(cm) 口径・底径・器高 残存状態	胎土・焼成 色調		および 摘要	備考
第46図1	軟陶 播鉢	A・C号 墳。	体部片。 最大径(26.3)。	鉾物粒含。並。暗褐色。		内面に5+ α 条の卸目あり。内面に磨耗痕とハゼあり。燻かかる。	在地、15C後半～16C。
第46図2	陶器 播鉢	C号墳。	体部片。 最大径(29.0)。	鉾物粒微。並。黄灰色。鉄釉。		内面に13+ α 条の卸目と鉄釉。内・外面に凍ハゼあり。	美濃焼。18世紀頃。
第46図3	陶器 碗	C号墳。	底部片。 底径(5.5)。	鉾物粒含。硬。黄灰色。鉄釉(トーン)。		釉は飴釉調。外面と底は露胎となる。高台は貼付。	美濃焼。18世紀頃。
第46図4	軟陶 鉢物	E号墳。 石室内。	体部片。 最大径(13.8)。	鉾物粒微。並。黒色。燻焼。		植木鉢か。内面轆轤目あり。石室内出土であり、既掘時期を示唆するものとして重要。	在地製か。近代・現代。

第6篇 本郷的場古墳群出土土器の胎土分析

小 沢 達 樹 (群馬県工業試験場)

大 江 正 行 (財群馬県埋蔵文化財調査事業団)

1. 試料の選択と目的

今回の分析試料はすべて榛名町本郷的場古墳群から出土した須恵器類で、経費の都合により3点とした。試料選択は出土数のある近接窯跡群製と見られる2点と、東海地方製と見られる1点とを選んだ。

試料番号734は、肉眼観察上、藤岡・乗附・吉井か不明確で、どの窯跡群の領域に入るか知りたい。

試料番号753は、肉眼観察上、焼膨れの多さは県内の製品ではなく、素地の粒状は中世の渥美焼を思わせるものがあり、既搬入製品との比較を見たい。

試料番号736は、肉眼観察上、秋間窯跡群製と見られ、その領域に入るかを知りたい。以上を目的とした。

2. 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析

試料 供試料を振動ミル粉碎機により $10\mu\text{m}$ 以下に粉碎し、5～10gを油圧プレス機を用いて径4cmの円板状に成型して使用した。

分析装置 理学電機(株) KG-4型

測定条件

分光結晶; Fe, Sr, Rb には LiF ($2d=4.028\text{\AA}$)

Ca, K, Ti, Si, Al には EDDT ($2d=8.088\text{\AA}$)

Mg には ADP ($2d=10.648\text{\AA}$)

検出器; LiF を使用したとき S.C EDDT, ADP を使用したとき P.C

時定数; 1

計数法; Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rb はチャートによる。Si, Al, Mg は定時計数法による。チャートの速さは、 $4^\circ/\text{min}$ とした。

波高分析器; 積分方式

測定線; $\text{FeK}\beta$, $\text{CaK}\alpha$, $\text{KK}\alpha$, $\text{TiK}\alpha$, $\text{AlK}\alpha$, $\text{MgK}\alpha$, $\text{SrK}\alpha$, $\text{RbK}\alpha$ の各一次線を使用した。

X線照射面積; $20\text{mm}\phi$

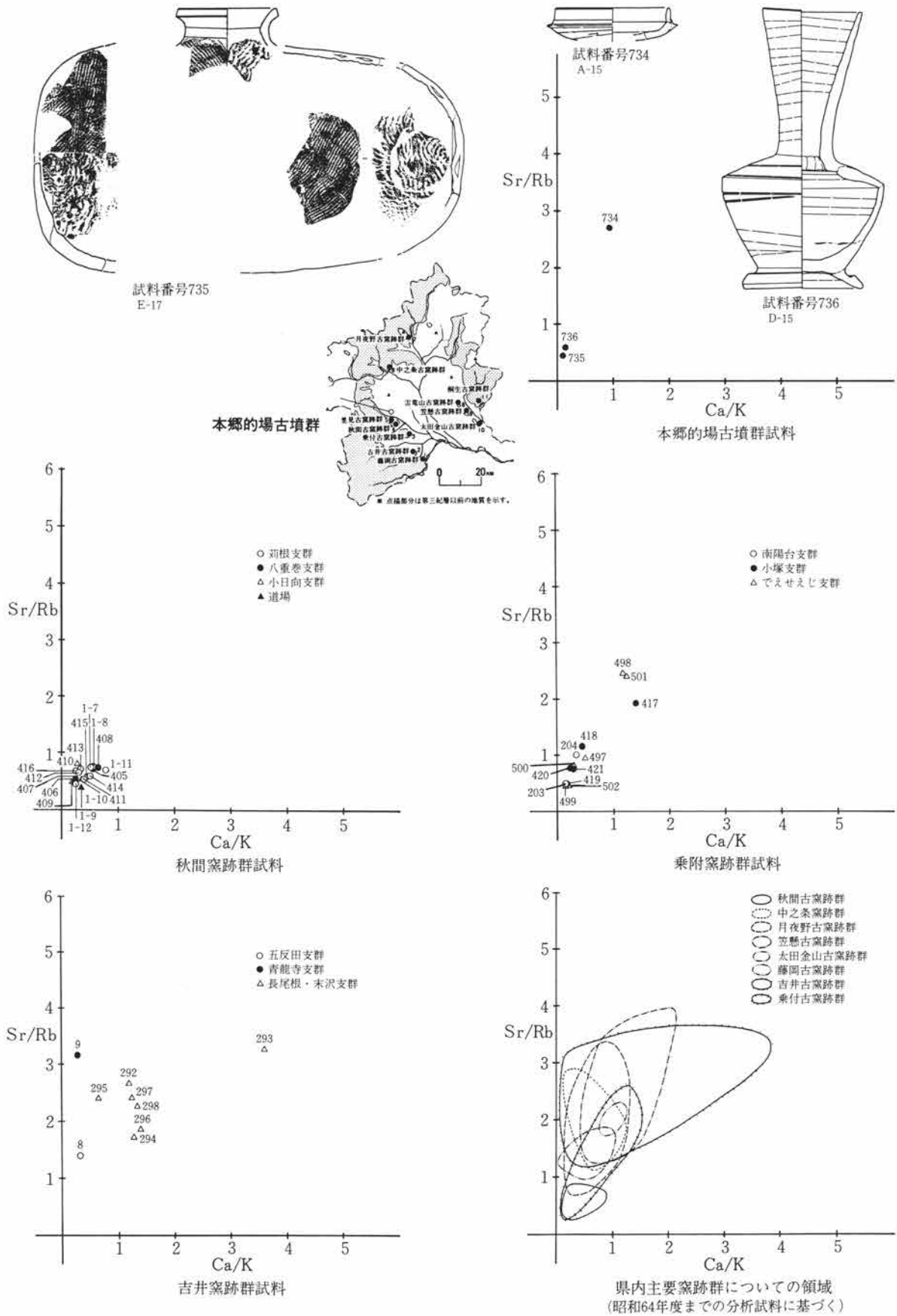
測定方法 検量線法; 6点

標準試料; 群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器(295, 310, 336, 345, 360, 380)を湿式化学分析して、標準試料とした。

3. 分析結果 (第47図・附表)

試料番号734は吉井窯跡群の既領域に入り、乗附窯跡群の既領域に近接する。試料番号736は秋間窯跡群の既領域に入る。試料番号735は、温井遺跡(当団報告1981) 試料番号12～15、清里・陣場遺跡(当団報告1982) 試料番号9で行なった計5点の渥美・常滑焼の領域を設定(Ca/K(%) 0.11～0.22, Sr/Rb(%) 0.59～0.90) したとすれば、Sr/Rbが0.48のため近接して外れるが、県外の製品は同原素値が低いいため、今後も渥美・常滑焼の試料の増加が必要である。(2を小沢、1・3が大江による)

第6篇 本郷の場古墳群出土土器の胎土分析



第47図 Sr/RbとCa/Kグラフ

胎土分析

本郷の場古墳群

試料		成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K (%)	Sr/Rb (%)
A号墳15、須恵器	734		65.97	21.53	5.25	0.79	0.84	1.15	1.06	0.91	2.71
E号墳17、須恵器	735		66.33	21.44	4.38	0.86	0.27	1.22	2.05	0.10	0.48
D号墳15、須恵器	736		71.88	15.60	5.43	0.59	0.35	1.22	1.95	0.16	0.63

秋間窯跡群

試料		成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K (%)	Sr/Rb (%)
苜根支群 I ~ III 灰原	塚廻07		66.9	23.0	4.48	1.09	0.46	1.69	1.19	0.53	0.78
〃	塚廻08									0.55	0.77
〃	塚廻11									0.79	0.71
〃	塚廻12		68.9	20.0	4.76	0.89	0.30	1.14	1.75	0.24	0.46
〃	411		76.0	15.8	3.83	0.88	0.49	0.88	1.75	0.39	0.55
〃	412		61.6	26.3	8.95	1.38	0.38	0.88	1.70	0.31	0.64
〃	413		69.9	19.8	5.13	0.96	0.40	1.00	1.52	0.36	0.68
〃	414		65.0	20.9	8.21	1.03	0.51	0.82	1.42	0.50	0.58
〃	瓦 415		66.9	18.9	7.15	0.92	0.44	0.86	1.31	0.46	0.58
〃	瓦 416		71.1	20.7	3.95	0.98	0.24	0.93	1.24	0.27	0.68
八重巻支群	瓦 405		71.6	20.5	6.50	1.03	0.61	0.53	1.32	0.64	0.72
〃	406		72.3	21.3	4.43	0.85	0.37	1.06	1.95	0.26	0.51
〃	407		73.8	17.1	5.05	0.92	0.40	0.69	2.03	0.28	0.54
〃	408		71.6	19.0	5.75	1.01	0.73	0.89	1.57	0.64	0.75
日向支群	409		74.2	19.5	3.95	0.95	0.58	0.84	1.69	0.23	0.48
〃	410		74.6	15.1	4.42	0.93	0.45	0.82	2.19	0.28	0.79
道場	塚廻09									0.35	0.40
〃	塚廻10		68.9	13.9	5.24	1.00	0.35	1.20	1.57	0.31	0.56

乗附窯跡群

試料		成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K (%)	Sr/Rb (%)
南陽台支群	203		75.2	16.2	2.75	0.99	0.29	1.28	2.25	0.14	0.51
〃	204		69.6	20.6	4.26	0.96	0.52	0.77	1.64	0.36	1.00
小塚支群	417		66.9	18.0	7.25	0.97	1.18	1.17	1.15	1.41	1.82
〃	418		70.2	15.7	5.61	0.87	0.61	0.97	1.85	0.45	1.15
〃	419		69.3	17.5	6.45	0.78	0.44	0.98	2.78	0.22	1.00
〃	瓦 420		72.7	16.6	4.25	0.81	0.35	0.64	1.96	0.24	0.78
〃	瓦 421		71.6	18.8	3.75	0.88	0.36	0.83	1.53	0.32	0.75
でえせえじ支群	瓦 497		66.6	21.1	5.82	0.90	0.45	1.18	1.16	0.46	0.97
〃	498		68.4	17.6	5.35	1.27	1.07	1.09	1.18	1.20	2.45
〃	499		75.4	17.0	3.12	0.82	0.19	0.38	1.71	0.13	0.47
〃	500		69.6	21.8	4.00	0.82	0.33	0.90	1.29	0.31	0.85
〃	501		69.4	17.2	6.02	1.26	1.11	1.07	1.08	1.25	2.40
〃	502		73.1	17.2	5.20	0.82	0.31	1.11	2.13	0.18	0.48

吉井窯跡群

試料		成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K (%)	Sr/Rb (%)
五反田支群	日高 8		67.3	17.7	3.00	0.74	0.53	0.83	2.13	0.33	1.40
青龍寺支群	日高 9		69.8	20.2	3.30	0.87	0.36	0.49	1.54	0.30	3.16
長尾根支群	292		71.3	17.0	4.02	0.95	1.39	0.82	1.55	1.19	2.65
〃	瓦 293		57.5	21.3	7.45	1.16	2.19	0.60	0.78	3.68	3.28
末沢支群	294		61.8	18.0	7.80	1.17	1.51	2.50	1.55	1.28	1.71
〃	瓦 295		63.7	23.8	6.70	1.21	0.66	0.73	1.35	0.65	2.39
〃	296		60.3	18.0	6.00	1.20	1.73	3.23	1.62	1.41	1.85
長尾根支群	297		71.3	15.7	4.25	0.68	1.39	0.70	1.47	1.25	2.40
末沢支群	瓦 298		65.7	17.2	7.52	1.15	1.76	1.67	1.71	1.35	2.23

第7篇 考察

1. 本郷的場古墳群の形成

発掘調査を実施した4基の古墳については、その調査概報の作成の時点で一応の考察を試みている。その考察で取り上げた第1点は、本郷的場地区に所在する古墳群の形成についてであり、4基の古墳がいずれも異なる様相を示している点を指摘している。一般的に見て、古墳群の形成は、いくつかの類型に分類されることが想定される訳であるが、本郷地区所在の古墳群については烏川左岸の丘陵性台地上に、西方から奥原古墳群、的場古墳群、下長古墳群が分布している。これらの古墳群の構成のあり方を見ると、奥原古墳群は57基の円墳が、群集し、そのうち1基(21号墳)が竪穴系主体部埴輪円筒列をもつ小円墳で6世紀中葉期のものに位置づけられる以外は、いずれも横穴式石室を主体部とし、埴輪類を施設していない円墳で、それらは径28mの墳丘規模をもつ53号墳を中核として形成された傾向が強うかがえ、7世紀代の形成であることが注意される。この奥原古墳群の構成は世代を異にする古墳が存在するとしても一系の家族による何代もの間にわたる集層的構成とは考えられない。同一の村首層の支配下に属した村落社会の集合墓地的な様相を示し、7世紀前半から7世紀後半にかけて形成されたものであろう。このような奥原古墳群に対して、的場古墳群の分布には初期古墳の様相を伝えている本郷大塚古墳は別格としても、ジドメ塚古墳や、今次の調査で帆立貝形墳丘を有し横穴式石室を主体部とし、埴輪類を施設している稲荷塚古墳(E号墳)などが存在し、後期古墳群の形成が少なくとも6世紀中葉ごろから継続して進展したものであることが推定される。そこで、4基の古墳の構築年代について検討したい。形式的に見て、4基のうち最古のものはE号墳(稲荷山古墳)であり、E号墳の場合、本古墳群においては大塚古墳に次ぐ規模であり、帆立貝式古墳で、周堀を有し、葺石、埴輪類の存在する他、主体部主軸は墳丘主軸に方向を一致し、西面していること、石室床面の位置が墳丘の比較的高所であり、袖無形石室のプラン構成は夾長であり、壁面に丹塗しているところは他には見られない特徴であろう。群馬県内に所在する古墳では横穴式石室を有するものの初現期に相当するものであることが推定されるのである。

帆立貝式形式の墳丘をもつ古墳は群馬県内においては赤堀村茶臼山古墳、太田市女体山古墳、太田市高林中原古墳、伊勢崎市上植木稲荷山古墳、箕郷町上芝古墳などが知られている。これらの他、前方部が低くはり出しているものに粕川村鏡手塚古墳などがある。太田市女体山古墳は長径100mにも達する大古墳であるが、他は30m～50m前後である。埴輪類はいずれも樹立されているが、人物像が存在するのは箕郷町上芝古墳が確かなものにすぎない。他は円筒類、器財、家形等の埴輪類である。赤堀村茶臼山古墳のごときはその代表例である。一方、主体部施設については竪穴系の埋葬施設を有しており、上芝古墳が横穴式石室のようである。帆立貝式古墳が茶臼山古墳出土の石製模造品等の遺物的特徴から五世紀代にその盛行をみたとするのは正しいのであるが、その終末をE号墳の時期までに求められるのであり、横穴式石室初期まで存続していたことになる。この意味では上芝古墳との共通性を求めてよいのではないかと思う。さらに、E号墳の主軸に一致する石室方向、墳丘上部に位置している構造は竪穴式石室の特徴をそのまま引きついで傾向さえ認められるのである。石室が西面する古墳は高崎市オンベ入古墳群にも認められ、そのプラン構成は本古墳と共通するらしい。そして本古墳の石室の特徴である袖無形横穴式石室の形態が夾長であることは玄室長さとの比が3:1の割合であり、前橋市西大室前二子塚古墳にも共通するところである。両者の間には壁面丹塗の石室という点においても共通している。また、高崎市筑縄町、烏稲荷神社古墳は墳丘径45mの大形円墳の形状を示しているが、その主体部はE号墳と同様に西北位に開口する袖無形の横穴式石室である。出土品の一部が神社社務所に保管され

ており、そのなかに須恵器大形器台や高坏、甕などがある。これらの須恵器類は、前二子古墳の須恵器類と形式的には共通している。E号墳と共通する様相をもっともよく示している。烏稲荷神社古墳が保渡田古墳群の地域圏にあり、その墳丘規模から同地域における有力者層の構築になったものであることが推定される。榛名山南面の地域にあっては少くとも横穴式石室の採用は保渡田古墳群の薬師塚古墳が造営される段階で大形円墳あるいは帆立貝形古墳を造営する階層によってなされたことをうかがわせる。その意味では、E号墳は本郷地域の後期古墳群を形成した村落社会の首長的地域にあった有力者層の構築になるものであり、本郷古墳群の形成の初現的性格をもつものと推定される。6世紀中葉に位置するものではないかと考えた。

これに対して、A号墳、C号墳、D号墳の三基はE号墳ほどに特徴を有してはいない。後期群集墳を構成する古墳の内容である。奥原古墳群と同じような性格をもつ古墳群を形成するものの一つとして位置づけられるものであろう。奥原古墳群に対応する古墳群が的場古墳群として形成されるなかで、出現した古墳であったと推定される。次にそれぞれについて検討してみよう。

A号墳の場合、墳丘は周りを削りとられていたが、南面する横穴式石室の全長を半径とする規模であり、墳丘規模にたいする横穴式石室の規格化が見られる。周堀は明確な掘り込みは存在せず、周囲を削平した状態である。それ故に石室前面の両側に連なる葺石が根石羨道部と連続し、石室入口部の装飾的施設としての性格が強張された構造である。埴輪類は存在しない。横穴式石室の構築は川原石の乱石積であるが、根石部に比較的大形石材を用い、石室造営の二次的な工作が注意される。E号墳の場合、単葬墓的性格を見ることができ、A号墳には二次埋葬を営む多葬墓の性格がうかがえる。石室構築面が当時のほぼ地平面に近いところに位置しているのであり、村落共同体を構成する家族の墳墓としての石室規模を意図した古墳構築概念が定着した古墳であることを推定できる。

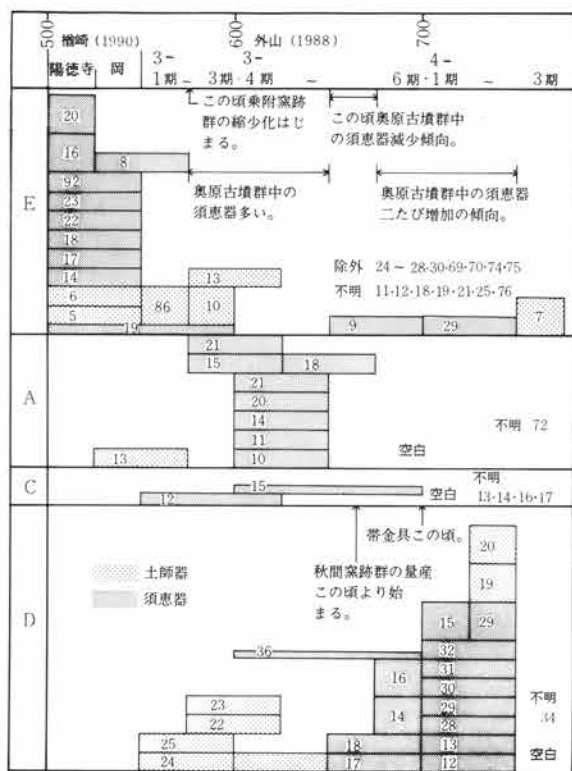
C号墳は石室部根石部分を中心に残存していた。その規模、構築の傾向はA号墳に類似しているが、床面位置が当時地表面を掘り下げている。すなわち、石室の規模にたいして墳丘積土の高さが低いということを示すものであり、墳丘の縮小化がうかがえる。この傾向はD号墳において特に顕著である。C号墳の石室全長は墳丘径の約3分の1を占めている。

D号墳は墳丘規模の縮小化が顕著であり、石室全長は墳丘径の約8分の5を占めている。地表面をローム層上面まで掘り下げ、その面を石室床面としているから、残存する石室奥壁部の高さが1.45mであり、約半分下部は地平面下ということになる。玄室のプランは、長さとの比が2、1、羨道部は石室全長の約2分の1を占めて、前面には前庭を施設している。この前庭の両側は2段石積で区画されているが、その連がりには墳丘葺石として一周する形をとらず、石室前面のみ装飾するのみである。周囲は削平整地されたにすぎない。特に前庭部から発見の須恵器と玄室内発見の金銅製帯金具類は奈良時代の特徴を伝えるものであり、横穴式石室古墳終末期のものといえよう。墳丘規模が小形化し、それ故に石室構築が半地下式になる例は南関東地方で往々見られるところであるが、伊勢崎市上原古墳は蔵手大刀を出土し、吉井町神保城古墳は立鼓柄共鉄造大刀を出土し、ともに奈良時代の構築になる古墳である。この2基においても半地下的な構築の方法が認められる。

以上のことから見て、今次調査の4基の古墳の編年は6世紀中葉から7世紀末にかかる期間において、E号墳→A号墳→C号墳→D号墳という順位に位置付けられるが、これらの古墳成立の過程においてはA号墳築造の段階において、群集墳として少くとも三支群に分立する発展を見たことが推定される。すなわちA号墳、C号墳、D号墳は本郷地区に成された古墳群の一支群としての的場古墳群を構成したものと推定され、本郷古墳群を形成した村落社会にあって中核的な位置を占めた家族達が形成した古墳であったものとするのが妥当である。(梅沢)

2. 各古墳の機能時期

各古墳の機能時期に関して土器類から考えてみたい。まず個体毎の生産地を古墳築造順のE→A→C→D号墳の順で見ると、E号墳-乗附窯跡群6・秋間3・搬入4、A号墳-乗附(?)含)8・秋間?1・搬入(?)含)2、C号墳-乗附(?)含)6、秋間?1、D号墳-乗附(?)含)10、秋間(?)含)9となり、古い段階は乗附は乗附窯跡群の占める割合と県外からの搬入製品の量が多く、D号墳に至るにしたがい秋間窯跡群製品の占める割合が高くなり、地域の生産状況が素直に反映されている。近接窯跡群の生産実態の把握は1989年に安中市教育委員会により詳細な分布調査がなされたが、整理中であり、乗附窯跡群について詳細な分布調査はなされていない。そのため窯跡群からの変遷観を援用することができないが、近年外山政子が、乗附窯跡群に近接した高崎市田端遺跡の整理結果に基づいて6世紀後半以降の序列(「田端遺跡の変遷」『田端遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか1988)を成しているのと、6世紀前半および後期古墳時代の須恵器については檜崎彰一「土師器・須恵器」『日本の陶・磁』(中央公論社)1990を基本的な概念の基として、4基の古墳出土の時期別存在量を概念的に見ると次表のとうりとなる。E号墳については、在地製品の多くに萎小化傾向があり、それは前出では陽徳寺段階に先立つのであるが、現状ではそれが地域の窯跡群単位で本当に先立つのか確証がとれないため岡段階にまたがせた。この頃に出土量の頂部があり、古墳の築造は6世紀前半頃と考えられる。搬入製品に陽徳寺段階16、岡～福田段階8がある。また、この頃の須恵器の石室への副葬は築瀬二子塚(安中市)、前二子(前橋市)、恵下古墳(伊勢崎市)、有瀬Ⅱ号(子持村)、権現山Ⅱ号(伊勢崎市)では同時焼成と考えられる多数種を一括(古墳への副葬品として特別生産した可能性大)供給し、それを副葬した場合と、多次元生産と供給により、可成りがばらばらの組み合わせで副葬された場合とがあり、E号墳では前者を感じさせるものは少なく、後者の副葬であったようである。A号墳は頂部が7世紀初頭頃にあり、築造の当初はその頃と考えられるC号墳は遺物量が少なく判然としないが、13-17の4個体の



古墳別土器の消長概念

叩・当日連打の繰返し手法は共通するため、県内の7世紀代の遺構から多く出土する甕類の外面の部分掻目(15)の段階を主体時期としうる。D号墳は頂部が6世紀後半頃、7世紀後半頃、8世紀前半頃に認められる。石室構造のうち袖石を玄門柱石とする段階は、当地域では7世紀以降(松本浩一「群馬県における横穴式石室の前庭について」『古代学研究80号』1976ほか)と考えられているため、6世紀後半頃の一群については別時元の存在理由があったと考えられる(別古墳からおよぶとか)。7世紀後半に次の頂部が捉えられ、それが古墳築造の頃と考えられる。さらに8世紀前半の頂部は前庭部出土の一群が主体を占め、その中に初頭頃の個体と、中頃に近い個体とがあるため、初頭頃に前庭が付設され、中頃までその後の祭儀がなされたと考えられる。また石室内出土の帯金具については8世紀初頭頃(式制化の慶雲四年(707)以前)における郡司層級に匹敵する被葬者が特定され地域にとって極めて重要である。(大江)

写 真 图 版



的場 A 号墳の墳丘と石室 南→



的場 A 号墳の調査初期段階の石室前状況 南東→



的場 A 号墳石室 南→



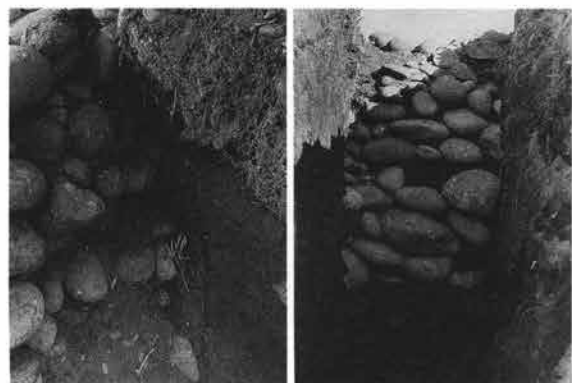
的場 A 号墳石室奥壁と入口 南と北→



的場 A 号墳石室前と西側葺石 南→



的場 A 号墳 E (右) ~ G トレンチ 南東→



的場 A 号墳 A (左)・H トレンチ裏込状況 南東と西→

写真図版 2



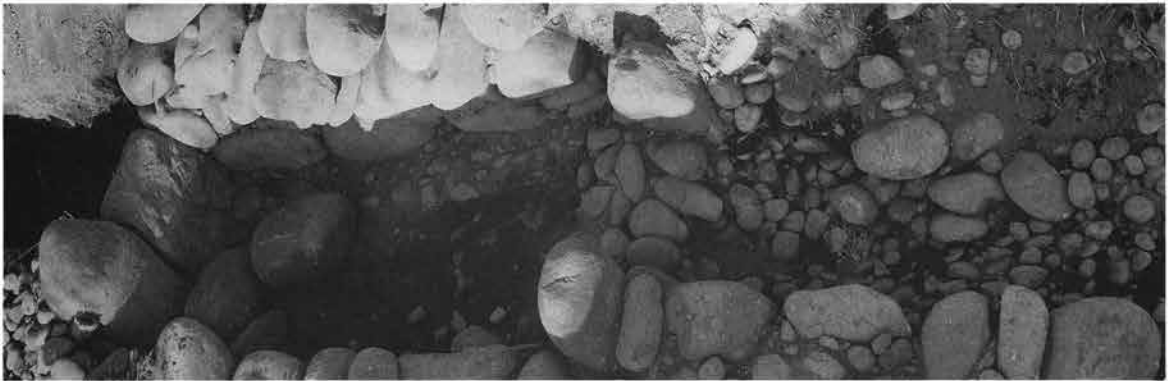
的場 A 号墳出土遺物 金属器は 1 : 2、20は 1 : 4、他は 1 : 3



的場C号墳の墳丘と石室 南西→



的場C号墳石室 南西→



的場C号墳石室 南西→



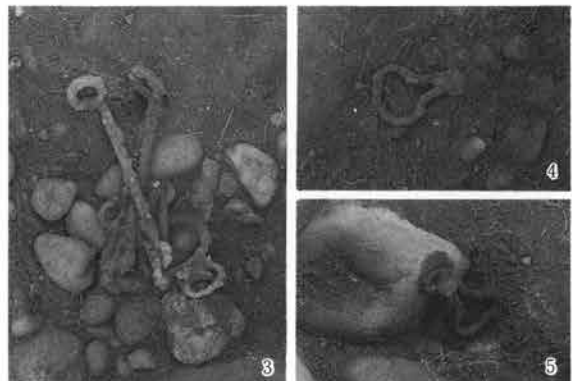
的場C号墳玄室左壁積石状況 東→



的場C号墳の石室前から奥壁を望む 南→

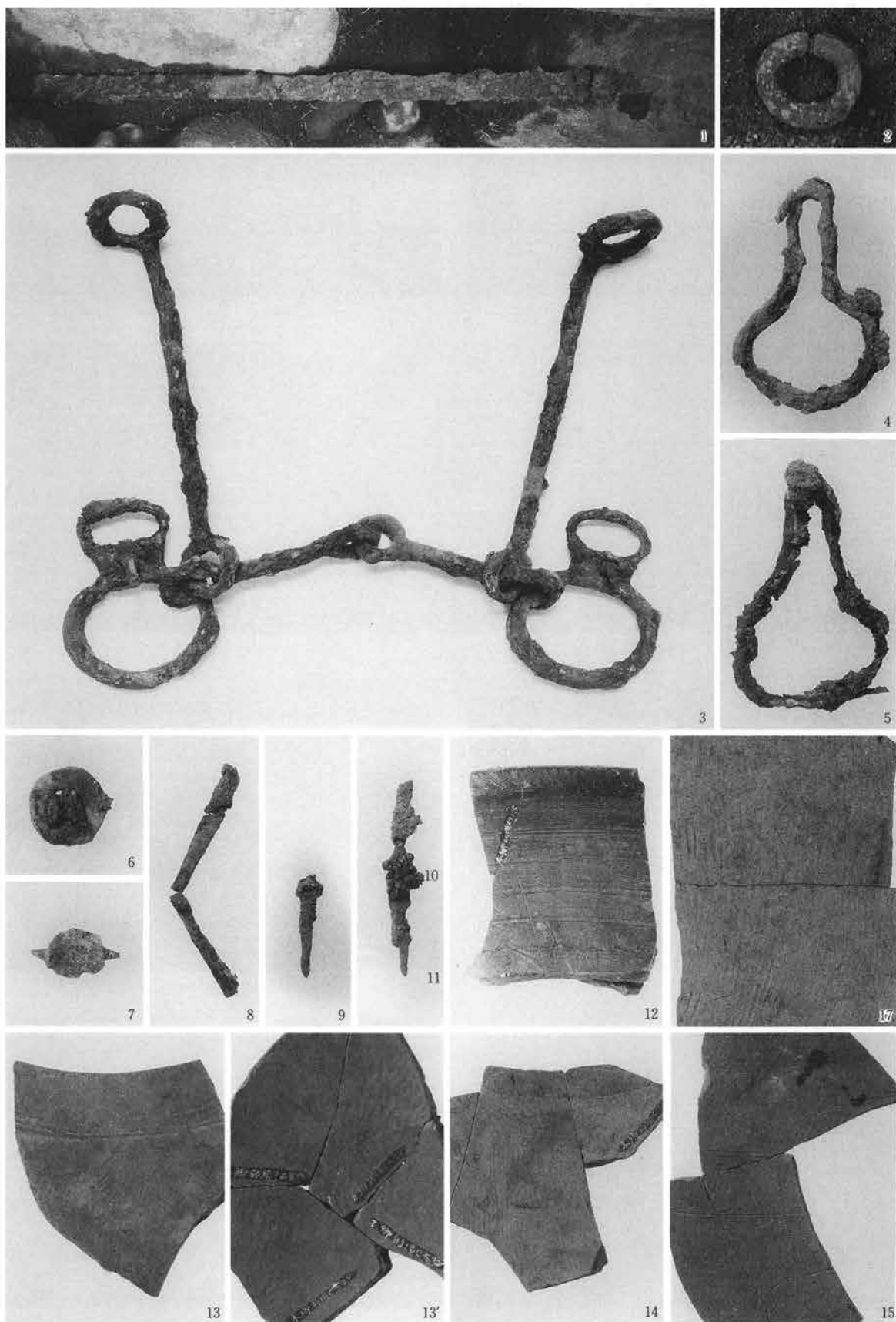


的場C号墳大刀出土状況 東→ 遺物番号1



的場C号墳馬具出土状況 遺物番号3～5

写真図版 4



的場C号墳出土遺物 金属器1：2、他は1：3



的場D号墳石室被覆状況 南→



的場D号墳石室被覆状況 北→



的場D号墳玄室周辺の被覆と裏込石組上面 南東→



的場D号墳羨道天井石と被覆状況 西→



的場D号墳石室と被覆・裏込状況 南→



的場D号墳玄室左壁石積状況 東→

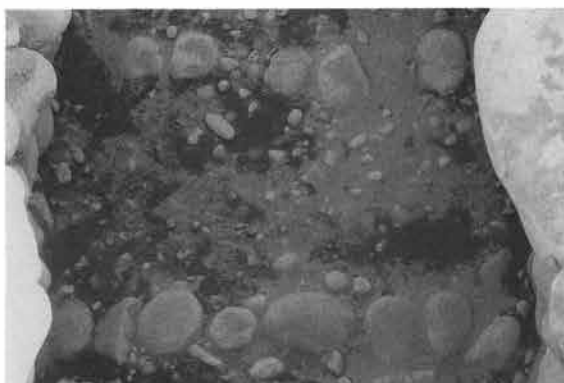


的場D号墳石室奥より玄門を見る 北→



的場D号墳石室入口と前庭 南東→

写真図版 6



的場D号墳玄室間仕切 奥壁→



同左間仕切間における人骨出土状況 上が西



的場D号墳帯金具出土状況 右下隅が北



同墳前庭左石組上面出土須恵器(左15・右14) 南西→



同墳前庭左石組下面出土須恵器(左13・右12) 東→



同墳前庭右石組裏より出土の遺物番号15下半 南→



同墳前庭右裏出土の遺物番号16 南→

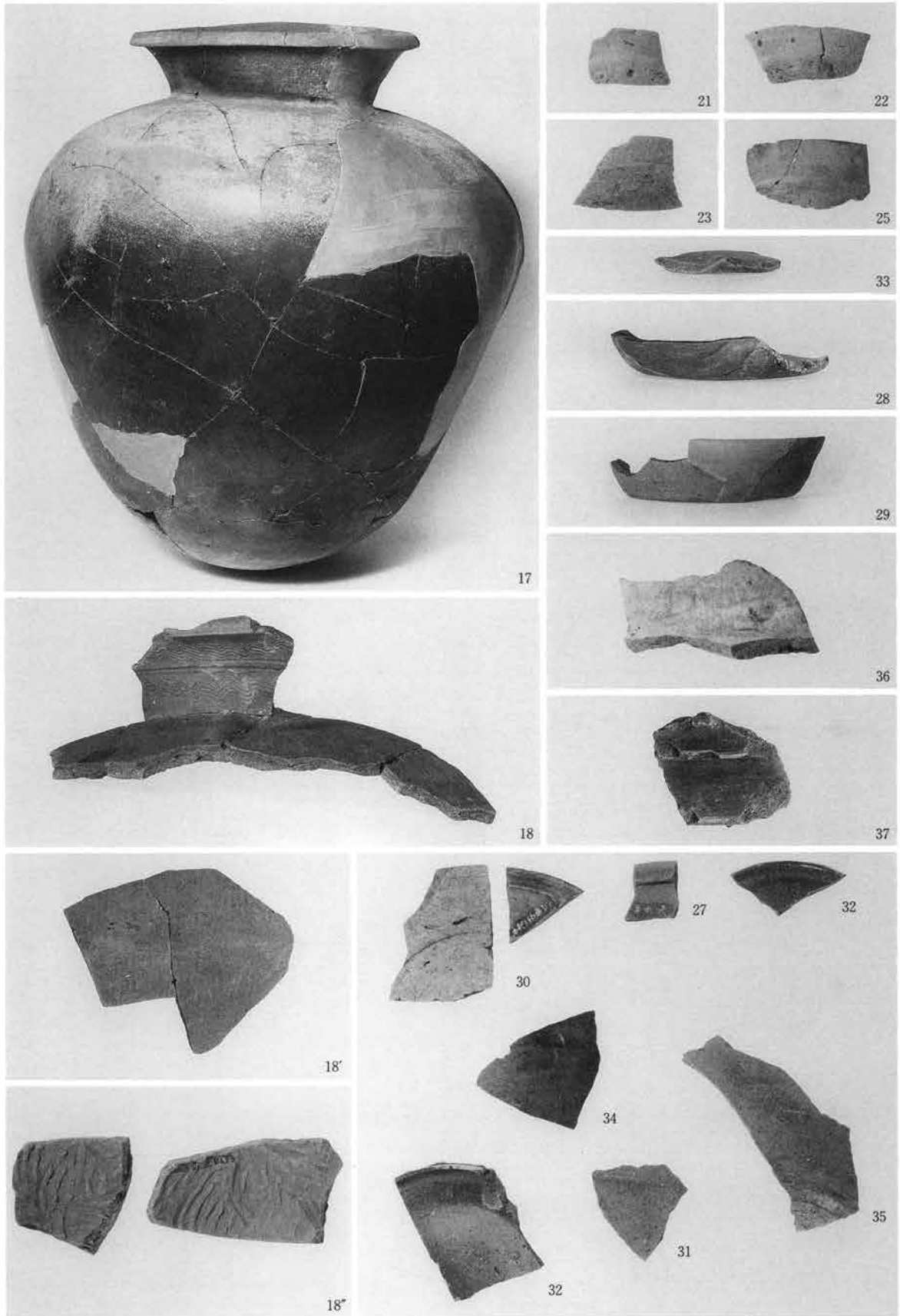


同墳前庭右裏出土の遺物番号17、右端16 西→



的場D号墳出土遺物 1~11は1:2、14~16は1:4、他は1:3

写真図版 8

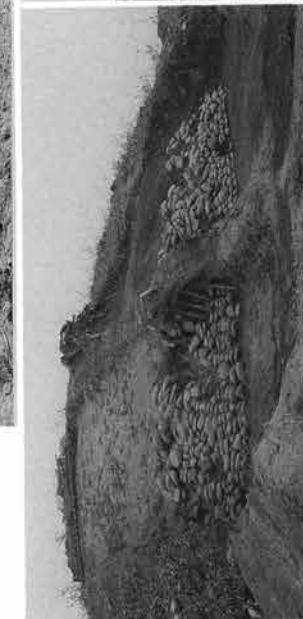


的場D号墳出土遺物 17・18は1：4、18'・18''を含む他は1：3



(左) 的場E号墳
後門部の調査状況
西→
正面石室と被覆石組
下方に葺石と埴輪列

(下段左より)
後門部葺石 東→
石室入口を望む 西→
前方部葺石 南西→





(左) 的場E号墳石室と被覆
西→

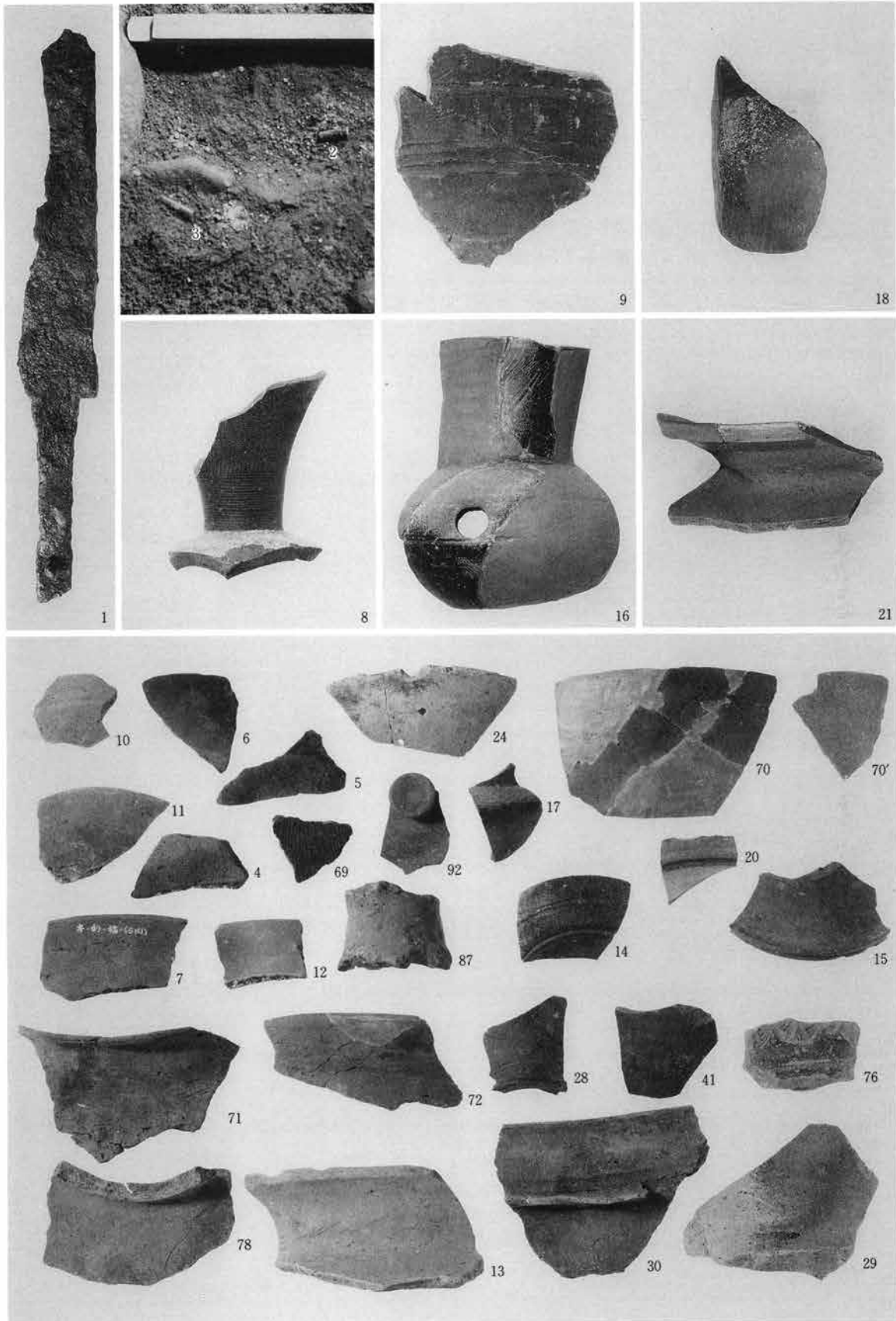
(左中) 石室前から奥壁を望む
西→

(左下) 石室右壁石積状態
北西→

(右下) 石室奥壁石積状態
西→

(下) 管玉出土状態



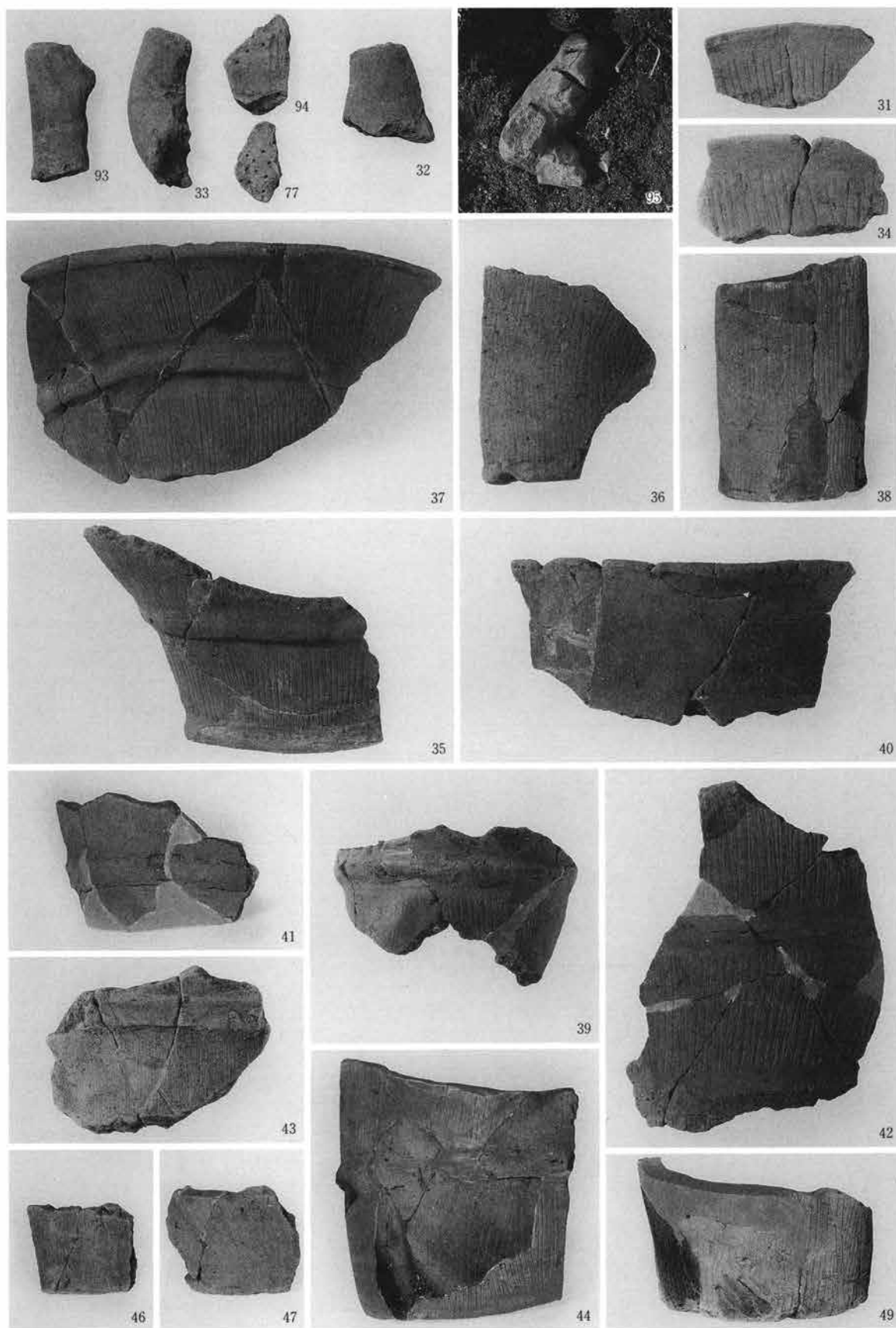


的場E号墳（稲荷塚）出土遺物 1は1：2、2・3を除き1：3

写真図版12

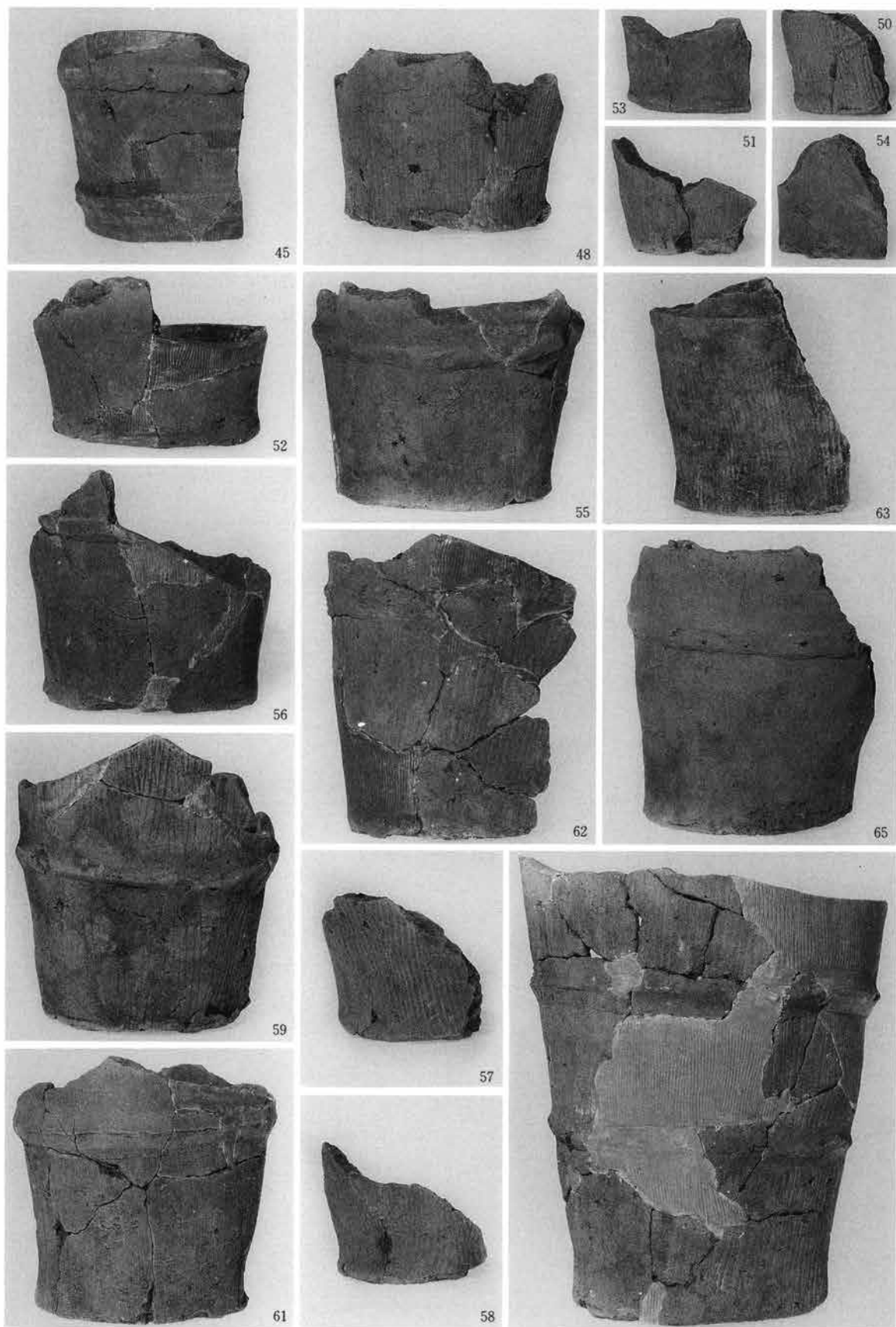


的場E号墳出土遺物 22、23のみ1：4、他は1：3

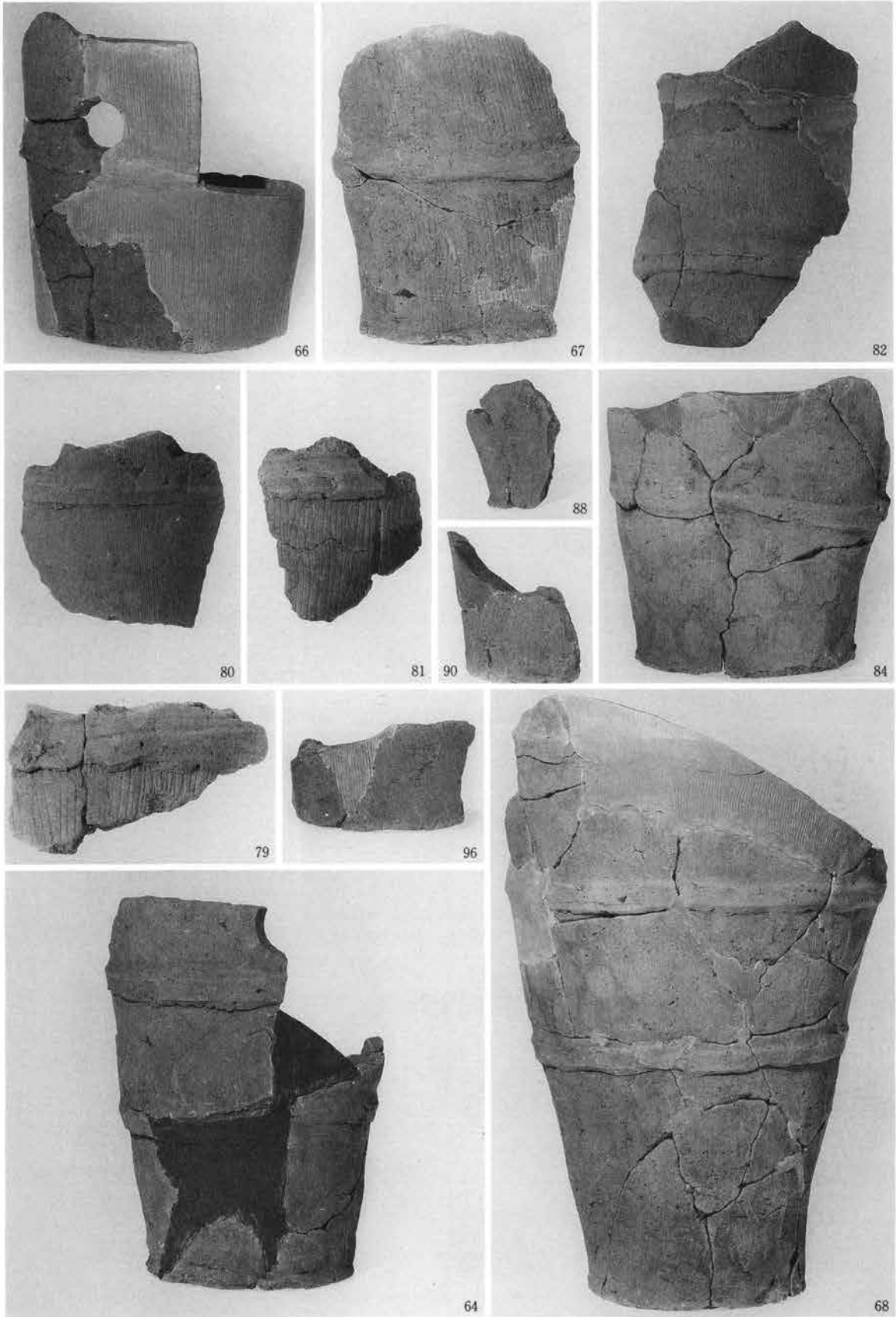


的場E号墳出土遺物 1:3

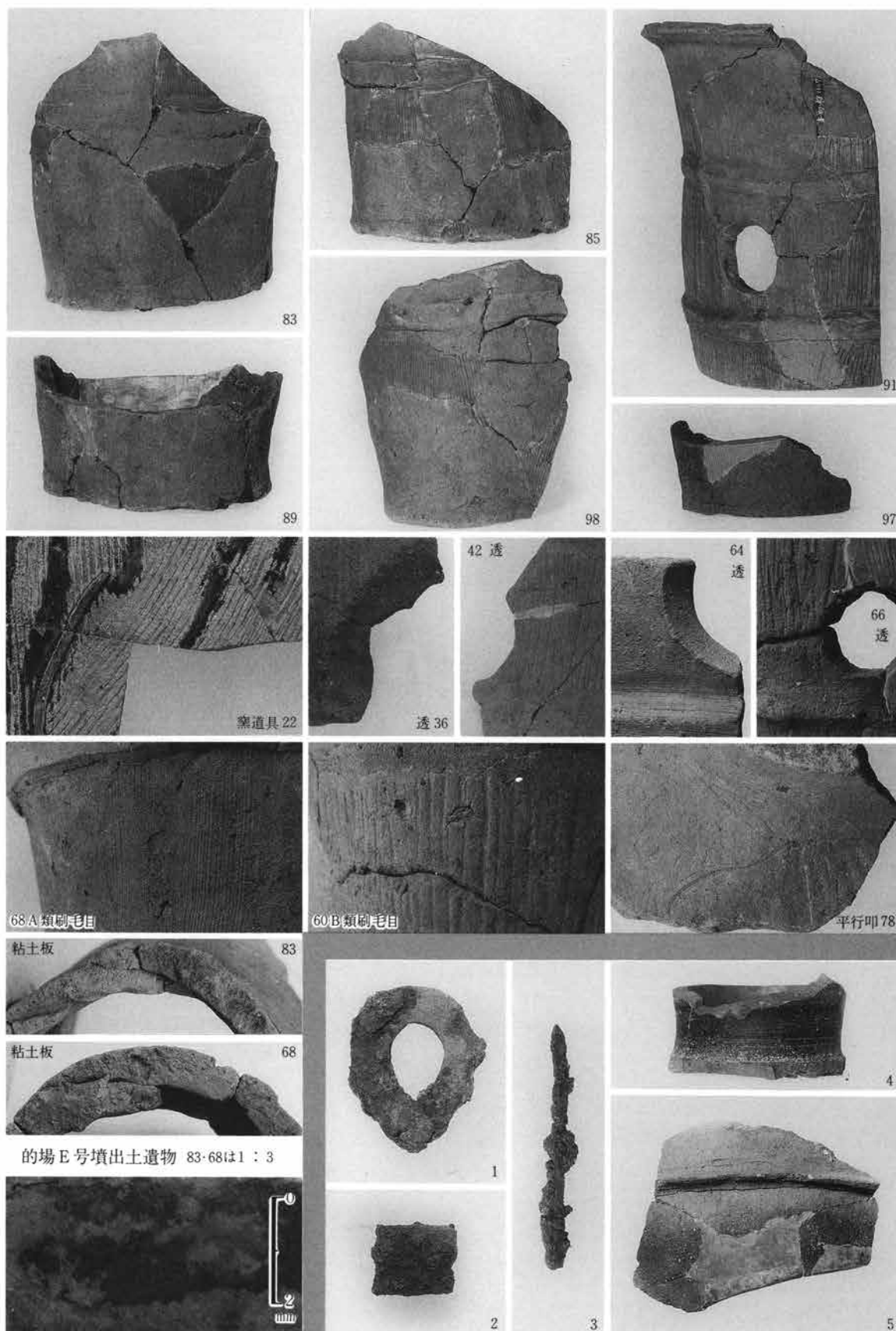
写真図版14



の場E号墳出土遺物 1:3



の場E号墳出土遺物 1:3



的場D号墳巡方3 拡大

的場C・D号墳の周辺表採遺物 1~3は1:2、他は1:3

本郷の場古墳群

—(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第108集—

平成2年3月15日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会

前橋市大手町1丁目1番1号

電話 (0272) 23-1111

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511

印刷／株式会社 前橋印刷所